
テレポーター

SoLa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テレポーター

【Nコード】

N5945W

【作者名】

Sola

【あらすじ】

俺こと中条聖夜は、ある日親に捨てられた。理由は、魔法が使えないから。代々魔法とは無縁だった家庭に、膨大な魔力を宿して生まれた俺。未知なる魔法に、どう対処したらいいのか分からなかったってわけだ。けれども捨てられたその日、両親と共にやってきた初見の女性。その女性は俺にこう言った。私の弟子になりなさい、と。…今思えば、それが俺の人生の転機。呪文詠唱ができないというハンデを抱えながらも、魔法使いとして生きる道を選んだ俺は…？

第0話 中条聖夜とは（前書き）

初めまして、S o L aと申します。

オリジナル小説を初投稿させて頂きます。

右も左も分からぬ若輩者ですが、これからよろしく願います。

第0話 中条聖夜とは

「ごめんなさい」

深く、深く。頭を下げられる。

正直な話。俺は悲しいとか寂しいとか。ふざけんなどという憤怒とか。そういった感情よりもまず先に「ああ、やっとこの時が来たのか」と、そう思った。

髪の色は、最初から白かったわけじゃない。この“力”も、最初から使えたわけじゃない。ある日、突然だった。

俺の家系は、代々魔法なんて言葉には無縁も無縁。魔法使いと呼ばれる人間がこの世界に相当数存在し、普通にそういった類の学校や会社なんかもあって世間一般に溶け込まれていることくらいは知ってます、程度の無関心っぷり。

そもそも魔法なんてのは先天的なものであり、ある日突然開花しましたなんてものではない。もちろん、魔法を使えない人間にも魔力つてのは存在しているが、それはあくまで生命活動を維持するための最低ラインでの存在であり、間違ってもその魔力を使って突然炎やら水やら雷を出せるはずもなく、無理なものは無理であり、タネなしマジックなんてできるものではない。

だから、魔法を使えない家系なんてのは隣人が魔法使いの一族でもない限り、大げさではなくほぼ一生を魔法とは無縁で送れるもので、俺の家族もそう思っていた。魔法なんてあると便利だね。そんな感じでさ。

けど、そうはならなかった。突然変異。医者からそう言われたのを、俺は今でも覚えている。魔法使いの血を取り込まぬ限り、本来ならば一般家庭に魔法使いの子どもが生まれるはずはない。しかし、例外中の例外が、まさかの俺の身に起こっていたというわけだ。

当然、両親からすれば寝耳に水なわけで。ある日突然調子を崩した俺のことを、心底心配した。病院に連れて行っても、健康体その

ものと診断され未知なる病気かと肝を冷やしていた。それが一週間くらい続いた頃、真っ黒だった髪の色が漂白剤でも使ったかのように綺麗に抜け落ちた。さらに一週間が立つと、俺の周囲の物が何の前触れも無しに砕け始めた。ポルターガイストかと思ったね、あの時は。……まさか自分のせいだとは思わないだろ？

何かがおかしいと思い始めたのが、その時。両親は、恐る恐る俺を、今度は魔法病院に連れて行つた。で、ビンゴってわけだ。尋常じゃない量の魔力が渦巻いてますってさ。その時から、両親の俺を見る目が変わった。

魔法は使えると便利だが、使えないと恐怖でしかない。

その通りだと思う。俺も怖かった。どうしていいのかも分からない。医者も、ここまでの魔力は見たことがないと頻りにぼやいていた。どう対処すればいいか拱いていたってわけだ。もはや触れると起爆する爆弾のような扱いぶりだった。他の患者とは完全に隔離された部屋で。ちまちまと魔力を吸い出す機械に繋がれ過ごす日々。両親もだんだん見舞いに来なくなった。隠しているつもりだろうが、隠せてない。俺を怖がっているのは明白だった。この時にはもう、薄々感じていたんだろうと思う。多分、この人たちとは、別の道を生きることになるんだろうってさ。……まだ俺がこれから生きていけるかも分からなかったわけけれども。

で、冒頭へと戻る。で、謝られても困る。それじゃどうすりゃいいのかと聞く前に、なかじょうせいや両親の後ろから綺麗な女の人が現れた。

「初めまして、中条聖夜」

眩いまでの美肌に金髪。スカイブルーの双眼を携えた女性は、その外見に反して流暢な日本語で告げる。

「貴方のその症状を直してあげるわ。今日中に退院できる。そして、私の弟子になりなさい。魔法を、教えてあげるわ」

その言葉に、偽りはなかった。何をされたのかもさっぱり分から

ぬうちに、体調は回復。両親の狼狽、医者 of 制止をも払いのけた女は、そのまま俺を自身の屋敷へと招き入れた。そう。屋敷。それも豪邸だった。高級住宅街ってやつ？ 驚きを隠せぬ俺に「隣の青藍^{せいらん}市に比べればまだまだよ」と言った女の言葉には、更に驚いたが。……そういえば、そこで出会ったんだよな。アイツに――。

どさりと鈍い音を立てて。目の前にいた男が倒れた。殺しちゃいない。気絶させただけだ。

「……これで全部かな」

あの女に言われた人数は、これで無力化できたはずだ。

「終わったのね、お疲れ様」

それを見計らったかのようなタイミングで、入室してくる。

「それで？ あったんですか？ お目当ての物は」

「ううん……。残念ね、ここならもしかして、とは思ってたんだけど」

頬に手をあて、悩ましげなため息をつく。……あれから結構な年月が経ったにも関わらず、この女の外見は当時のまま一向に衰えていない。魔法か何かだろうか？ ……本当は梅干しみたいなしわくちゃのおばあちゃんだったり――。

「何か失礼な事考えたりしてないでしょうね？」

「まさか。敬愛する師匠に対して、そんな事しないでしょ」

ホントに？ という顔で睨んでくる。くそ、表情に出ていたか。以後気を付けねば。

「ところで師匠。その手に持っている物は何です？」

「ああ、これ？」

ひょいっと持ち上げる。見た目は、古ぼけた手鏡のようだが……。「これ起動すると、異次元の世界に跳べるらしいわよ。やってみる？」

「結構です」

即答した。どうやら面倒臭いマジックアイテムだったようだ。

「いいじゃない。やばかったら、貴方の能力使って直ぐこっちに跳んで来れば？」

「俺の転移魔法は、異次元の境目を跳躍できると証明されてません」

「じゃあ、ここで検証してみよ——」

ガシャンッ！！

「ああっ！？ この鏡って結構高いのよ！？」

妙な素振りを見せる前に、突き壊した。

「俺はこの世界である程度満足してますんで」

「はあく。しょうがないなあ」

もう未練を無くしたのか、ばいっと後ろ手に放り捨ててしまった。

「それにしても。突入して、わずか15分。それで129人在中のアジトを殲滅。なかなか良いタイムになってきたわね」

「そりやどうも」

「“呪文詠唱のできない”貴方がここまで育ててくれて、私は嬉しいよ」

「なに急に老成したことってんですか」

そう。俺は呪文詠唱ができない。魔法使いとして見れば、所謂欠陥品だ。最初にこの事実気づいたとき、俺は呆れて笑ってしまった。魔法が使えるからという理由で両親から捨てられた俺が、まさか満足に魔法を使うことができないとは。ジョークにしてもブラックすぎるわい。

そんな俺にも、通常の魔法使いでは到底使いこなせない特異な能力が、1つだけある。それが、転移魔法。ワープってやつだな。いくつか制限はあるものの、これは呪文詠唱のできない俺にとっては必須のスキルとなった。この転移魔法に加えて、呪文詠唱せずとも発現できるレベルの魔法を使い、俺はようやく魔法使いとしての価値を見い出せたのだ。

「じゃ、はい。これ」

「？ なんですか、これは」

何が「じゃ」なのか分からぬまま、俺は手渡された紙切れを見つめる。これは…。

「パスポート？」

「ええ。アメリカに来て、もう2年かしら。そろそろ日本が恋しくなってきたんじゃない？」

「……」

……は？

「一個だけ、仕事をこなしてちょうだい。向こうの空港では人を待たせてあるから。詳しいことはその人に聞いて。それが終わればちよつと休暇をあげるわ。最近働かせ過ぎちゃったから」

……なんだって？

「どうしたの？ そんな怪訝な顔しちゃって」

「……何か悪いものでも食べたんですか？ こんな優しい師匠、ちよつと気味が悪くへぶっ！？」

「口には気を付けなさい、聖夜？」

「……ふあ、ふあい」

が、顔を……グーで……。

「純粹なる厚意よ。日本に戻ったら、軽めの仕事は早々に終わらせて、少しは羽を伸ばすといいわ」

……冗談だろ？ ほんとだよ。

「けど、まだお目当ての物は見つかってないじゃないですか」

「言っただでしょ、あくまで休暇よ。それが終わったら、またみっちり働いてもらうわ」

……左様ですか。

「いいの？ のんびりしてて。フライトはもう直ぐよ？」

「は？」

急いでフライトの時刻を見る。……あと30分を切っていた。

「早く跳んで跳んで」

「いつも言っていることですが！！ もっと早く言ってください！

！
ー

はしゃぐ女の手を掴み、転移魔法を発動させる。薄汚れたマフィアのアジトから一転し、今使っているホテルの客室へと跳ぶ。ちなみに、国から国へは転移できない。そんな長距離のジャンプは制御できないからな。この辺の制約については追々説明していこうと思う。生憎今はそれどころじゃない。ともかく、国から国へは跳べないということだけ分かって欲しい。だからこそ、乗り遅れるわけにはいかないんだ。

まずは荷物をまとめないと。何も持たずには帰れまい。急いで荷造りして、空港に行つて……。普通なら不可能だが、転移魔法さえあれば可能。だからこそ、この女もぎりぎりまで言わなかったんだろうけど。

それにしても、日本か。久しぶりに、アイツの所にも顔出しとかなきやな。「お土産よろしくね」とか寝ぼけた事を抜かす女を全力で無視しながら、俺はそんなことを考えていた。

第1話 花園舞

「久しぶりに日本語を聞く気がするな……」

空港に降り立ち、まず最初に思ったのはそれだった。行き交う人々は皆、日本語を話している。スーツケースを受け取り窓に寄る。

外の景色では無く、窓に写る自分の姿を見てぼそつと呟いた。

「……なんというか。思ったより何も感じないな」

「次の方、どうぞー」

「おっと」

係りの人間に呼ばれ列に戻る。

「パスポートをこちらの部分にかざして下さい」

「はいよ」

『承認致しました。Masick Conductorをお受け取り下さい』
マジック コンダクター

電子音が鳴り響き、受付の中から長方形の機械が姿を現す。それを手に取った。

「ご利用ありがとうございました」

促されるままゲートを抜ける。空港のエントランス付近まで歩いたところで、MCを左腕に装着した。

空港から出て、指定された場所へと向かう。既に車は到着していた。中から黒服の男が出てくる。

「名前は？」

「中条聖夜です」

「パスポートを確認させて頂いても？」

「はい」

黒服に手渡す。

「……結構です。では、こちらへ。鞆はこちらでお預かり致します」
黒服が扉を開ける。

「よろしく願います」

促されるままに乗り込んだ。車は直ぐに発車した。

「おお。読める読める」

車窓から見える看板を目で追ってみる。少し不安だったが、日本語は違和感なくすんなりと頭に入ってきた。

渡米したのは2年前の夏、か。

「ライセンスが取得できたのは良かったけど……。まさかこんなに戻ってくるのが遅れるとは思っていなかったな」

窓枠に肘を掛けながら外の景色を眺める。そこには見覚えがあるような無いような。そんな何とも言えぬ風景が広がっていた。

繁華街を抜け、小奇麗な街並みが通り過ぎる。徐々に一軒一軒の土地の広さが大きくなり出した。

「……青藍市^{せいらんし}。高級住宅地、ね」

ぼーっとその風景を見つめる。今日は雇い主の屋敷を訪ねる予定となっていた。

クライアントの名は姫百合泰造^{ひめゆりたいぞう}。高級住宅地を持つ青藍市の中でも、トップクラスの金持ちという話だった。その姫百合家には2人の姉妹がいるという。

「ははっ」

「如何されました？」

「あ、いえ。何でも」

「左様ですか」

思わず声に出して笑ってしまった。訝しげに訪ねてきた黒服を軽くないなす。詳しい話は聞けなかったが、どうやら雇い主は俺の事を名指し指名してきたらしい。わざわざアメリカにいる自分にアポな

んて取って来るからどんな依頼かと思えば……ね。再度込み上げてきた笑いは、押し殺さねばならなかった。あまり不審がられてもあれだからな。

「……おいおい。まさかこの屋敷じゃないだろうな」

車窓から見える建物に啞然としている間に、車はその屋敷の門を何の躊躇いもなく通過した。

「どれだけ金持ってたんだよ……」

俺の心情を余所に、車は屋敷の庭を通り扉の前で停車した。黒服が運転席から回り込み、ドアを開く。

「どうぞ」

「……はい」

1つ頷いて降りる。向こうでもあまりお目に掛かれない程の豪邸だった。

「こちらへ」

黒服に促されるままに、その屋敷の扉を潜る。

「初めまして。ここのメイド長を務める大橋理緒おおはしりおと申します。中条聖夜様でいらつしやいますね？ お待ちしておりました」

扉を潜った先。大広間にて女性から挨拶される。緑色の髪をストレートに下した清楚な女性。身に纏うメイド服はそのボデラインをくつきりと浮かび上がらせており、思春期の男からしてみれば目に毒だった。

「では、こちらへどうぞ」

促され、後ろをついて行く。広いエントランスを抜け、長い廊下に出た。廊下を歩き交う執事やメイドが、こちらを見る度に一礼して行く。知らない客相手にも礼儀を忘れぬその様は、この屋敷の主の性格をも表しているかのようだった。

「こちらが旦那様の書斎でございます」

程なくして、お目当ての場所に到着する。大橋メイドが、一礼してから扉をノックした。

「理緒でございます。中条様をお連れ致しました」

「入ってくれ」

扉の中から男の声が聞こえる。大橋理緒がそれを確認して扉を開けた。

「……へえ」

洋館を思わせる屋敷内を歩き、主の部屋もそれなりに期待していたが裏切られる事はなかった。高級そうなアンティークにソファ。扉の真正面、部屋の奥には木造のデスク。見るからに高級そうなスーツを着た、30代後半くらいの男性。この屋敷の主・姫百合泰造がそこに腰かけており、こちらを見ていた。

「遠路遙々済まないね。ようこそわが屋敷へ。私はこの主・姫百合泰造だ」

「中条聖夜です、どうぞよろしく」

相手の自己紹介に、無難に応えておく。泰造氏は満足げに頷くと、使用人に目を向けた。

「済まないが席を外してくれ」

「畏まりました」

一礼して大橋メイドを含む複数の使用人一同が下がる。ほどなくして後方の扉が閉められた。

「不用心なのは？ 私のような者を護衛無しで傍においてよろしいので？」

「ははは。おかしい事を言うね。これから私の愛娘たちの護衛役を頼もうとする人間に対して言うセリフではないな」

「その話自体も、かなり酔狂な話でしょう」

声のトーンを少し下げる。

「この国にも有能な魔法使いはいる。貴方と私は初対面。繋がりなどありません。外国から私を呼び寄せた意図をお聞きしても？」

「……初対面ではないだろうか？」

「はい？」

首を傾げる。

「一度は会った事があると思うけどね」

「記憶にありませんが」

本気で、無い。そもそも関わる機会などあるはずが――。

「昔、花園家のパーティーにいたことが無かったかい？」

あった。

「まさか私の様な者の事を覚えていて下さるとは。光荣です」

「まあ、君はあの中では異質だったからねえ」

そりゃそうだ。俺はセレブでもなんでもない。

「それも含めて、ね。花園家があの場合に呼べるような人物なら、こちらとしては問題ない。それに、君が向こうで一緒に働いていた師匠……に当たるのかな。あれは私の友人だね。今回の事を相談したら、君の名を挙げてくれたんだよ。日本人の優秀な魔法使いがいるとね」

「……あの女」

何が日本に戻ったら、軽めの仕事は早々に終わらせて、少しは羽を伸ばすと良い、だ。この仕事も随分とお得意様のようにじゃねえか……向こうに戻ったら真っ先に殺す事に決めた。

「……ふ、ふむ。まあいい。では契約の話しよう」

「ええ、そうして下さい」

俺の内にある怒気を察したのか、泰造氏がはぐらかす様に本題に入る。とりあえず、先を促すように頷いておく。

「今回君に依頼したいのは、私の娘の護衛だ」

写真が差し出される。2枚の写真には、それぞれ綺麗な女の子が写っていた。

「姫百合可憐と咲夜。可憐は君と同じ年。咲夜は1つ下だ」

泰造氏が続ける。

「この2人の護衛を頼みたい」

「綺麗な方々ですね。それで？ 急に護衛が必要となった理由は？」

「うむ……」

目を逸らした。が、それも一瞬のことで、直ぐにこちらに向き直る。

「最近、この国で頻繁に起こっている事件があつてね。知っているかな？」

「いえ。先ほどこちらに戻ってきたばかりなので」

「それもそうか。昨今、この国では誘拐騒ぎが多くてね」

「……まさかそれで自分の娘も危ないと？」

「はは。それだけでは只の親ばかりだろう。誘拐対象は、決まって学生。それも魔力容量の高い子なんだ」

なるほど。そこまで聞けば、ある程度は納得した。

姫百合家と言えば、この国でも五指に入るほどの有力な名家であり、魔法使いだ。確かに条件には一致するが……。

「それでも……姫百合家ですよ？　ここまでビッグネームになると、逆に手を出しづらいのでは？」

「だからこそ、学生である者たちを誘拐するのだろうか？　どれだけ強大な力を持っていようが、それが使えこなせれば意味が無い。それは、“君が一番良く分かっているとは思うが”」

「……なるほど。全て認識済みつてわけですか」

「気を悪くしないでくれよ？　こちらとしても、ある程度の情報は知っておかなければ命は預けられないのだから」

「平気です。それに、調べる意図の有無に関わらず、どうせあの女から進んで喋つたはずですよ」

「ま、まあ……。その通りなわけだが」

口をひくつかせながら、泰造氏が頷く。どうやら、内面に押し殺していたはずの殺気が多少漏れてしまっていたようだ。口調も少し雑になってしまっていたようで、申し訳ない。あの女をどう殺すかで頭がフル回転していたが故に、失礼な態度になってしまっていたらしい。無理矢理自制する事でやり過ごす。

「それに、うちの娘が狙われやすいという理由には、もう1つあつ

てね」

「？」

その言葉で、片隅で未だに惨殺劇を繰り広げていた思考が止まった。

「護衛を付けたがらないんだよ」

「……はあ」

なんともまあ……。とはいえ、俺も嫌だけどな。後ろから無言でついてこられたりすると。

「何度お願いしても聞いてくれなくてね。幸いにして、学園は全寮制だからそこまで危険はないとは思うんだが……」

……ん？ 寮？

「ちょ、ちよつと待って下さい」

「なんだね？」

「寮って、あの寮ですよ？ 学生が寝泊まりする」

「……他にどんな寮があるかは知らんが……。まあその通りだよ。学生の宿泊施設だな」

「それで、今回の依頼は？」

「？ 私の娘たちの護衛だが」

「でも寮生活なんですよね？」

「そうだが？」

「でも護衛嫌いなんですよね？」

「そうだが？」

「じゃあ、俺はどう護衛すればいいんですか？」

「？ どうもなにも。君も学園に転入して、影から護衛してくれるんだろう？ 彼女から、そうした内容で任務に就くと言われているのだが」

「……ちよつと失礼」

俺は徐に携帯を取り出すと、メモリーからあの女の番号を探し出して発信ボタンを押した。間髪入れずに、女性の声が届く。

『現在、お客さまがお掛けになった電話番号は使用されておりま—

ばきんっ

その声は、最後まで届かなかった。俺の耳元で携帯が割れた音が鳴る。

「な、何かあったのかね？」

「いえ、お気になさらず」

もはやガラクタとなったそれをポケットに捻じ込みながら、にこやかに俺はそう告げた。任務内容どころか、宿泊施設とかの話も出なかった理由はこれか。寮に泊まれ、と。あのアマ……。

「一応、確認なんだが……。受けてくれるのかね？」

俺の否定的なオーラを感じ取ったのだろう。泰造氏は、訝しげに眉を吊り上げていた。

「ええ。もちろんです。全力を尽くします」

無一文だからな。俺は。受けなきゃ路頭に放り出されちまう。

「そうか、良かった。可憐や咲夜にバレずに護衛するには、学園潜入が必須。特にクラスメイトになることが望ましい。その年代でこういった仕事ができる人間など、そうはいないからね」

「買い被り過ぎですよ。私の欠点は存じているのでしょうに」

「それを上回る魔法があるのだろう？ 彼女は、こういうことで嘘はつかない」

あの詐欺師への、絶対的な信頼は何処からくるんだ？

「それで、お嬢様方の通う学園はどちらでしょう」

「私立・青藍魔法学園だ」
せいらんまほうがくえん

……超エリート校じゃねえか。

「私はどうやって転入すればいいのですか？ まさか転入試験に受かれと？」

無理ですよ、と言外のアピールをしておく。そもそも、転入試験に受かれる程の実力を有していれば、わざわざ向こうでライセンスを取ったりなどしない。

「まさか。私はその理事長を務めているんだ。そういった情報操

作については問題ない」

思いつきり職権乱用だな。やはり持つべきは金と力か。

「制服や教科書の類は、既に君の寮部屋となるところに準備済みだ。転校初日は明日。理由は両親の仕事の都合で、だ。まあ所謂帰国子女のような立場になるな」

「……そうですか」

その後、いくつか依頼に関するやり取りを終えた後、俺は姫百合邸を後にした。重厚な門が閉まるのを後ろ手で感じながら、慣れない高級住宅地を歩く。寮まで送ろうという申し出は、辞退させてもらった。俺の魔法を使えば、送迎なんて必要ないし。それに、寄り道しなきゃならんところもあつたしな。

「姫百合家の当主は、確か女だったはずだが」

泰造氏は、魔法とは無縁の一般人。現当主に婿入りした立場だったはずだ。てつきり当主の方がでてるのかと思っていたが……。

「ま、どっちでもいいか。やることは変わらないんだし」

その独り言で、思考を断ち切る。

「さて。気乗りはしないがアイツのところ顔だしとか」

俺が日本に戻ってきたことは、遅かれ早かれアイツの耳にも入るだろう。あの女とアイツは、ちよくちよく連絡を取り合ってるみたいだからな。

……それに、確かめておきたいこともある。そう考え、俺は転移魔法を発動した。

閑静な高級住宅地から一転。ファンシーな部屋へと転移した。ピンク色の壁紙は見えているだけで胸焼けを起こしそうだったが、寸前

のところで堪える。

部屋の至るところには様々な動物のぬいぐるみが置いてあり、そのつぶらな瞳全てが自分を射抜いているかのようで、正直気味が悪い。箆笥の上に座っているエメラルドグリーンのクマは初見だ。どうやら新しい“しもべ”がまた増えたらしい。というか、なぜエメラルドグリーン？

机へと目を向ける。どうやら部屋の主は何かに没頭しているようで、こちらに気付いてはいないようだ。

「ううーん。どうしようかなあ」

唸り声を出す主の元へと忍び寄り、そつと肩越しに覗いてみた。

「どうしても発動スピードがなあ……」

「ここのせいじゃないか？」

後ろから紙に書かれた魔法式の一部を指差す。

「これじゃ前の式の効果を相殺しちゃうだろ。この式が無くても、その前後だけで十分作用すると思うんだが……」

「ううん。でもそれだと持続時間が少なくなっちゃわない？」

「それだったら前半の式から変えた方がいいな。ちよつとペン貸してみろ」

「はい」

「ん。ここの式はだなあ……」

がりがり魔法式を書いていく。

「え？ それって後ろの式との相性悪くなかったけ？」

「そうだ。けどな。“繋ぎ”の部分をこつすると……」

「ほ、ほんとだー！」

「な？」

「凄い凄い！！ 流石は——」

目の前の少女が固まる。俺の顔を捉えてはいるようだが、焦点がいまいち合っていないようだ。とりあえず挨拶する事にした。

「よっ」

「……こ」

「こ？」

「この裏切り者おっ！！！！」

「ぐはっ！？」

顔面に思いつき裏拳を叩き込まれた。想像を絶する痛みに蹲る。

……鼻。陥没骨折してないだろうな？

「アンタ、今まで何処ほっつき歩いてたのよ！！」

「ほっつき歩くとか……。お嬢様のセリフじゃねえよ」

「アンタにお嬢様の基準が分かるか！！」

「少なくともお前は違うつて事だけは分かるわ！！」

「うるさいっ」

「ぐほっ」

みぞおちに拳がめり込んだ。

「……こんなに手が早い女がお嬢様なはずねえだろ」

呻くように呟く。

「あら。ごめんあそばせ？ これでもこの国有数の名家の生まれですわ」

目の前の女が文字通り見下しながらそう告げる。

はなそのまい

花園舞。残念ながら、本当にお嬢様。それもこの国トップクラスの財力を保有している。さつき泰造氏が言ってた花園ってこれね。こちら五指に入る魔法使いの一族がーだ。

そしてこの一族の権力も凄い。どのくらい凄いかというと、この女の親が命じれば多分明日には総理大臣変更できるくらい。

で、見た目もかわいい。目を見張るような赤い髪に、程よく膨らんだ胸。きゅっと締まった腰。そしてヒップへと流れるような女性らしい魅惑的なライン。黙ってさえいけば凄い美人。お持ち帰りしたいくらいなの。けどしない。黙ってないから。性格に多量の難あり。“多量”のね。“多少”じゃない。とにかくぶっ飛んでる。いろいろな意味で。

「……あ、血が」

押さえてみて気づく。どうやら先ほどの裏拳で、内部を負傷して

いたようだ。

「言つとくけど、血でカーペット汚したら許さないから」

「ふざけんなっ！！ 誰のせいだよ！！」

そう言つて、四つん這いの状態からティッシュに手を伸ばしたところ、その手を踏みつけられた。

「いてえっ！！」

「誰が家の物を使っていいって言ったのかしら？」

「鬼か！？ 性悪女め！！」

「誰が性悪女よ！！」

「現在進行形でお前だろうがぼっ！？」

舞の爪先が、鼻にめり込んだ。

「ひえひえめえっ！！ くっ！！ この俺のイケメンが潰れたらどうしてくれんだ！！」

「自分で自分の事をイケメン言っくな！！」

がばつと胸倉を掴まれる。もう2、3発は覚悟すべきかと身構えたが、どうやら杞憂に終わったようだ。舞はそのまま俯いてしまった。

「？ おい」

無言のまま、肩がぶるぶる震えているのが分かる。……やめろよ。めちゃくちゃこえーんだけど。

「ア、アンタ……」

顔を上げた舞を見て、絶句してしまった。

「……ほんと、何勝手にいなくなってるのよ」

双眼から、ぽろぽろと涙が零れ落ちている。

「お前……」

「ばかっ！！」

「へぶしっ！？」

平手。……不意打ちだ。そのまま2人で後ろにあったベッドへと倒れこむ。……良かった。床だったら後頭部強打で死んでいたに違いない。

「……ずっと、待ってたんだから」

胸に顔を埋めたまま、上げようとしな。凄い罪悪感だ。確かに、あの時は何の挨拶もできずに連れてかれたからな。

そつと、舞の頭に手を置いて撫でてやった。

「すまん」

「ばか」

久しぶりの罵声は、思いの外心地いいものだった。

「で？ 何しに帰ってきたってわけ？」

先ほどまでの弱気な姿は無かったことにしたいらしい。若干赤目ながらも、絶対零度の視線を取り戻した舞が、そう問ってくる。

「仕事だよ、仕事」

「はあ。でしようね。アンタ向こうで魔法使いの資格は取っちゃったって聞いてたし」

舞は詰まらなそうにベッドに腰掛ける。やっぱりあの女、色々と喋ってたわけだ。俺の状況は逐一報告されていたらしい。

「仕事内容はなに？ この国なんて、そうヤバイ仕事転がってないはずだけど」

「護衛、だな。ボディーガードってやつだ」

「また面倒臭い仕事貰ってきたわねえ。第一、貴方の能力なんて逃げる方が得意でしょうに」

「ほつとけ。それにお嬢様が面倒臭い言うな」

「それこそほつときなさいよ。それで？ 一体誰のボディーガード役を頼まれたってわけ？」

「いや、一応俺にも守秘義務ってやつがあつてだな」

俺のその言葉を聞いて、舞の視線に凶悪な色が混ざった。瞬時に危険を察知する。再び飛び掛かってきた舞を、“跳ぶ”ことで躲した。対象を失った舞は、そのままの勢いでベッドへと突っ込んだ。

「お、ピンクか」

「どこ見てんのよ!!」

「うおっ!?!」

スカートが捲れることも厭わず、舞が右足を振り上げた。鼻先を掠める。あと少し反応が遅れていたら、そのまま意識を持っていかにいたに違いない。こえーこえー。

あまり、ここには居ない方がいいな。知りたいことは、もう分かったし。それに、これ以上居ると、本当に根掘り葉掘り聞かれかねん。

「んじゃ、そういうことだから」

部屋の窓を開けながら、極力さわやかにそう告げる。

「どついうわけよ!! 護衛対象は誰!? 場所は!? 連絡先は!?!」

「また遊びにくるからさ。じゃ!!」

「待ちなさい!!」

転移されると悟ったのだろつ。慌てた様子で机に置いてあった自身のMCを掴んだ舞を尻目に、俺は転移魔法を発動した。

……私立・青藍魔法学園は、全寮制。舞が自分の屋敷にいるってことは、学園は違うつてことか。ま、そっちの方が何かと動きやすいかな。あいつと絡むと、碌な事ないし。少し寂しい気持ちもするが、ぶっちゃけ安心したな。

心地よい安堵感に包まれる。

結論から言えば。それは大間違いだった。

第2話 私立・青藍魔法学園

「ああ。見ない顔だと思ったら、君が噂の転校生か。いいよー通って」

予想外な気さくさで、私立・青藍魔法学園の守衛がそのたまう。泰造氏による周到な根回しと、予め渡されていた学生証を見せることで、関門は難なく突破された。……噂？ それだけが気がかりだったが。

それにしても。渡されていた校内マップと外見から、入る前から分かっていったことだが……。

「でけえ……」

校門から校舎まで、こんなに距離を空ける必要があるのか……。中央には噴水もあるみたいだし。

両脇に桜の木が植えてある並木道を通り（時期的にピンクではなく緑だが）、無駄にでかい噴水を迂回し、ようやく校舎まで辿り着く。

「ふうん。泰造氏がある程度は安心して言っただのはこういうことか」

魔力を灯し、目を凝らしてみると分かる。幾重にも折り重なった魔法回路。校舎の壁に隙間なく這い回っている。窓も対魔法用の魔法強化ガラスのようだ。

「戦争でもする気かってくらいのセキュリティだな」

そこらの避難施設なんかより、よっぽど役に立つだろう。

「……ん？」

誰かに見られている気がして、そちらへと目を向ける。

「気のせい、か？」

見上げた窓の奥に、人影は見えない。

「ま、いいか。とりあえず、寮に行こう」

別に見られて困る者でもない。もう俺は明日にはここの校舎で授

業を受ける、立派な転校生なのだ。足を寮の方角へと向ける。

私立・青藍魔法学園は、校舎を中心として、十字に道が分かれている。下に正門、上に教会、右に学生寮、左に部室棟（表現上、上とか下とか使ってはいるが、実際は手前か奥かってだけで、教会が浮いてるとか正門は地下とかいった勘違いはしないように）。グラウンドや体育館等のスポーツ施設も左だ。至ってシンプル。分かりやすい。問題を挙げるとすれば、離れていること。事実、今向かっている学生寮も、曲がりくねった並木道を歩いた先にあるらしい。「学園内にある寮って言うから、多少寝坊しても平気かと思っていたが……。無理だな。まあ、跳べば直ぐなわけだが」

「ここか」

立派なもんだ。一番最初にここを見ていたら、学生寮にこんな立派な建物なんてどんな学校だ、と思っていたのだろうが。最初に校舎と敷地を見ていたおかげで、そんな考えには至らずに済んだ。……既にこの学園の基準に毒されてきてるのか？

「おっと、ここも学生証か」

寮の門前。扉のすぐ横の壁には、縦に溝が入った機械が埋め込まれている。どうやらこの扉は、押すでもなく引くでもなく。カードを通さねば開かない仕組みになっているらしい。

「ほんと。こんな学園に護衛なんているのかね？」

もつともな疑問を漏らしつつ、扉を潜って中へと入っていく。

「学生寮にエントランスがあるってのもおかしい話だが」

中は吹き抜けのエントランス。正面奥には談話室……って表現は部屋じゃないから間違いか。ともかくフリーエリアなのか、ソファーやテーブル、テレビ等がいくつも並んでおり、現に何人かの生徒がそこでたむろしている。

内、1人がこちらの方へと振り返った。一瞬驚きの色を浮かべる。

……なんだ？ まさかまた俺が知らないだけで、顔見知りとかじゃないだろうな。二言三言仲間内で話したと思ったら、そこにいた3人全員がこちらへ向かって歩いてきた。

なにこれ。カツアゲ？ 俺、今シヤレじゃなく1円も持ってないんだけど。

「よう、初めまして。かな」

「……そのはずだが」

まずは初めましての言葉で力が抜ける。どうやら知り合いではないらしい。

「俺は2年A組の本城将人だ。ほんじょうまさと将人でいいぜ」

「同じく、楠木とおるです。くすのぎとおる、と」

「同じ、杉村修平だ。すぎむらじゆうへい修平で頼むわ」

「俺は中条聖夜。こちらも聖夜で。明日からここに通うことになる。よろしく」

「やつぱお前が転校生か！！」

将人が嬉しそうな顔でそう叫ぶ。

「やつりい、一番乗り！！」

「別に、一番とか関係なくない？」

1人でエキサイトしている将人に呆れた口調でおるがぼやく。それを宥めるように、修平が割り込んだ。

「ま、何にせよ。一番最初に会ったのは俺らってことだろ？ 何せ学生寮の入り口なんだからよ。それとも聖夜。ここに来るまで誰かと会ったか？」

「いや？ 会ったとすれば、守衛のおっちゃんくらいだが」

「ほら見ろ！！ 一番だ！！」

「一番自体を否定してるわけじゃ……まあ、いいや」

将人の断言に、とおるが悟ったかのような口調でそう告げる。

「で、お前の部屋番号は？」

「ん？ えーと、405」

「あ、それ俺の隣だわ」

修平が名乗りを上げる。

「そうなのか？」

「ああ、案内してやるよ」

「ほんとか？ 助かるよ」

「俺らはどうする？」

「お前らは先に食堂行つててくれ。直ぐに行くよ。聖夜もそうするだろ？」

「ああ。もうそんな時間か」

ガラス張りの壁の外を見れば、もう日が陰り始めているところだった。周囲も赤く染まりだしてる。…まったく気づかなかったな。

「じゃ、とつとと行くか」

「ああ。よろしく」

「早く来いよ」

食堂と俺の部屋は、正反対の位置にあるらしい。将人とおるとは一旦その場で別れ、俺と修平は部屋へ向かう。階段を上って、上へ。405は4階だ。部屋へは、思いの外早く着いた。

「お前、力と体力あんのな」

「ん？」

「だつてスニーカー持つてんのに、普通の奴が階段上るのと同じスピードだぜ。息も切れてねえし」

「まあな。体力には自信ありだ」

あの女の元で働いてりゃ、嫌でもつくからな。

通路を歩き、405と書かれたプレートの前で立ち止まる。

「んじゃ、俺はここで待つてるから。中、確認したらメシ行こうぜ。荷物整理は後でもいいだろ？」

「さんきゅー。ちよつと見てくる」

壁に寄りかかつて待機の姿勢を見せた修平に礼を言い、学生証を通して扉を開けた。

「おおー。綺麗綺麗」

それに広い。小型だがテレビもあれば冷蔵庫もある。風呂は大浴

場があるみたいだし、生活面に関しては特に問題な――。

「いや、まて」

問題大アリだろ。俺、金持っていないじゃん。食堂で何も食えないじゃん。

「え？ これって任務完遂まで食事抜きってこと？」

ほんとに殺しちゃうよ？ あの女。

そんなどす黒い感情が心の奥底で渦を巻きだしたところで、机の上に置いてあるモノに目がいった。

「？」

そこには綺麗に畳まれた学生服、教科書類が置いてある。が、それは今はどうでもいい。問題なのは……。

「茶封筒？」

封筒が置いてあった。差出人は――。

『リナリー・エヴァンス』

ぐしゃっ――！！

「おっと」

いけないいけない。俺ともあろう男が。ついさっきまで想っていた女の名前について反応してしまった。それにしても、何やら固いモノが入ってるな。

茶封筒を逆さにしてみる。中身は、何の抵抗も無く俺の掌へと落っこちた。

「……500円？」

それ以外には、何も入っていない。念のため、封筒の中を覗き込んでみたが、結果は変わらなかった。……何の真似だ？ このワンコインでどうしろと？

「……ま、いいか」

考えたって答えは出ない。あの女の行動全てが謎なのは、今に始まったことじゃないしな。コイントスのように親指で弾いてみる。

封筒の住所を見れば、普通に海外からのエメールだった。これじゃ跳べないな。そんな距離跳んだら座標が狂って海の底とかにジャンプしそうだ。あの女をとっちめるのは別の機会にした方がいい。「とりあえず、今日の晩飯代は確保つと」

……バイトでも考えた方がいいかもな。

扉を開けると、待っていたのは修平1人ではなかった。

「あれ？ お前ら何でここにいるんだ？」

「まあ、俺も食堂で食おうと思ってたんだけどよ……」

将人の言葉を、とおるが引き継いだ。

「少なくとも、明日のお披露目が終わるまでは、君は人前に極力出ない方がいいよ。何せ噂の転校生だ。食堂に行こうものならパニックになりかねないからね」

そう言ったとおるの手には、テイクアウトされた夕飯が乗っていた。

「んじゃ、邪魔するぜ」

「ん？ ああ」

将人が遠慮の無い足取りで、中へと入っていく。それにおるが続いた。

「入って平気か？」

最後に修平が苦笑いで話しかけてきた。

「もちろん」

「そうか、では遠慮なく」

俺の答えを聞いて、修平も扉を潜る。……プライベートとの線引きが上手いというか、修平って案外気が利く奴だな。将人は何も考えて無さそうだが。で、とおるが機転が利くブレーン……と。

って。さっきから、噂って何？

「噂は立つさ」

俺の疑問に、至極当然と言った風情で。とおるは開口一番そう断言した。

「私立・青藍魔法学園始まって以来、そう無い事例なはずだよ」

「そうなのか？」

「あつたりまえだろ？」

もぐもぐ飯にありついていていた将人が、米粒をまき散らしながらそう言う。

「ここは魔法高校の中でも有数な名門校だぜ？ 入試試験の倍率もヤバけりや難度もヤバイ。転校の為の転入試験なんざ、普通誰も受からねえよ」

「入試よりも転入試験の方が難度上がるからな。ある意味当然と言えば当然だが」

エキサイトする将人の発言に、修平がフォローを入れる。ちらりと俺に目を向けた。……何だ？

「つまり、お前は超エリート校の転入試験をパスした、超々エリートだと思われてんのさ」

「なにその単語！？」

そんなエリートの上位種の名称なんざ初めて聞いたわ。

「それに、お前イケメンだしさ。完璧超人って奴？ すげーなあ。ちよつと目つき悪いけど」

よく言われるよ。その目さえなければ。って、そんなことはどうでもいい。

「エリート？ 俺が？」

「それは新手の嫌味か何かかい？」

とおるが苦笑しながら俺の言葉を払う所作をする。

「転入試験をパスした君にこの単語が与えられないのなら、この学園にエリートは存在しなくなるね」

「いるだろ。少なくとも、うちのクラスに2大お嬢様がさ」

「おっと失礼。失言だったね」

「ちょ、ちょちよっと待とう。待ってくれ。一回落ち着こう」

「お前が落ち着け。噛んでんぞ」

「あははは。ちょちよっとね」

「うるせえ!!」

「はぼふっ!？」

「っ!! 速い!!」

「やはり、お前只者じゃないな」

「あ、やべ。つい将人の顔面殴っちまった。とおると修平が感心したかのような素振りを見せているが、今はそれでもいい。」

「あ、あのさ」

「うん？」

「何だ？」

「は、はんだよ？」

俺の呼びかけに、将人も律儀に応えてくれる。

「俺、転入試験なんて受けてないんだけど？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

凄じ沈黙だな。

「は？」

復帰したのは修平が先か。

「ど、どういこと？」

次いでとおる。

「お前、侵入者か!!」

「アホか」

最後に将人。勘違いの発言は、俺ではなく、修平が制してくれた。「少なくとも、聖也は自分の学生証を持つてるし、学園にも転校生の話はきてるんだ。悪い方のケースではないと見るべきだろう?」「それには同意。だからこそ、分からない。じゃあ、聖夜。君はどうやってこの学園に転校してきたんだい? 転入試験をスルーして転校だなんて。それこそ前例がないんだけど」

とおるが訝しげな視線を送ってくる。それは修平も将人も同じか。さて、どう言い訳するかだが。ま、適当でいいか。あとは泰造氏が何とかしてくれんだろ。

「いや、実は俺。魔法もまともに使えないんだよね」

「は?」

「へ?」

「ほう?」

順にとおる・将人・修平ね。

「正確に言えば、呪文詠唱ができない。俺がここに内定された理由は、只1つ。俺の魔力容量だ」

とんとん、と親指で自分の胸を叩く。ま、嘘は言っていないな。魔力だけは一人前どころか百人前以上のモノを持つてる。あの女のお墨付きだ。

「魔力だけで、転入って……。お前どれだけ魔力もってんだよ」

「……それももつともな疑問だけど」

将人の呆然とした呟きに、とおるが疑問を上書きする。

「呪文詠唱ができないって、どういうことだい? 口が不自由しているならまだしも、君は普通に喋っているようだけど」

「ああ。それは……」

あれ、名前でてこねえな。まあ、あの女からその病名を聞いたのも出会ってすぐだから、もう何年も前だし、俺自身あまり気にしてなかったから……。呪文詠唱なんちゃら症候群だったはずだが……。

魔力源、魔力回路だけじゃない。心が、体が。呪文詠唱を受け付

けない。呪文の音に敏感に反応し、体内部のバランスが崩れる。そんな不安定な状況下で、魔法なんて当然発動しない。そんな病気だ。ま、こいつら皆知らないってことは、一介の学生じゃ分からないレベルの、馴染みの無い病気ってことだな。

「あまり、そういつた質問をしてやるな。とおる」

「あ、そうだね。ごめん聖夜。ちよつと無遠慮な質問だった」

「ん、いや。気にすんな」

俺の言葉が続かないのを躊躇いだと感じたのか。修平が待ったをかける。その意図に気づいたのか、とおるも直ぐに謝罪してきた。実際、気にしてないしな。詠唱なんてできなくても、やりようはいくらでもある。

「で？ お前はその現象を克服するために、学園に魔力を買われて転校してきた、ということでもいいのか？」

「ああ、そんなとこだ」

先天的なもので、治る見込みもないものだけだな。けど、理由づけをしてくれたのはありがたい。それに便乗することにしよう。あとで泰造氏に連絡しておかねば。

「そっか。中々の苦労人なんだなあ」

お前もな。いや、俺が殴ったせいなんだが。将人は鼻血をティッシュで押さえながらしみじみとそう呟いていた。

「ま、俺たちに何ができるわけでもないが。協力はしよう」

「そうだね」

「任せとけ！！」

修平の言葉に、とおると将人も賛同する。

「助かる」

俺は素直に頭を下げた。

「さて、時間も時間だし。そろそろお暇させてもらおうとするか」

「あ、ほんとだ。もうそんな時間だね」

「今日は時間経つのはえーなあ」

適当に4人で喋っているうちに、日はとつぷりと沈み、時計の短針は9の数字を指していた。

「俺たちはこれから大浴場行くけど、聖也はどうする？」

「いや、とおるの忠告もある。遠慮しておこう。狭いが、この部屋にもシャワーはあるしな」

将人の申し出はありがたかったが、ここは辞退しておくべきだろう。風呂場で男どもに群がられたくはない。

「賢明な判断だな」

「うん。その方がいいよ」

修平とおるが俺の出した結論に同意する。

「そっか。んじゃ、また明日な」

「明日の登校は付き合おう。最初に職員室に行くんだろ？ 案内する」

「朝8時30分に、ロビーでいいね？」

「ああ、ありがたいな。よろしく頼む」

「何水くせえこと言っただよ。じゃーな」

わりと友達運は良い方かもしれない。3人が出て行った扉を見つめつつ、そんな事を思った。

「……さて」

スーツケースから、荷物だしとかないとな。がさごそと荷物を漁る。

「ん？」

中から見覚えのない携帯電話が出てきた。

「誰のだ？ あの女が使ってたものとはまた別だが……」

かと言つて、このスーツケースは向こうで閉じたつきりで開いてない。誰かが紛れ込むはずもないのだが……。

首を捻りながら開いてみる。すると、メイン画面ではなく、メールの操作中の画面で止まっていた。読んでみる。そこには、こう書

かれていた。

『この文章を見ているということは、無事青藍高校に潜入できたようね。と、言うより折角お膳立てしてあげたにも関わらず、青藍高校の敷居外でこの文面を見ているようなら、即座に読むのを止めて詫びなさい。直ぐに死んで。早く。あ、でも人様に迷惑かけるところで死んじゃダメよ。ちゃんと目に付かないところで処理も楽な——こほん。ま、私は貴方のこと信じてるから、そんなことないってことは知ってるけどネ（はあと）。

さて、ここで語るまでもないことだけれど。君には重大な使命が下されたはずだわ。それを見事完遂なさい。一匹たりとも逃がしちゃダメよ。必要とあればやってよし。許す。あ、責任は取らないけど。そんなわけで、その任務が終わるまで貴方に逃げ場は無いから泰造さんによろしく伝えというて。

追伸。知つてると思うけど、私携帯代えたから。貴方、多分自分の壊しちゃったんじゃない？ これは餞別よ。私の番号は登録していないから。私がかけるときは非通知でするわ。一方通行ってことでよろしく。

貴方の愛しの師匠より』

.....
.....
.....。

「——ふう」

自分を褒めてやりたいね。あやうくこの携帯も握りつぶすところだった。あの女からの連絡なんて碌なもんじゃないし、壊しても一向に構わないのだが。ただ、壊してしまうと、今後あいつに連絡を取る手段が無い。それで雲隠れでもされたら、一生殴れないだろう。それは避けなければならない。俺の理性ナイス。

「……それにしても」

文面を読み返す。『君には重大な使命が下されたはずだわ。それを見事完遂なさい。一匹たりとも逃がしちゃダメよ』ね。

「主旨変わってんじゃねえか」

護衛だろ？ 俺の仕事。必要とあればやってよし、つて。「ヤ」
がカタカナなのが怖い。殲滅しろと？

「はあ〜」

携帯を放り投げ、ベッドへとダイブする。想像を遥かに上回る面倒臭さだ。あの女が自発的に俺を手放し、受けた依頼だ。何かあるとは思っていたが。

「……」

一匹たりともという文面から察するに、単独犯ではない。グループであることに当たりは付く。それも、殺しの許可まがいも出してきている。間違いなく、相手はただの誘拐犯グループではない。

「め、めんどくせー」

そう呟きつつ、心の中では徐々にわくわくとした気持ちも生まれてきていた。その感情も、否定する気はない。別に、誘拐犯グループとやり合うのに気持ちが高ぶっているのではなく。

「久しぶりの、学校だからな」

アメリカでは、基本的にあの女に命令されるがまま仕事をこなし、魔法使いのライセンスなんて、一発試験だった。「あ、そう言えば明日試験の予約入れてたんだ」と言われたのが、試験当日の午前0時。気が付いたら試験を受けてました、そんなレベルだ。

「むちゃくちゃだぜ」

今のご時世。別に高校の卒業資格を得られずとも、ライセンスさえあれば魔法使いの仕事はこなせる。学力重視の会社もあるが、今は学力よりも実力だ（当然文武両道の方が好ましいわけだが）。実際のところ、学校なんて通わなくてもいいわけだが……。

「ま、折角だし。楽しませてもらうとしよう」

第3話 姫百合可憐（前書き）

私の作品に点数をつけて下さった方、ありがとうございます。
予想外の高得点で、めちゃくちゃ嬉しいです。

ひとまず、お気に入り登録件数が2ケタになるようがんばります（笑）。

あと、分かりずらいと思ったので、各話ごとにタイトル付けることにしました。（改）と表記されてますが、中身変わってません。

第3話 姫百合可憐

朝。爽やかな日差しに照らされ、うつすらと瞼を上げる。見覚えの無い天井。ああ、そういや、昨日から青藍魔法学園学生寮に住むことになったんだっけか。ぼんやりとした頭でそんなことを考えつつ、視線をスライドさせて目覚ましを見る。

そこで、現状を理解した。

8：53

遅刻だネ。

「よっ、と」

トイレに行き、着替えて顔を洗い、歯を磨くので5分。8時58分。普通なら、ここで打ち止めだが、俺は違う。転移魔法を発動させて瞬時に校舎前に跳んだ俺は（とは言え、この魔法を周囲に晒すつもりは無かったので校舎前付近の茂みに跳んだのだが）、急いで下駄箱へとダッシュした。下駄箱はどれを使っているのか分からない為、ひとまず外履きは一番上に置いておく。スクールバッグから上履きを取り出し、いそいそと履いていたところで。

「あら？　もしかして転校生君？」

「はい？」

とある教師に出くわした。

キンコンカンコンコン

チャイムも、鳴った。

「まったく、初日から遅刻なんていい度胸ね」

「遅刻はしていません。チャームは、担任である貴方に会ってから鳴りました」

「でも、教室には居なかったでしょう？」

「新人生は、担任の後に入って自己紹介するのが習わしでしょう？」

「……確かにそうだね。じゃ、じゃあ遅刻じゃないってことかしらあれ？ 納得してくれるの？ いや、そっちの方が嬉しいんだけども。」

俺の横を歩いているのは、今日から俺のクラスとなる担任で、名前は白石はるか。今の短いやりとりからも分かる通り、温和でかわばわしてるお方っぽい。ちなみに見た目もかわばわしてる。

「……何か失礼なこと考えてない？ 中条君」

「いえ、滅相もない」

見た目に反して、鋭かった。

階段を上り切ったところから、徐々に生徒の喧騒が高まってきた。学校特有のざわざわとした音が響く。

「貴方のクラスは2年A組よ。さっきも言った通り、私が担任を務めるわ」

「はい」

……2年A組。あれ、何か引つかかるな？ 何かを忘れているよな……。

「到着よ」

そんなもやもやを抱えているうちに、いつの間にやら教室の扉の前へと来ていた。

「じゃ、私が先に入って君の事を話すから。呼んだら入ってきてくれる？」

「分かりました」

俺の答えに頷くと、白石先生が扉を開け中へと入っていく。閉められた扉の中からの喧騒が大きくなった。

「どうやら、噂の転校生とやらは相当に注目されているようだ」

他人事のように呟いてみる。つーか、実際どうしろってんだ。ほんとに俺、期待されること何もできないよ？

そんな事を考えているうちにお呼びがかかった。

「中条くーん、入ってきてー」

しょうがない。ま、何とかなるか。樂觀的に結論づけ、目の前の扉を開いた。

「お？」

教室に入って、最初に目があったのは、一番前・出入口口に席を構えていた将人だった。ああ、そういや、昨日2年A組だっていつてたな。……ん？ 将人？

「あ」

思い出した。そういや、今朝一緒に行くって待ち合わせてたんだ。「聖夜あー！！ てめえ今までどこにへばおっ！？」

「うるさい、落ち着け」

将人の叫びを、隣の席に座っていた修平のアップーが止める。そのまま、くいつと顎で先を促してくれた。どうやら、一先ずは紹介を済ませておけということらしい。その後ろに座っていたとおるも、苦笑しながら頷いていた。……こりゃ、後で土下座だな。

「中条君？」

「あ、はい」

いつまで立つても入り口付近から動かない俺を不審に思ったのか、白石先生が声をかけてくる。流石にこのまま突っ立っているわけにもいかない。教卓まで移動する。

教室をぐるりと見渡してみる。将人・修平・とおる・舞。初めて来た学校、その自己紹介の段階で、既に顔見知りか4人。これはとても心強かった。

「初めまして、中条聖夜と申します。つい先日日本に戻ってきたばかりでして。右も左も分からない身ですが、どうぞこれからよろし

」

……ん？ 4人？ ふと、我に返り、目を上げて後悔した。

「——くしてくれなくて結構です。それでは失礼しました」
「は？」

担任の間の抜けた声を余所に、すぐさま踵を返す。やばいやばいやばいやばい。おかしいだろ？ 何で——。

「どこに行くのかしらあ？」

突如。がっしりと俺の肩を掴む手。何で——。

「人と目が合うなり、逃げるなんてつれないじゃない」

「は、早いな。ここまで来るの」

訳の分からない言葉しか出てこなかった。

「うふふ。アリガト。私、身体強化魔法には自信あるの」

引きつった顔になっていることは、重々承知してる。顔の表情が言うことを聞かない。何で——。

「ま、舞……？」

「ええ、そうよ」

貴方がいるんでしょう。

「私は花園舞。よろしくね？ 転校生の中条聖夜さん」

わ、すっごい良い笑顔。こいつの性格を知らなけりゃ、多分惚れてるね。

「先生、申し訳ございませんがこの転校生。少々お借りしますわ」
「へ？」

白石先生が目を丸くする。その言葉に、黙っていた生徒の間にもざわめきが走った。当たり前だ。

「あ、あの……転校生の立場としては、この挨拶が最初のイメージを決めるわけでした……。流石にここで離脱するのは……」

「いいから来なさい。場所は屋上で良いわね」

「ひいひい！！」

弱き者である俺は、成す術なく引きづられていった……。

「ちょ、ちょっと待って！ 今はもうホームルーム中よー！」
ばたん！

力の抜ける声で注意しながら、担任・白石はるかも教室も飛び出していく。閉められた教室の扉。残された生徒たちは、啞然とした表情のまま着席していた。

「な、なに？ 今の」

誰かがぼつりと呟く。その短い言葉に、このクラス全ての人間の疑問が凝縮されていた。

「アイツ、花園さんと知り合いだったのか」

「顔見知りのようではあったな」

将人の言葉に、修平が頷く。

「なるほどね」

とおるだけは、なぜか訳知り顔で頷いていた。

「何かなるほどなんだ？」

「いや、聖夜のことさ。彼、魔力を買われてここに來たって行つてたろ？ この学園がどうやって聖也の事を知ったのかが謎だったんだけど……。花園家の口利きがあつたのなら、納得だと思つてね」

「おお、確かに」

とおるの考えに、将人がぽんと手を叩く。

「いや、だとしたら不自然じゃないか？ だって、聖夜の奴。花園の御嬢さん見て驚いてたろ。口利きしてもらつたのだとしたら、あのリアクションはおかしいと思うが……」

「あ、そう言えばそうか。うむむ？ じゃあなんで……」

修平のもつともな話に、解けかけていた謎が思わぬところで泥沼に陥り、とおるが再び思考モードに移る。が、それも長くは続かなかった。

「ちよつと、いいかしら……」

「ん？」

「え？」

「ほ？」

後ろ手に声を掛けられ、三者三様の声と共に振り返る。そこには、このクラスが誇る2大お嬢様の片割れ・姫百合可憐が立っていた。

「珍しいこともあったもんだ。何か用かい、姫百合の御嬢さん」

おそらく、向こうから話しかけてきたのは初めて。ぱくぱくと口が回らない将人とおるに代わって、修平が突然の来訪者に応対した。

「ええ。差支えなければ教えて欲しいのだけれど。今こちらにいらしていた転校生とはお知り合いかしら？」

「知り合いかと聞かれれば首を縦に振るが……。ただ、古くからの付き合いとかではないぞ。俺たちもアイツに会ったのは昨日だ。それも学生寮で偶然な。アイツに関する質問ならば、おそらく俺たちも答えられない」

「……そう。……もしかと思ったけど、花園さんのご友人ならまた別件かしら……？」

何か思うことでもあるのか。可憐は自身の唇を撫でながら、そう呟いた。

「……花園の御嬢さんも何やら面識があつたようだし、何かあるのか？」

「え？ あ、いえ……。そういうわけではないの」

修平の質問に、可憐はふるふると首を振った。

「急にごめんなさいね。教えてくれて、ありがとう」

につこりと笑みを浮かべ、可憐は踵を返して自分の席へと戻っていく。それを見たとおるが、はあとため息をついた。

「相も変わらず、女性が苦手だな」

「ほつといてくれよ。それに苦手なわけじゃない。緊張するだけだ」
修平のからかいに、とおるが反論する。

「似たようなものじゃあ——」

「いいや、違うね」

即答だった。

「分かった分かった。それにしても将人、お前まで黙ってどうした？　いつもお近づきになりたいと言ってたじゃないか」

「……ふ」

「ふ？」

「不意を突かれた」

「あつそ」

将人の答えに興味を失ったのか、修平はその一言で会話を断ち切った。

がららっ！！

ちょうどそのタイミングで、教室の扉が開く。見れば、白石はるかが1人でとぼとぼ帰還してきたところだった。

「うええ……。ダメだったよう」

やっぱりな。生徒全員が、同じ感想を抱いていた。

「さて、きっちり説明してもらいましょうか？」

女子から屋上に呼び出される。どうしてこうも魅惑的なシチュエーションであるにも関わらず、胸が一向にときめかないのだろう。ああ、分かってる。こんな疑問を持ちつつも、俺は既にその答えを知ってるさ。

なぜなら、呼び出してきた相手が花園舞だから。

理由なんて、これで充分だろ？　だって、こいつに引きずられるようにここまで連れてこられたんだぜ。しかもここから先、あるのは俺の告白であって（断じてラブリーな意味ではない）、可愛い女子からの告白ではないからだ。

「聞いているのかしら？　それとも、その耳は只の飾り？　ならいらないわよねえ」

「聞いてる！ あ、いや……聞いてます!!」

恐ろしいほどの怒気で、思わず敬語になっちまった。チキンとか言うな！ 知ってるから！

「で、どういふことなの？ アンタ、護衛の仕事するって言ってたじゃない」

「いや、だからな？ その仕事をしにここへ来たのであつてだな…

…」

「ほおう？」

あ。やべ。

「護衛任務の為に、この学園へ……ね」

「あー。うー。えー」

やべー。何にも言い訳思いつかねー。

「私の護衛じゃないわね。だったら昨日逃げるはずもなし……。つまり——」

目の前の相手を射殺しそうな視線が、俺を貫く。

「姫百合可憐、ね」

バレタ。

「何であの女なのよ!!」

「何でも何もあるか!! 護衛が対象選べるわけねえだろ!!」

「何で!! あのだ!! 女!! なのよ!!」

「っ!! ぐ、ぐるじい!!」

舞は思いつきり俺の胸倉を掴みあげたかと思うと、前後にぶんぶん揺らしてくる。これはまずい。ほ、ほんとに、きつい……。

「ぎ、ぎぶ……」

「ふんっ」

どさつと崩れ落ちる。よ、ようやく酸素が吸える。呼吸のありがたみって奴を知ったぜ。

「はあ……はあ。何だよ……。お前、姫百合可憐と仲悪いのか？」

「良いわけないでしょ!!」

「……いや、知らんけども」

「つーか、知るわけねえだろ。」

「あいつ、ほんつつつつつとくに、嫌な奴なの！！！！！」

「落ち着け。取りあえず、お前が本気で嫌っていることはよく分かったから」

「聞きなさいよ！ アイツったら、ちよつと顔が良くて成績優秀だからって、学園中の男たちから人気集めてんのよ！？ そのくせそれを気にしないかのような素振りしちやって！ 猫かぶってんだわきつと！ だから友達いないのね！！！」

「……それ、お前とどこが違うんだ？」

「……え？」

俺の発言がよほど心外だったのか、舞はぴたりと動きを止めた。

「お前は顔が良くて成績優秀でも、男たちから人気ないのか？」

「い、いや……それは、ちよつとはあると思うけど」

俺の質問に、舞がたじろぐ。畳み掛けることにした。

「お前はそいつらに誠心誠意全力で応えてやってるのか？」

「い、いや……。流石にそれは私のキャラじゃないというか」

「お前は猫かぶってないのか？」

「い、いや……。それはこのテンションだと周りヒいちゃうし多少はかぶるけど」

「最後だ。……お前に、友達はあるのか？」

「い、いや……。それがあれから友達なんて1人も——って、何言わせんのよ！！！！！」

「がぶへっ！？」

拳が、俺の右頬を容赦なく捉えた。

「いてえなこの野郎！！！」

「アンタが余計な事言わせるからじゃないの！！！！！」

「お、おい！！ 身体強化魔法を発動してんじゃねえ！！！」

>しばらく、そのままでお待ちください<

「はあ……はあ……。う、腕を上げたわね、アンタ」

「はあ……はあ……。お、お前に護衛はいらねえよ。俺は今確信した」

俺の体術についてこれるとは……。こいつが守ってもらおう立場になることは、未来永劫ないな。間違いなく護衛の方が足を引っ張るだろう。

「アンタ、その仕事降りなさい」

「……なんだと？」

舞からの予想外の命令口調に、思わず顔を上げる。

「軽く手を合わせて分かったでしょ？ 私だつて中々のもんよ。そうでなくとも、この学園のセキュリティは見た？ この学園に護衛なんて必要ないのよ」

そう断言される。確かに、それは俺も感じていたことではあるが

……。

「ま、そりゃ無理だな」

「何だよー!!」

「受けちまったからだ」

「っ」

俺の断言に、舞が口を噤む。

「俺は、この仕事を正式に受諾した。逃げるつもりはねえよ。めんどくせーけどな」

「……」

「それに、お前がいるから平気つて。女に任せてはい辞めますなんて言えるはずねえだろ」

「……ばか」

舞がぼそりと呟く。一度俯いたが、直ぐに顔を上げた。そうか、分かってくれたのか。

「そんなに、あの女がいいわけね」

「……は？」

あれ。話、違くない？

「アンタは、ああいう女が好みってわけ……」

「ぐぐぐぐぐぐ……」

こ、この言いようのないプレッシャーは何だ!?

「お、落ち着け舞! そもそもさっきの自己紹介で教卓立った時には、顔馴染みの方ばかりに気を取られてて、姫百合可憐の顔すらまだ見てねえんだから!」

「そ、そうなの?」

俺のその言葉に、舞から発せられるどす黒いオーラがぴたりと止んだ。……よし、このまま押し切れ!!

「だ、だからさ。紹介してくんない?」

あ、やべ。ミスった。この発言は無いわ。

「……聖夜あ。アンタ」

「は、はい」

「死ねえっ!……!!」

どおおおおおおんっ!!

屋上で、無慈悲の魔法が炸裂した。

後から知った話。どうやら、舞は青藍が全寮制と謳っているにも関わらず、ちよくちよく自宅へ戻っているらしい。無断で。本人曰く、寮の部屋では不自由とのこと。何が不自由なのかは怖くて聞けなかったが、どうせ“しもべ”の数が少なくて困ったとかそんな感じはずだ。……たぶんね。

ともあれ、俺が昨日感じた安堵感は、残念ながら見当違いも甚だしい空喜びだったのだ。舞が通っているのは、間違いなく私立・青藍魔法学園であり、そのクラスはまさかの俺と同じであり、将人・とおる・修平の3人とも同じであり、俺の護衛対象である姫百合可憐とも同じでいわゆる2年A組という名を冠するクラスであり、つまるところ俺に平穏な日々は訪れないであろうことをその結果は雄

弁に物語っていたというわけだ。

すまん。言い回しがめんどくさかったな。端的言えば、俺と舞は同じクラスでした。

一時限目の授業は、当然のように遅刻した。担当は残念ながら白石先生ではなく、なぜ俺たちがいないのか分かるはずもない教師であり、俺が教室後方の扉を開けて入るなり訝しげな表情を見せるものの、後から続いて入ってきた舞を見て驚愕した表情を作り、特にお咎めの言葉を発するでもなくただ一言「席に着け」と言ってきた……舞、お前この学校でどういうキャラで通ってるんだ？

「授業を続けます」

教師が黒板へと視線を戻し、俺と舞も各々の席へと座る。席は一番奥の窓側から2番目だと白石先生から聞いていた為、迷わずに済んだ。それにしても。よくある転校生質問責めって奴には遭わなかったなあと思いつつ、それが不可能な状況であつたということに直ぐに考えが至る。そりゃそうか。だって、自己紹介もおざなりに舞によって連れ去られ、授業中に戻ってきたんだからな。話す暇なんてあつたもんじゃない。

と、いうよりも。折角登校初日の遅刻は免れたと思った矢先、まさか1限目の授業を遅刻するとは。しかも教室移動で迷いましたとかでもなく、普通に自分のクラスでの授業であるにも関わらず、だ。どんなジョークだよ。

と、そこまで考えて窓の外へと視界を向けようとしたところで。
「っ！？」

皆が皆俺の方へと意識を向けていたら、間違いなく不審な目で見られるだろうと断言できるような拳動で、俺は強引に顔を正面へと戻した。咄嗟の行動だった。許してほしい。だって、ビビるだろ。

俺の隣は、まさかの姫百合可憐。その人だった。

一瞬、こちらに視線を送ってきたようだが、直ぐに姫百合も前へと視線を戻した。怪しまれたか？ いや、何も言わずに前を向いたんだからおそらくはバレてはいない。あ、いや。別に視線が合ったところで問題は無いのか。悪いことをしてるわけじゃない。何見てるんですかとか聞かれたら、横に座ってる子が美人でびっくりしましたとか言えば……。無理でしょ。そんなこと言おうものなら、舞に木端微塵にされそうだ。つーかそんな齒の浮いたようなセリフを言う度胸も俺には無いな。はは。じゃ、やっぱ俺の行動は正しかったわ。

「——くん。中条聖夜くん」

「へ？ あ、はい」

どうやら、いつの間にやら呼ばれていたらしい。がたりという音を立てて、立ち上がる。

「答えは？」

……え？ 何の？ そういや、まだ教科書すら出してなかった。まずくない？ ここで聞いてませんでしたなんて言おうものなら、俺の好感度ガタ落ちじゃん。

「……53」

「へ？」

隣から、ぼそりと声を掛けられる。53？ なんだそりゃ……つて、答えか！

「じ、53です」

「……正解だ。教科書すら出さずに何してるかと思えば……。ちゃんと聞いているじゃないか。座ってよし」
おお。

生徒間で、賞賛の声が上がる。いや、これ俺がすごいんじゃないよ？ 席へ座りつつ、優しい隣人に声をかける。

「さ、さんきゅーな。助かったよ」

「……いえ」

姫百合は顔にかかった髪を耳へとかけつつこちらを向いた。

「転校初日では、色々とあるでしょうし。お気になさらず」
爽やかな笑顔を向けてくるお隣さん。

この俺の醜態が、姫百合可憐とのファーストコンタクトとなった。

第4話 お待ちかねの…？（前書き）

ここで、作中で使ってる マークについて触れておきたいと思います。

基本的に文章の間に入るこのマークは、場面転換を意味しますが、第3話のように マークがつく場合もあります。

これは、文章が聖夜視点でないときに用います。

その後再び マークが付けば、視点が戻ったと考えて下さい。

そんな感じで、これからお願いします。

第4話 お待ちかねの…？

突然だが、この場を借りて改めて明言しておこうと思う。俺こと中条聖夜は、呪文詠唱ができない。

魔法とは現代科学では証明出来ない未知なる力。あるものは物体を燃やし。あるものは物体を浮かせ。あるものは物体を消し去る。そういった現代科学のメカニズムでは証明できない力の総称として用いられる。

魔法使いが表舞台に胎動してから、どれほどの月日が流れたのだろうか。一昔前のテレビアニメを見てみると、魔法少女やら何やらが使い魔を連れつつ魔法のステッキが何かで華麗に魔法を発動させ、必殺技と共に悪を消滅させるものが多い。が、実際はそんなメルヘンチックなものなど使用されない。

魔法伝導体。通称・M a s i c C o n d u c t o r。

マジック・コンダクター

MCと略されることもあるが、それはいい。ともかく、この機械が魔法の杖の代わりつてわけだ。使い方は簡単。自分の腕なり足なりにセツトするだけ。ベルトを巻くだけでいい。見栄えは杖に比べれば劣るだろうが、実戦にそんなものは必要ない。

とはいえ、このMCさえあれば誰でも魔法が使えるかと問われれば、その答えはN oだ。魔法は先天的な才能に左右される。魔力という名称とて、このエネルギーが無ければ人は生きていられない。つまり、魔力が0の人間は存在しない。しかし、人間は誰しも魔力を持っているとはいえ、その魔力容量はそれぞれだ。魔法として具現化出来ない程の微々たる量しか持たぬ者もいれば、膨大過ぎる程の魔力を持つ者もいる。

後者の代表格としては、姫百合可憐・花園舞、そして俺とかが拳

げられる。自慢じゃないよ？ 詠唱できないくせに宝の持ち腐れとか言うな、そこー！ ……こほん、失礼。で、だ。話を戻す。何が言いたいかというと、MCがあれば誰しもが平等な魔法使いになれるわけではない。

魔法は、“一般的に”呪文詠唱を行うことで発動する。

これは、自身の体内に眠る魔力を、“音”によって導き魔法を練るためである。呪文詠唱には、大きく分けて2つの種類がある。「始動キー」と「放出キー」だ。

「始動キー」とは、読んで字の如く魔力を始動させるために用いるキーを指す。どんな“音”を用いても構わない。これはあくまで自身の体内に眠る魔力を循環・活性化させる為のものであり、魔法発現には直接的には関係しない。つまり、『プリティー・プリティー・マイラブリ』とかでも構わないわけだ。ちなみに今の『マイ』は『my』の方ではなくてだな……。いや、ちょっと待って。それは構うわ。やっぱやめよう。人として大切な何かを見失いそうだし、いくら詠唱できないからって、呪文にケチつける必要は無かったね。で、もう1つの「放出キー」だが、これも文字通りだな。始動キーによって循環・活性化した魔力を、魔法という形に変化・放出させるキーってわけだ。こいつは始動キーと違い、どんな“音”でもいいってわけにはいかない。ま、当然っちゃ当然だろ？ なにせ、この“音”こそが魔法の源泉。つまり魔法を形作る核ってわけだ。放出キーにも2通りあり、自身の考えたオリジナルキーと、世界魔法協議会が公認するオフィシャルキーがある。

世界魔法協議会とは、魔法使いの魔法使いによる魔法使いの為に組織……。とまではいかないが、ともかく魔法使いによって構成される、世界的機関とでも考えてくれればいい。魔法に関する全ての権限を握っており、魔法使いの資格試験や法律、禁呪の指定なども執り行っている。

で。基本的に用いられるのは後者。オリジナルで魔法を発現するなんて、そうできることじゃない。仮に万が一。できてしまったら、魔法協議会に申請する。それが個人だけでなく万人によって使用できるということが証明されれば（ここで言う万人とは、あくまで魔法を使える者のみに限る）、晴れてオフィシャルキーとなり、新呪文開発者として『呪文大全集』という公認の呪文書に名を残すことができる。

これが呪文詠唱と呼ばれるものの仕組み。魔法使いは、このスタイルに乗っ取り呪文を詠唱し、魔法を発動させているというわけだ。つまりところ、MCなんてのは名前の通り、あくまで魔力を内から外へと伝導させるための補助道具でしかない。確かに、魔法発現までの工程をスムーズに進める為には是非欲しいツールではあるものの、これが無いから魔法の一切が使えませんかなんてことには成り得ない（当然、未熟なものであればMCに頼りきりで、無ければ魔法が暴走するってことは有り得る）。

そして、それは詠唱も同じこと。魔法に慣れてくれば、“音”の力を借りずとも魔法は発現できるようになる。魔法の核を形作る放出キーとて、それはあくまで魔法をそういつた形に変化させるよう刺激する為の“音”であり、それが物理的な核となるわけではない。卓越した魔法使いは、“音”を用いずとも自身の体内に眠る魔力を刺激し、思い思いの魔法を発現できる。それを、世間一般では“詠唱破棄”や“無詠唱”と言うわけだ。

別に気取っているとかではなく、俺はそれなりに勉強できる方だと思う。なにせこれまで俺を鍛え上げてきたあの女は、性格以外に欠点らしい欠点が見当たらない完璧超人であり、俺があの女に同行しているのとやってる時も（断じてエロい意味ではない）、暇を見ては俺に勉学を叩きこんでいた。

仕事の合間に魔法の修行と学生の本分とも言えるお勉強。正直なところ相当ハードだったが、今にして思えば後者2つはあの女なりの優しさだったと思えなくもない。

……いや、思えないね。やっぱ取り消す。あの女に感謝すべきことなどない。なぜなら、それを補って余りあるほど俺はあの女に貢献しているはずだからだ。ともあれ。そう言ったよく分からんことを考えながら、俺は2限目である呪文詠唱の授業を流しつつ聞いていた。そう、今は2限目の呪文に関する授業である。

結局、1限目と2限目の間にある10分間の休憩時間で、質問責めに合うことは無かった。別に。俺が皆から興味を持たれてないというわけではない……と思う。なぜなら、1限目で数学を担当していた教師は、授業終了のチャイムにまったく気づいた素振りをみせず、あるうことか2限目の教師が教室に姿を現したところで、やっと現状に気づき退室していったからだ。

よって休憩時間は一切なし。そのまま2限目の授業へと突入していた。が、それももう終わり、だな。

きーんこーんかーんこーん

そこでタイミングを見計らったかのようにチャイムが鳴り響いた。

「聖夜あー！！ てめえ今朝どこ行ってたんだー！！」

さっそく、将人がやってきた。

「いや、寝坊した。すまん」

「寝坊？ 俺たち、お前の部屋まで行っただんぜ？」

「そうなのか？」

「結構強めにノックしたし、呼んだよな？」

「ああ、少なくとも俺とお前でお前を抑え込まねばならんくらいの大音量でな」

将人が後ろに声を掛けると、ついてきていた修平がそう返した。

どうやら、相当熟睡していたらしい。

「ほんと、悪かった。すまない」

「あ、いや。そこまでしなくていいんだけどよ」

素直に立ち上がり、頭を下げる。その姿勢に意表を突かれたのか、将人が若干たじろぐ。

「ちよつと本城！ なに貴方転校生にいきなり頭下げさせてんのよ！！」

「そうよ、さいてー」

「え！？ 俺悪いの！？」

いつの間にかこちらに集まり始めていたクラスメイトから、思わぬ口撃（誤字にあらず）を受け、将人が目を白黒させる。

「そーだそーだおーぼーだぞー」

「うん。いきなりアレは無いよね」

「てめえらも第三者演じてんじゃねえよ！！」

いつの間にか周囲を取り囲むクラスメイトに交じり野次を飛ばしていた修平とおるに、将人が抗議の声をあげる。しかし、善戦空しく数の暴力に飲み込まれた。

そして、ある意味でお待ちかねだった質問タイムが到来した。

昨日の内に泰造氏に連絡を入れておいたのは、正解だったということだろう。『俺が呪文詠唱できないことを克服するためにこの学園に来た』という捏造話は、俺と舞が戦線離脱している間に白石先生が説明していたらしい。

よって、クラスメイトから寄せられる声は「がんばれ」とか「力になるよ」とかそういったエールが多く、罪悪感に苛まれまくったあれ、こんな使い方で良かったつけ。まあいいか。

「向こうでは何をしていたんだい？」

「こっちと同じさ。親の事情で向こうに飛んただけで、大層な

目的を掲げてたわけじゃない。普通に学生やって普通に戻ってきた」

「普通で片付けられるのが凄いやな。言語の壁とかあったろ？」

「はは。そんなの気合でなんとかなるって、向こうで実感したよ」
当たり前障りのない解答で遣り過ごしていく。喋るたびに、事実が
フィクションへと塗り替えられていく。しょうがないことだけ
ども。

「向こうでも魔法学校に？」

「ああ。実際のところ、俺はほぼ攻撃魔法も防御魔法も使えない
かな。実習とかでは苦労しまくりさ」

「でも、それを補って余りあるほどの魔力があるんだろ？」

「宝の持ち腐れだけだな」

「羨むべきなのか複雑なところね」

「人間、自分に無いものを欲しがるものさ。君が俺を羨む気持ちが
あるように、俺は君が羨ましいんだぜ。詠唱できるできないじゃ、
大違いだからな」

「……大成してるね」

「そんなことないと思うけど……」

その感想には、苦笑せざるを得ないな。あの女のおかげでいろ
ろと悟りの境地に立った面もある。

「……で、多分ここにいる皆の誰もが聞きたい質問だと思うんだけ
ど」

1人の女子生徒が、急に思わせぶりな前置きを置いてきた。

「？」

「花園さんとは、どういったご関係？」

ぶつ。思わず心の中で嘖き出してしまった。一瞬、この輪に加わ
っていない舞の方へと目を向けるが、背を向けたつきりで反応は分
からない。さて、どう答えたものかと思ったところで。

きーんこーんかーんこーん

救いのチャイムが鳴り響いたのだった。

昼休み。チャイムが鳴るのと同時に、2人の女子生徒が立ち上がった。それは、花園舞と姫百合可憐。そそくさと教室を出ていく。2人とも同じ行動を取るものだから、てっきり2人で飯でも行くのかと思いつつ、その考えは直ぐに改める。そういや、仲悪いつて舞が言ってたな。おそらく、別々でソロだろう。いや、姫百合の方は妹がいるんだっけか。多分一緒に食うだろうな。……それにしても「そんな壁作ってちゃ、友達なんてできるはずねえだろ……」
「壁ってなんだい？」
「うおつとお!？」

急に横から声を掛けられたもんだから、ビビった。そこには、将人・とおる・修平のいつも通り3人組が立っていた。

「学食行こうぜ」

「弁当ってわけじゃないだろ？」

「ああ、そうするか」

3人の誘いをありがたく頂戴し、席を立つ。ちらりと、主を失った隣の机を見る。……そんなに、敬遠されるような娘じゃなかったと思うんだけどな。1限目の時、こっそり解答を教えてくれたことを思い出す。お礼を言った時の反応といい、高飛車な感じも無かったし、寧ろ付き合やすそうなイメージを受けてたんだが……。

「おーい、いくぞー」

「あ、ああ。今行く」

いつの間にかやら教室の外で待たせてしまっていたらしい。俺は思考を断ち切って教室を出た。

学食も、かなりの広さだった。将人たちが走って席を取りにくいような真似をしなかったので、それなりの広さだとは思っていたが

ここまでとは。確かにこれならば時間に追われることもないだろう。寮の食堂と同じく、テイクアウトも出来るみたいなので、急ぐ必要も無いということか。

「じゃ、食券買いに行くか」

券売機前の列に並び、ものの数分で機械の前に立つ。ポケットからがま口財布を取り出し、中身を確認する。残額150円。昨日の夕飯は将人たちがテイクアウトして来てくれたもので、生姜焼きのどんぶりものだった。350円。学生の為に存在する食堂ならではの低価格だが、俺にとってはそうではない。今日から飯どうするか。と、言うより今日の昼飯は……。俺は、色とりどりのメニューを視界に抑えつつ、泣く泣く一番安いものをプッシュした。

「それにしても、お前随分な人気だな」

「へ？　そうか？」

学食で素うどんをすすっていたところで、将人から随分と予想外なセリフを受けた。

「やはりイケメンは正義ってことか。目つきが多少悪くても何とかなるんだな」

「お前のセリフには、悪意しかないことだけはよく分かったよ」
うどんをすすする手を再開させる。

「つーか、お前らだって別に悪くねえじゃねーか」

将人は少々馬鹿っぽい印象を受けるものの悪くないし、とおるは長い前髪が中性的な印象を出しているが、それが整った顔を際立たせていると思う。修平に至っては、非の打ちどころのないイケメンっぷりだ。くそ。なんか段々負けた気になってきたな。いや、将人はともかくこの2人には負けてるんだらうけどさ。

「でも、聖夜の髪は凄い印象的だよね」

「ん？　ああ、これね」

前髪を摘んでみる。そこには見慣れた白色の毛があった。

「真っ白なその髪は、凄くインパクトあるよ?」

「だろうな。けど、好きでこうなったわけじゃないからな」

「らしいな。膨大な魔力による副作用で色素が抜け落ちたって話は、俄かには信じがたいが」

修平が俺の髪を見ながらそう呟く。髪の話は昨日のうちに既にしていた為、改めて説明するまでもない。

「信じがたくなんてないと思うけどな。舞だってあの赤い髪は膨大な魔力を持つ一族の遺伝だし、姫百合可憐だって……ああ、あいつは真っ黒だったか」

「それだよ、聖夜」

「何がそれなんだ?」

とおるの訳の分からぬ指摘に、首を傾げる。

「2人のお嬢様の呼び名さ。どうして姫百合さんはフルネームで呼び捨ててるのに、花園さんは下の名前で呼び捨てなんだい? やっぱり顔馴染みだったりするのかな」

「ああ、そういうことか」

何を疑問に思われていたのか納得した。まあ、別にここは隠すところでもないか。

「幼馴染さ。昔は一緒に遊んでた仲だ。俺がアメリカに渡ってから疎遠になっちまったけどな」

「お、幼馴染だと!」

将人が急に吼えたかと思ったら、急に立ち上がった。

「……そうだけど?」

「こ」

「なに?」

「このブルジョアじめるとっ!」

「うおっと、すまん。つい」

飛び掛かってきた将人に、反射的に膝を出してしまった。カウンのような形でみぞおちに吸い込まれていった俺の膝は、将人の

体に甚大なる被害を与えたらしい。その場で唸りながら蹲る。

「別に聖夜は悪くないと思う」

「ああ、今のは勝手に暴走して勝手にやられたそいつが悪いな」
とおると修平は、同情のかけらも見せずにそう言い切った。

「けど、聖夜って何かやってるのかい？」

「何の話だ？」

とおるの疑問に、再び首を傾げる。

「お前の動き。ただの素人には見えないからな。素早いし、狙いも的確だ」

「ああ、そういうことか」

修平による言葉の補完で、質問の意味を理解した。

「体術を少々つてとこか。魔法が使えないからな。実技では肉弾戦に頼ることもしばしばだ」

「なるほど。昨日見た限りじゃ、力も体力もあるようだし良い選択だと思う。詠唱できずとも、それなりの魔法は使えるんだろう？」

「……驚いたな。その通りだ」

まさか、これまでの断片的な情報だけで、俺の根本的な魔法スタイルに考えが及ぶとは思ってもみなかった。修平への認識評価を、更に上げておく必要があるようだ。

「ま、俺が得意とするのは身体強化魔法を用いた近接術だ。要は殴り合いってことだな」

「俺と一緒にだな！！」

「うおっ！？」

何の前触れも無くいきなり顔を上げて叫ぶ将人に、若干ヒク。

「俺も近接、肉弾戦バトルだ！！ やっぱ男は拳で語らなくちゃな！！」

「……いや、別に俺は男の尊厳を賭けたスタイルだと思っているわけではないが」

「あはは。じゃあ、聖夜と将人が戦ったら面白いかもね」

「確かに。将人の近接術についていける使い手は、俺たちのクラス

にもそういない」

「？　じゃあ、一応いるってことか」

「いるだろうってことさ」

とおるが曖昧な答えを返してくる。

「うちの誇る2大お嬢様は、その手の内を明かしたことがないからね」

「御嬢さん方は、基本的に実技でも力を発揮したがないんだ。する時はあの2人がタイムンで対戦相手に指定された時のみ。その時は戦争かっというくらい大魔法が飛び交うけどな」

「普通にこえーな」

「怖いなんてものじゃないよ。それを見た教師は、あの2人を対戦相手として二度と指定しなくなるほどだからね。だから、あの魔法大戦が再現されたのは今までで2回しかない」

……つまり、1年の時に1回と2年の時に1回ってわけか。在学中にあるとしたら、後は3年に上がってからってことになるな。いや、流石に新しい教師に代わっても、2度もあった悲劇なら学習してるかな。

「ま、そんなわけで御嬢さんたちの近接術は謎のままってわけさ」

「そのまま永遠に謎のままでもいいと思うな」

そんな恐ろしい場面に出くわしたら、秘密なんてお構いなしに転移魔法使ってとんずらしそうだ。

「次はいよいよ魔法実習だぜ。今日はこの為に登校したといっても過言ではないっ」

いや、過言だろ。

「将人はそんなに実習が好きなのか？」

「当たり前だろ！？」　机に噛り付いてがりがり勉強なんて、性に合わないんだよ俺は」

ま、そりゃそうか。お前ががり勉くんだったら、俺は一度眼科で精密検査受けてくるわ。

「つーわけで、今日の授業が実践形式だったら、俺と勝負しようぜ

「!!」

「どういわけかは知らんが、断る。ふう。午後の授業はフケるかな」

「な、なんでだよ!? 魔法実習だぞ!!」

「いや、その魔法が満足に使えないわけだから実習が苦痛なわけだけれども」

「うつ……。それは……すまん」

「あ、いや。そういう意味で言っただけじゃない。俺こそすまん。何か意地の悪い言い返しだったな」

実際のところそんな気にしているわけではなく、ただ面倒臭かったからこそ出ただけの軽口だっただけに、そうして謝られるとバツが悪くなる。

修平やおるもそうだが、こいつ等は何というべきか……。そう。引き際を知ってる。どれだけふざけた会話をしていても、相手の触れて欲しくないところや踏み込んでほしくないところには、手も足もかけてこない。こうして日本へと帰国して最初にできた3人の友人がここまでできた人間であつたということは、俺にとって間違はなく幸運なことだ。

……だからこそ、これからは俺も気を付けてかないとな。

「しょうがねえなあ……」

ぼりぼりと頭を掻きながら、そう呟く。何だ何だという目でこちらを見てくる修平とおるを視界の端に捉えながら、俺は将人と正面から向かい合った。

「もし。次の授業で、実践形式の模擬戦だと言われたのなら。……戦ってやるよ」

「おおっ!? 本当か?!」

将人が嬉しそうな声で叫ぶ。依頼の件に片が付くまでは、実力は隠しておきたかったが、ある程度は仕方がない、か。そう思いつつ、将人へ力強く頷いた。

結果から言えば、次の魔法実習の内容は魔法模擬実践だった。しかし、俺と将人の対決が実現することは無かった。なぜなら――

第5話 魔法模擬実践（前書き）

初バトル、です。

聖夜にやる気がなかったので、直ぐに終わっちゃいますけど（笑）。魔法理論等、第4話に続き、少々説明口調な部分も出てきますが、気長に付き合って下されば幸いです。

評価を5点つつ加算して下さいました方、ありがとうございます。

第5話 魔法模擬実践

属性付加という技法がある。それは読んで字の如く、魔法に属性を付加するということだ。無属性魔法（何の属性も持たぬ魔法の総称）よりも難度の高い技だが、それ故に付与された属性に準ずる独自の強さを発揮する。一般的に、付与できると言われている属性は以下の7つ。『火』『水』『雷』『土』『風』『光』『闇』である。他にもいくつか確認されているが、それは魔法使いの中でもある特別な血族たちでしか扱えておらず、そのメカニズムは不明である。よって、ここでは先に挙げた上記7つについての説明だけに留めた

い。

下記に記すのが各々の特徴、そして強弱についてである。

『火』（『風』に強いが、『水』に弱い）
攻撃系の魔法に特化する。

回復、防御、操作、移動、視覚、回帰、重力、捕縛に適さない。

『水』（『火』に強いが、『土』に弱い）
回復系の魔法を得意とする。

操作、移動、視覚、回帰、重力に適さない。

『土』（『水』に強いが、『雷』に弱い）
防御系の魔法を得意とする。また、攻撃にも優れる。

移動、視覚、回帰、重力に適さない。

『雷』（『土』に強いが、『風』に弱い）
操作系の魔法を得意とする。また、攻撃、移動にも優れる。
防御、視覚、回帰、重力に適さない。

『風』（『雷』に強いが、『火』に弱い）

移動系の魔法を得意とする。また、攻撃にも優れる。

回復、回帰に適さない。

『光』（『闇』に弱い。『闇』を除く全ての属性に強弱関係は生じない）

視覚系・回帰系の魔法を得意とする。

闇との合成ができない（無属性へと戻ってしまう為）

『闇』（『光』に弱い。『光』を除く全ての属性に強弱関係は生じない）

重力系・捕縛系の魔法を得意とする。

光との合成ができない（無属性へと戻ってしまう為）

もちろん、適さないと記されてはいるものの、絶対に扱えないというわけではない。

例えば火属性で回復、防御、操作、移動、視覚、回帰、重力が絶対に使えないとはいい切れない。但し、それはその属性の限りなく極みまで上り詰めた者でなければ実用はできないだろう。特に『火』の「特化」とは、そういう意味合いも込めて使用されている。全ての属性には、それぞれの長所・欠点があるというわけだ。

そして、今まさに。

攻撃特化・火の魔法を纏った舞の拳が、俺の腹にめり込んでいた。意識を刈り取らんとする激痛と共に、宙へと舞い上がる感覚。舞の驚愕している表情と、周りの景色をスローな映像で捉えつつ、俺の意識は闇へと消えた。

……どうしてこうなったんだろうね？

昼休みが終わり、午後の授業。今日の5・6限目は、2限続けて魔法実習の時間だった。数々の運動施設が校舎向かって左側に集中しているのに対して、魔法実習ドームだけは右側。つまり学生寮の近くに立っている。着替えて、向かって。それを休み時間10分でこなすことは不可能。かといって午後の部だから昼休みを削らねばならないわけではない。魔法実習は初めから更衣・移動に時間がかかることを承知済みで、通常授業開始時間から20分後に始まる。そんな特殊な事情もあり、魔法実習がある時は必ず2限続きになっているようだった。

「へえ……。結構様になってるじゃん」

MCが、術者の魔法発動を補佐する武器であるのに対して、魔法服は術者の身を守る防護服となる。服には複雑な魔法が編み込まれており、術者の魔力に応じて効力を発揮する。それだけならどれでもいいじゃないかと思うかもしれないが、そういうわけでもない。やはり、個人個人に合う魔法の編み方というものがあり、自分に合っているものを着ていた方が効力を発揮しやすいのだ。

よって、生徒は例外なく、オーダーメイドの魔法服を所持している。黒を基調とした魔法服。それを身に纏った俺の姿を見て、将人は感心したと言わんばかりに頷いた。

「そうだね。聖夜って名前によく合ってる。真っ黒な魔法服に映える真っ白な髪」

「ぴったりの名前を付けて貰ったってことだな」

とおると修平も、俺を見ながらうんうんと頷いている。それには、流石に苦笑せざるを得なかった。

だって、そうだろ？ 俺は、魔法が使えたから捨てられたんだ。そんな親の心情は余所に、魔法服に名前が合ってるなんて。名付け親に対する皮肉にしか聞こえないな。ま、もうあんな親への感情な

なんてとうに廃れちゃったけどさ。

「じゃ、いくか」

「おう」

ボタンとロッカーを閉めて、俺たちは更衣室を後にした。

「それでは、魔法実習の授業を開始します」

5 限目開始から、丁度20分後。魔法実習としては時間通りに、授業は開始した。まずは、担当の教師を囲い円状になりながら教師の話聞く。

「前回までは魔法球に、属性を付加させる授業でした。もちろん、まだできていない人も大丈夫ですよ。1年では魔法球の安定的な発現を。2年では属性の付加を。3年では応用を。2年の終わりまでに自身の得意属性を見つけ、発現できるようにしていきましょう」

……なるほど。泰造氏が不安になるのも無理はないか。つまり、3年になるまでは満足に魔法は使えないってことじゃないか。そりゃ、とおるが魔法大戦と称するくらいだから、舞やら姫百合可憐やらはちゃんと魔法は使えるんだろう。おそらく、見た限りでは将人やとおる、修平もそれなりの実力は有しているはずだ。が。それでもクラス全体からすれば、まだほんの一握り。そして、その程度の人数しか、魔法は扱えないということ。

「……日本の魔法教育カリキュラムが、ここまで遅れているとは」「ん？ 何か言ったか？」

無意識のうちに、ぼそつと声に出していたらしい。何でもないと答えると、将人はさよかと言って、再び視線を教師に戻した。

エリートと称される私立・青藍魔法学園。多少腕がある魔法使いが誘拐犯として潜り込んできたとしても、意外と何とかなるんじゃないかと思っていたが……。どうやら当ては外れたようだな。

「——と、いうわけで。今日は少し魔法を使った実践を行って

みましようか」

「おっしや、聞いたか聖夜。実践だつてよ実践」

「ん、聞いてたよ」

将人の問いにおざなりに答える。ほんと、どれだけ戦いに飢えてんだよ。

「但し、折角属性付加という魔法を勉強したのです。できれば、それを実践で再現できる生徒間の実践が望ましいですね。まだ属性付加が使えないという生徒たちに、どう属性付加が魔法として利用されるのかを魅せてほしいものです」

教師が、難度を上げてきた。

「聖夜。お前、属性付加使えるか？」

「ああ。一応な」

聞いてくるつてことは、将人自身については無論、ということだ。やっぱそれなりにできるみたいだな。

「では、拳手制にしましょうか。立候補はいますか？」

教師がそう述べて、ぐるりと見渡す。

「おっしや、じゃあ——」

「……聖夜。前に出なさい」

「は？」

はしゃぐ将人を尻目に、しょうがないなと思いつつ手を挙げようとしたところで。思わぬところから声を掛けられた。舞は、動揺する俺含むクラスメイトは気にも留めず、悠々とバトルフィールドへと足を進める。そのまま何の躊躇いも無く六芒星の光に包まれたフィールドへと踏み入った。

「何をしているの？ 早くしなさい」

「……」

「お、おい……。聖夜？」

呼ばれてるぞ、と修平から小突かれる。いや、もちろん知ってるわけけれども。けど、最初の実践は将人とする約束した。困惑している表情を隠そうともしない将人と、既にバトルフィールド

でスタンバイしている舞。どうすべきかと考えていたところで。

「先生。最初の模擬実践は、私と中条聖夜で行います。よろしいですか？」

「え、ええ。構いませんよ」

勝手に試合を取り付けていた。

「……しょうがねえなあ」

アイツのわがままは、やっぱり2年という月日では治らなかったらしい。ま、それでこそ舞なわけだけでも。

「いつてくるわ」

将人・修平・とおるに、それだけ告げて踏み出した。それを見た舞が、いつも通りの勝気な笑みを浮かべる。

だがな。勘違いしてるぜ、お前。俺は将人には戦うって約束をしたし、真面目に相手をするとか心の中で決めていた。けど、相手がお前になるなら話は別だ。お前と真面目に戦おうものなら、多分俺はかなりの手の内を曝け出すことになる。転移魔法が明るみにでるところの騒ぎじゃない。そうすりゃ本来の仕事に支障が出る。

俺は、呪文詠唱のできない欠陥品であり、それ以上でもそれ以下でもない。ノーマークで問題ない存在だと、思わせておく必要がある。敵がどこに潜んでいるか分からない以上、“誰に対しても”だ。バトルフィールドへと足を踏み入れ、舞と対峙する。教師を中心として輪になっていたクラスメイトたちは、バトルフィールドから少し離れたところで、思い思いの観戦場所を作っている。

「聖夜」

「何だ？」

「本気で来なさい」

「……何だって？」

「アンタ、今の自分がクラスメイトからどんな評価受けてるか知ってる？」

「さあてね。お前は知ってるのか？」

「愚問よ」

「そうか」

とりあえず、先を促しておく。

「女子更衣室での会話もそう。相当、気の毒に思われてるわね」

「……お前、会話してるのか？」

「立ち聞きしてるだけよ」

「会話しろよ。だから友達できねえんだよ」

「ほっときなさい」

俺の忠告を、舞は一言で綺麗に払った。

「あんな評価、納得いかないわ。そうでしょ？」

「……一生徒として言うならばそうだが。俺の立場として言えば、罪悪感を感じるが他は特になにも」

「嘘っ……」

舞が突然叫ぶ。他の会話は聞かれてなかっただろうが、流石にこれは誰の耳にも届いたようだ。何事だとざわめき始める。

「……大丈夫ですか？」

審判役の教師が、バトルフィールドに入ってきた。

「はい、平気です」

舞は教師に目を向けることなく。それだけ告げ、俺を睨んできた。

「私は認めないわ。アンタのあんな評価、蹴散らしてやる」

「蹴散らす、て。……もっとお上品な言葉を使えよ」

ふんつと鼻息荒く、舞が踵を返した。後は魔法で語れということらしい。俺もそれに倣い、スタート位置へと歩を進める。

……分かってる。不器用だけど、これは舞の優しさだ。我が儘なものもそうだが、その優しさも昔のまま。少し、安心したし嬉しかった。その優しさを、踏みにじってしまう行為であることは重々承知の上で。それでも。

「……悪いな、舞」

俺は、本気ではやらねえよ。

「くっそ、やりたかったぜ」

「さて。これは予想外の展開になったね」

隣で呻く将人に反応は示さず。ゆつくりとした足取りでバトルフィールドへと歩いて行く聖夜の後姿を目で追いながら、とおるは逆サイドに座り込み観戦を決め込む修平に話しかけた。

「ん、そうだな」

「？ 修平はあまり興味無しかい？」

「いや、そんなことはない」

「その割には、反応薄だね」

「そりゃ聖夜のこと言ってるんだろ？」

「？」

ますます意味が分からない、といった表情をするとおるに、修平はぼーっとした視線を聖夜に送りつつ再度口を開いた。

「花園の御嬢さんからの、名指しだぜ？ 普通なら敬遠するなりなんなりするとは思わないか？ 相手はこの国五指に入る名家の御嬢さんだ」

「……そういえば」

確かに。聖夜は面倒臭そうな表情は見せたものの、特に畏怖した様子もなかった。とおるは、先ほどの聖夜の所作を思い出しながら頷いた。

「アイツが花園の御嬢さんの实力を知らないってんなら話は分かるけど、昔からの顔馴染みだったそうじゃねえか。そうでなくとも、昼飯でおるが魔法大戦の話はしてたんだからよ」

「んじゃ、何か？ 聖夜って実は相当凄い？」

将人が話に割り込んでくる。

「……本人曰く凄いの魔法容量だけらしいけど」

「手練れの魔法使いならば、詠唱なんてそうしないだろ？ 大魔法とかは流石に無理だが」

とおるの呟きに、修平が直ぐ切り返す。

「詠唱ができないってのは、ハンデには成り得ないってことか？」

「ハンデにはなるよ、それは。特に僕たち学生なら余計にね。手練れじゃないんだから」

「けど、修平は聖夜に限ってはそうじゃないと思ってんだろ？」

「……さあてね。ま、それはこれから分かるんじゃないか？」

修平が目線を前へと戻す。そこでは、舞と聖夜がお互いにスターラインにてスタンバイしたところだった。

「バトルフィールドは、フィールド外部に影響を及ぼさぬよう障壁が展開されているだけではありません。内部には、緩衝魔法が働いています。改めて説明するまでもないとは思いますが……。強力な魔法を体に受けたとしても、ある程度は緩衝魔法が自動的に発動し、身を守ってくれます。が、あくまである程度は、です。痛いものはやはり痛い。無理だと感じたら、直ぐに棄権すること。いいですね？」

上半身を、半分以上俺に向けての説明だった。ま、当たり前か。

俺が呪文詠唱できないことは既に周知の事実。でもって、相手はエリートどころの話ではない名家のお嬢様。結果は正直見るまでも明らか、ってこと。これが、舞の言ってた俺に対する評価ってわけだ。……俺だって、別にデキた人間じゃない。言われてみると、確かに何か癪だな。って、いやいやいや。ここで自己主張とかやめちゃうね、俺。これで任務も失敗しようものなら、あの女に殺されちゃうよ。

「では、お互い。構えて」

構えて、とは。つまり、MCを起動してという意。

キウウウウウウッ

特有の機械音と共に、俺と舞のMCにスイッチが入る。

「……」
「……」

舞の、あの勝気な目が俺を射抜く。少しくらいはやり合うとするか。……少しだけね。あまりやり過ぎると、俺も本気になりそうだし。

「始め!!」

教師の手が、試合開始宣言と共に振り下ろされる。

その瞬間には、もう。舞は俺の後ろにいた。

「うおっ!?!」

紙一重のところで、後頭部目掛けて突き出された足を躲す。

「危ねえな!!」

殺るつもりだったろ、今!!

「本気で来なさいと言ったはずよ!!」

「買いかぶんじゃねえよ!!」

そのまま軸足を蹴り上げ、回転しながらもう一度伸びてくる足を肘で受け止めて、弾き返す。……めちゃくちゃ魔力込めてやがる。

身体強化魔法。その名の通り身体を強化する魔法だ。全身に魔力を循環させ、スピードやパワーを向上させる技術。これは、決して簡単にできる魔法ではない。少なくとも、2年生の段階で発現できる奴などそうはいないだろう。舞は、それを無詠唱で瞬く間に発現し、俺に特攻をかけてきたってわけだ。

で。この時点で、俺がそれなりの魔法使いだということは証明されてしまった。舞の身体強化魔法のスピードに反応し、応戦。こちらも咄嗟に身体強化を発動させてしまった。けど、しょうがないかあれ、生身で受けてたら骨が砕けてる。

「ふっ!!」

「おっと」

数回拳を交えた後、舞が後方へと跳躍し距離を空けた。

「ルー・ルーブラ・ライカ・ラインマツク——」

MCに手を掲げ、魔力を練る。……呪文詠唱、か。何を放ってくるかね。ひとまず、傍観を決め込むことにする。とはいえ、魔法はすぐに完成した。

「ファイナス」！！」

舞がそのキーを唱えきるとほぼ同時。天にかざした手元から、膨大な魔力を纏った魔法球が発現する。付与された属性は、火。

「……いきなり攻撃特化属性かよ」

適当なところで適当に喰らって適当に負けようと思っていたが、あれは無いな。緩衝魔法が発動しているフィールドとはいえ、当たらばただじゃ済まないだろう。

「……ん？」

フィールドの外で観戦しているクラスメイトから、動揺の声が上がつている。何かあったのか……って。そうか。学生の立場からして見れば、この魔法は相当レベルが高いからな。向こうであの女と仕事こなしている間に、高レベルの魔法は見慣れちゃってたからすっぱり気づかなかったぜ。

「余所見なんていい度胸じゃない！！」

その声と同時に、舞は手を振り下ろした。それに倣い、火属性を纏った巨大な火の球が向かって来る。

「んな、真正面から撃って当たるわけねえだろ」

転移魔法を使うまでもない（つーか、使っちゃいけない）。それを横目で見ながら、舞の元へと迂回するような形で回り込む。……これで、躲せるはずだった。

「甘いわね」

これ以上、この魔法に手が加わらなければ。

舞がパチンと手を鳴らす。瞬間、火属性の魔法球が“弾けた”。それ以外に表現のしようがない。巨大な1つの球体を維持していた炎の球が、小さなつぶてに分かれて四方八方に拡散する。

「うおおっ！？」

避けたと思つた魔法球からの、予想外の攻撃。後方から襲い来る無数の火球のつぶてを、身体強化で纏つた足を使い、躲す。が、そちらに気を取られていたのがいけなかった。

「はあああああつ！！！！」

その咆哮を聞いて視線を前に戻した時には、もう遅かった。俺の眼前では、既に距離を詰めていた舞が、眩い炎を拳に纏わせ構えているところだった。

……言い訳させてもらえるのなら。俺がこの試合に本気で取り組んでいれば、難なく躲せたと思う。転移魔法に頼らずとも、ある程度の身体強化に体術さえあれば、俺だってそれなりに強いはずなのだ。意識の差。意欲の差。最初からどこかで負けるつもりだった俺に、本気で俺を倒しに来た舞の攻撃をあしらうことはできず。

攻撃特化・火の魔法を纏つた舞の拳が、俺の腹にめり込むところを。そんなどうでもいいような言い訳に頭を巡らせながらぼんやりと眺めていた。

次いで襲い来る、意識を刈り取らんとする激痛。同時に、体が宙へと舞い上がる感覚。この程度の一撃で、倒せるとは思っていないかったのだろう。うそでしょと驚愕している舞の表情と、まるで目の前で大型トラックに猫がはねられた瞬間を目撃したかのような表情でこちらを見ているクラスメイトをスローな映像で捉えつつ、俺の意識は闇へと消えた。

……ほんと、どうしてこうなったんだろうね。いや、俺が望んだ結果だったわけだけでもさ。けど、もうちょい優しい魔法でやられたかったよ。

第6話 夜の学園探索（前書き）

お気に入り登録を下さった方。

感想や意見を下さった方。

文章・ストーリーに評価を下さった方。

そして『テレポーター』に興味を持ち、この最新話を開いて下さった方へ。

ありがとうございます。

これしか言えないのが歯がゆいですが、それでも。

ありがとうございます。

第6話 夜の学園探索

「……ん」

目を覚まし、まず真っ先に見えたのは真っ白な天井だった。……あれ？ 俺、何してたんだっけか。ぼんやりとした頭で思い出そうと試みたところで。

「聖夜っ！！」

「へぶっ！？」

右サイドから、急に何かが進んできた。

「って、舞？」

ああ、抱き着いてきたのか。条件反射で応戦しそうになったよ。「良かった……。良かった」

……？ 何が良かったんだ。って、ああそうか。そういや、模擬戦まがいのことをしてたんだっけか。気絶してたのか、俺。確かに思惑通り雑魚には見えたんだろうが、流石に恥ずかしすぎるな。想像を絶するやられっぷりだ。

「このくらいで俺がどうにかなるわけねえだろ。 緩衝魔法もあったおかげで、無傷だぜ？ 何心配してんだよ」

抱き着いたまま離れない舞の頭を、ぽんぽんと撫でてやる。

「だ、だって……。相当魔力込めちゃってたし……。それに、そもそもあれは威嚇のつもりで、当てるつもりなんてなくて……。ごめん。アンタなら避けられると思っ——そうよ！！ なに手を抜いて当たってんのよ！！」

「切り替えも切り返しも早えなお前は！？」

コンマ数秒の差で態度激変させてんじゃねえよ！！

「本気で来なさいって言ったじゃない！！」

「出せるわけねえだろ！！」

「アンタ、身体強化以外何も魔法使わなかったじゃないっ！！ 何でもががが！？」

「しーっ！！ しーっ！！」

下手なことを口走られるより先に、その口を塞いでおくことにする。

「ぶはっ！？ 何すんのよ！！」

若干顔を赤らめながら、舞が抗議の声を上げてくる。

「少し落ち着け。あまり人に聞かれたくない」

「……平気よ。今何時だと思ってるわけ？」

「へ？」

時計を見してみる。20時だった。

「うそ……。もうこんな時間かよ」

「アンタ、ずっと寝てたのよ。この保健室でね」

そう言われて見渡してみる。ここ、保健室だったのか。今更だけど。

「先生は？」

「帰ったわよ、先に」

そう言っ、舞は指に掛けた鍵をチャリンと回して見せる。

「……おいおい。生徒に鍵渡しちゃっていいのかよ」

「私がとつと寄越して帰りなさいって言ったからね」
ひどい話だ。

「……って。つまり、お前は俺が起きるまで待つてくれたのか？」
そういうことになる。しかし、舞の反応は予想外なものだった。

「そ、そんなわけないでしょー！！」

顔を真っ赤にして立ち上がる。

「いや、そんなわけだろ？ ずっと傍にいてくれたのか？」

「なっ……な、なっ……な」

口をパクパクさせているかと思えば、顔を下へと俯かせてしまった。

「お、おい……。舞？」

心配して、覗き込もうとする。が。結論から言えば、それが間違이었다。

「しょうがないじゃない！！ 心配だったんだから！！」

「ぶぼっ！？」

乗り出したところで、舞の拳が飛んで来た。回避もできずにまともに喰らった俺は、鼻を押さえてベッドに蹲る。

「……ひ、ひんぱいなら、グーでなくんらねえよ」

「あ、ごめん」

舞が慌てて拳を引つ込める。……もう遅いんだけどさ。

「それで？ 何で実力を隠すような真似をするのよ」

「何でって……。俺の今回の仕事は護衛なんだぜ？ あんまり俺についての情報を、相手に知られたくねえんだよ」

「……。ふうん」

「お、おい。舞？」

俺の答えに何か思う事があったのか、口元に手を当てて思案顔になる舞。……あれ、俺何か言っちゃいけないことでも言ったかな？

結局。それが何なのかは分からないまま。しばらく考え事をしていた舞が急に顔を上げて、そろそろ帰りましょうかと言言葉に従い、俺たちは帰路につくことにした。

「閉めていいのか？」

保健室を出たところで、舞が扉に鍵を掛ける。

「問題ないわ。教員室にはスペアがあるもの。これは明日返す」

保健室の先生が舞に鍵を渡している以上、舞がここを閉めてしまつたら明日困るんじゃないかと思つたが。どうやら杞憂だったようだ。

「んじゃ、帰るか」

「うん」

俺の声に、舞は素直に頷いた。

「腹減つたな……。寮の食堂って、もう閉まつちまつたかな」

舞と並んで帰る寮への並木道にて。腕時計を見ながらそう呟く。
既に21時を回っていた。

「開いてるわよ」

舞が素っ気なく答える。

「ほんとか？ 随分遅くまでやるんだな」

「部活やってる子とかは、食事遅くなるからね。流石にもう皆寮に戻った頃だけ。だから、食堂は遅くまでやってるのよ。とはいっても、22時まででだけどね」

「あと30分ちょい、か」

「ラストオーダーは30分前よ」

「あと5分じゃねえか!!」

「急ぎなさいよ。間に合うかもしれないわよ」

「ああ、つて。お前はもう飯食ったのか？」

「食べてるわけないでしょ。ずっとアンタの横にいたんだから」

「なんだよ。じゃ、一緒に行こうぜ？」

「え？」

舞が心外そうな表情で、俺の顔を見る。

「お、おい……。なぜそんな驚きの表情で俺を見る？」

「え、あ……。いやえつと……」

その問いに、舞は視線をうつろさせながら口をもごもごさせる。その反応で、納得がいった。

「あ、そうか。お前、飯に誘ってもらえるような友達いなかったのか。だからどう反応していいか分からなくげっ!？」

「皆まで言うんじゃないわよ!!」

怒りの空手チョップが、俺の首を薙いだ。の、喉が……。い、息が……。

「げほっげほっ」

「しょうがないわね。付き合っただげるわよ」

人が痛みに咳き込んでいるのを華麗にスルーして、舞がそんな事を言ってくる。…素直じゃないやつ。

「なによ、その目は」

「イエ、ナンデモアリマセン」

ジト目で睨まれ、慌てて首を横に振る。これ以上ばこばこにされるのはゴメンだ。

「変な奴。じゃ、行くわよ」

お前に言われたかねえよ。という言葉が出かけるものの、寸でのところでは堪える。口にしてたら、殺されてたかもな。自分の口に付いているストッパーに心の中で称賛を送りつつ、重大な問題に気付いてしまった。

「あ」

「……？ なに？」

突如固まった俺に、訝しげな表情で舞が問いかけてくる。

「すまん、やっぱ俺無理だわ」

俺がそのセリフを言い切る前には、舞の両手は俺の胸倉を掴んでいた。

「！？ ちょっと、それどういことよ！！」

「うおおおおっ！？」

頭の中が強引にシェイクされる。

「ちよっ、ちよっと落ち着け！！」

「なによ嘘つき！！」

「ちげーよ！！ 俺の話を聞け！！」

舞の腕を振り払いながら、叫ぶ。

「何が違っつて言っのよ！！」

舞の反論に対して、後から考えてみるまでもなく明らかに人として残念すぎる一言を、俺は口にした。

「金が無いんだ！！」

「あ、なんかその……。すみません」

「……なにその低姿勢。アンタにそんな態度取られると鳥肌立つからやめてちょうだい」

「お、おう。じゃあ、いただきます」

「いただきます」

俺が箸を手にしたのを見届け、舞も自身の目の前に置かれた料理に手を付け始める。

結局。男としては甲斐性の欠片も無いと言われても甘んじて受け入れざるを得ない結果になった。何が言いたいかというと、つまり舞の奢り。金が無いと宣言した俺に対して、なにコイツ的な視線をした舞は、一言「じゃ、奢ってあげるわよ」と。流石に申し訳無いと思い辞退の旨を申し上げようとしたが、目で黙殺された。

ではせめて低コストな物をと、券売機にて素うどんを押そうとしたら、「あら、アンタうどん好きだっけ？　じゃあはい」とか言いながらにゅつと横から手を伸ばし、うどんの中でも最上位である「青藍うどん」なるものをチョイスされる。食堂の女の子（青藍魔法学園では、食堂で学内アルバイトを雇っているらしい）に出し、それと引き換えに渡されたうどんを見て驚愕した。上に乗っている具材のせいで、麺が見えない。肉やら天ぷらやらがところ狭しと敷き詰められており、エビの天ぷらなんか大きすぎて器から垂れ下がっている。お値段はなんと……。少なくとも、ワンコインでは買えない。

なんか、すげー申し訳ないことしたな。素うどんを選択するつもりが、まさか余計な出費を生ませてしまうとは。

「どうかした？」

箸を置き、首を傾げてくる。流石はお嬢様。マナーがきちんとなっている。その様は、とにかく可愛いもので、こいつの捻くれた性格させ知らなければ間違いない——いや。こんなこと言うのは暫く控えよう。少なくとも、今俺にそんな権利も立場も無い。……。完全に餌付けされている構図だな。

「いや、ありがとな。助かったわ」

ひとまず礼を言っておく。

「別に？ このくらい大した出費じゃないし」

本心でそう言っているのだろう。舞はそんなことかと興味を失ったようで、再び自分の箸に手を伸ばした。

けど、違うぞ。舞。確かにお前はお嬢様だから、このくらいの金額はどうってことないんだろうけさ。それでも、恩着せがましく言うことなく。ただ自然に人の為に動けるのは、貴重な優しさだ。捻くれてるって言っても、根はいい奴だからな。

「あ、これでアンタは私に借りを作ったことになるわね。さうて。どう返してもらいましょうか」

……ちよつと訂正していい？ やっぱコイツは恩着せがましく言う奴だったわ。

「じゃあ命令ね。これから学園での食事は、私に付き合いなさい」得意顔で、そう宣言してくる。その光景に、思わず笑みが漏れそうになった。やっぱり寂しかったってわけだ。そりゃそうだ。学園生活、孤独は寂しすぎる。友達を作らないんじゃない。友達が、作れないだけ。……やせ我慢なんてしやがって。いつもは人一倍我が儘なくせにさ。

「おっけー。そのくらいドンとこいだ」

快諾する。舞は嬉しそうな顔をして、また食事に戻った。

……さて、ここのアルバイトは男でも雇ってくれるのかな。多分、コイツはその気なんだろうが、毎日毎日奢ってもらうわけにもいかないからな。

遅めの夕食を終え、舞とは食堂で別れる。男子寮と女子寮は建物ごと分かれている為だ。食堂やロビーのフリーエリアは共用だが、女子の生活拠点である寮は連絡通路を挟んだ別棟にある。別れると

きにちらりと見たが、どうやらパスワード式の厳重な扉で仕切られているようだ。ま、お年頃の男子と女子だし当たり前だが。ということ、つまり――。

「……寮に戻ってしまえば、護衛の必要はなさそうだな」

あくまで自分の部屋を見た上での判断だが、この青藍魔法学園では学生寮の窓や壁にも厳重な魔法プロテクトを掛けている。鍵の閉め忘れでもない限り、建物の中は安全ということだ。

「ま、そういった身の回りの施錠は本人に任せるとして……」

腹も満ちて心地良い睡魔も漂ってきているが、生憎俺の本分はここからだ。

「見回りでも行ってみるかね。学内の地理も目で確認しておきたいしな」

学生寮のロビー、出入り口からの出入りは止めた方がいいだろう。門限が何時かも知らんし、入る時には学生証がいる。つまり、記録に残るということだ。転校生は、夜な夜な学園内を徘徊しているなんて目を付けられたくないし。

そう考えた俺は、ロビー近くの共用トイレに入り人目が無いことを十分に確認したうえで、転移魔法を発動した。

夏的大型連休、日本で言うところの夏休みなるものは既に過ぎており、青藍魔法学園が2学期に突入して少しした頃の転入扱いとなった俺。まだまだ残暑が残り、夜とはいえ歩き回れば汗ばむくらいの生温かい風を浴びながら先ほど舞と歩いた並木道を逆向きに歩く。……」

聞こえるのは虫の鳴き声と互いを擦り合う草木の音のみ。活気を失った学校の寂しさを感じる。

当たり前と言えばその通りだが。夜とて昼間と変わりなく、校舎を包む魔法プロテクトは発動し続けていた。これなら、建物の中ま

では見回る必要は無いな。

「おっと、ここは校舎や寮に掛けられている奴よりも数段上だな」
守衛室に見つからないよう木陰に隠れて正門の様子を伺う。そこには想像以上の障壁が展開されていた。守衛とは名ばかりだな。この障壁があれば、大概のものは防げるだろう。逆にこれが壊されるほどの第魔法を使われれば、中にいる人間が気付く。

おそらく守衛の主な仕事は、学園の守護というよりも、学園内に入ろうとする人物の見定めにあるのだろう。昨日、俺がここに入ろうとした時のようにな。

「ここも問題なしつと」

ぼそりと独り言の様にそう呟いて、俺は次の目的地へと向かった。

「ここは何から何まで全部でかいな……」

校舎の左サイドより伸びる道を進み、運動系の施設が立ち並ぶエリアへと入る。まず目に入るのは部室棟。当然のようにここにも魔法のプロテクトが作動していた。

「部活動にこんなでかい建物を用意するとは……。いったいいくつ部活があるんだか。って、なるほど」

入り口に近寄ったところで、でかさの理由を1つ知った。入り口横には、各部活動の部室の分布図が貼ってある。どうやら、運動系の施設のみかと思っていたら、文化部の部室もこの建物の中に集約されているらしい。部活を一纏めにした建物ってわけだ。

「ま、それにしたってでかすぎるがな」

ここへの入り口も寮と同じく学生証を通すタイプらしい。それだけ確認して、グラウンドの方へと足を向けた。

「……広い」

体育でマラソンとか言われたら面倒臭そうだ、なんてくだらないことを考えながらグラウンドを横切る。グラウンドの先には、体育

館が立っていた。

「ここもセキリユティは完璧だな。舞が言うとおり、本当に俺は必要ないかもしれん」

もはや、完全に外から隔離された空間といっても過言ではないだろう。仮に侵入されたとしても、近くの建物に籠城すればそれなりの時間は稼げるはずだ。

「さて……。回ってないのはあと一か所か」

歩いて行ってもいいが、遠いし面倒臭いな。転移魔法を使うか。

俺の転移魔法にはいくつかの制限があり、その1つに『自分が行ったことのある場所でない』と転移できない』というものがある。俺の転移魔法は、呪文詠唱という本来の魔法構築とは異なるシステムから発動されており、つまりところ俺は呪文詠唱の代わりに『自分が跳びたいところをイメージする』事で座標を固定する。

イメージが鮮明であればあるほど魔法展開はスムーズに行われ、意図した場所に限りなく近い場所へと跳べるってわけ。だからこそ、自分の見える範囲に跳ぶには、座標がイメージしやすいからそれこそ一瞬で跳べるし、本来の俺の近接戦闘術の要はそこにある。

逆に離れている場所やうる覚えの場所なんかは、イメージにも時間が掛かるし、跳んだ際の誤差も起こりやすい。また、転移する場所が離れているほど使用する魔力も大きい。

そもそも転移魔法とは、Aという地点にいる自分を“無かった”こととし、Bという地点に“元からいた”という事実を書き換える魔法である。だからパツと見AからBへと一瞬で移動したように見えるわけだ。これが“瞬間移動”とも言われる所以なわけだが。

しかし、現実問題の話。ここからは2つめの制約に関わってくる事だが、質量保存の法則やら慣性の法則やらで縛られている事象を改変するという事は、そういった当たり前の法則を根本から捻じ

曲げないといけないわけで。例えば数c m移動するだけなら、神様も「あれ、そういやそこにいたんだっけ？」みたいなノリで多少は誤魔化してくれるものの、数k m単位になると、流石に転移魔法への抑止力が強くなってくる。それに抗う為には相応の魔力が必要となり、だからこそ国単位で転移魔法を使おうものなら頭がイカれるくらい魔力を消費するかもしれないし、突然そんな魔力がごっそりと体内から放出されれば、座標のイメージなんざ安定して展開することもできず、座標が狂ってどこかの海へと放り出されちまうってわけ。ま、実際にやったことないから分かんないけどさ。魔法球をできるだけ遠くへ放るためには、より大きな魔力が必要にあるのと同じ理屈だと考えてくれればいい。あ、あと神様つてのはあくまで例えね。実際にいるかなんて会ってみないと分からないわけだしさ。

そんな訳で、教会という行ったことのない場所に転移する事が出来ない俺は、一度校舎の草陰へと転移した。周りに人がいないことを確認し、がさがさと道へ出てくる。

「最後は校舎の向こう側だな」

ここからはのんびり歩いて行くことにしよう。そう考え、校舎裏から延びる緩やかな階段を、ゆっくりと上り始めた。

円状で真つ白な踊り場に辿り着く。ここにも正門付近にあったものよりは二回りほど小さいが、噴水が設置されていた。こちらの噴水は、裸の女性が何やら壺のようなものを抱え、そこから水が流れているものだ。明らかに、何かの宗教関連のものであるう。

「……ここまできると、学園の敷地内だという事を忘れてしまいうだ」

神秘的な空間とでも言えいいのか。別に信者ではないが、何となく心が清められているような感じがする。

「建物までは、もう少し」

噴水を迂回し、再び階段へと足をかける。ただ、先ほどの距離はない。少なくとも踊り場から教会は見えるレベルの距離だ。程なく上り終え、教会を前にして気付く。

「？ おや。まだ先があるのか……」

教会の横には、さらに上へと続く階段があつた。しかし、ここまで登ってきた階段とは違い、白いブロックによって綺麗に舗装されたものではない。どちらかと言えば、山登りとかそういった類のハイキングコースとかにありそうな雰囲気だ。

「……確か手渡された校内マップには表記されていなかったと思うが」

首を捻つてみても答えは出ない。生憎と、マップは寮にある自室の中だ。

「ま、考えてもしょうがないか。後で行つてみるとしよう」

ひとまず、こつちだ。というわけで、目の前の教会へと近づく。

「扉もすげー立派だな」

何というか、威厳がある。目の前に立つてみて、気付いた。ここには学生証を通す場所がない。来る者は拒まずってことか……？ 何となくだが、そんな気がした。そして、これも何となく、だが。

今まで回ってきた中では一度もしなかったが、この扉にだけは自然と手が伸びた。

「学生証がいららないなら、記録に残ることも無いしな」

その何となくという気持ちに、誰に言っているのか分からないような言い訳まがいを口にして、扉に手をかける。

「どうせ、鍵は閉まっているはず……」

そう言いながら、押してみる。

ご、ごん……

厳格な音を立てながら、その扉は俺の予想に反してすんなりと開いた。

「何だ、一晩中開放してるのか……？」

開いたことに驚きながら、中に入ることにした。開いているということは、入っても構わないということであろう。そう勝手に結論付けた俺は、堂々と中へと足を踏み入れた。

「おお……」

テレビや映画でこういった建物は何度も見たことがある。それほどほぼ内装は変わらない。しかし、その映像からは感じ得ないであろう神聖な空気を、肌で感じた。出入り口から一直線に伸びる通路。左右には、おそらく信者の人たちが使うであろう木製の椅子が並んでいる。天蓋にはガラスで彩られた絵が覆っており、月明かりを教会内へともたらししていた。一直線に伸びる通路の先には、祭壇があり。そこには――。

「……」

直接の面識は一度もないが、おそらく間違いないだろう。

――姫百合可憐の妹。姫百合咲夜がそこにいた。

第7話 姫百合咲夜（前書き）

第7話まで来て、まだ転校初日。
そして、やっと咲夜の登場です。

第7話 姫百合咲夜

神聖な空間。幻想的な雰囲気を携えて。彼女はそこにいた。手を胸の前で組み、祈りを捧げているのだろう。後姿からしか見ていないので、想像しかできないが。扉を開けた時、それなりの音がしたと思ったんだけどな……。姫百合咲夜であろう彼女は、一向にこちらに気付く素振りを見せず、黙々と祈りを捧げている。

……それにしても、まいったな。ここまで見回ってきた感想としてはよく分かった。何か邪な思いを抱いて侵入しようにも、容易にはいかないだろう。だが、やはり護衛する立場としては、護衛対象者には校内とはいえ外を1人で出歩いて欲しくは無い。それもこんな夜更けに、だ。校外でこんなことしたら、間違いなく誘拐されてるな。恰好の的だ。ただでさえお嬢様という身分に加え、姉といいいこの妹といい綺麗な顔立ちをしているのだから。

「どうしたもんかね」

祈り自体を否定する気はない。俺自身宗教に思い入れはないが、他人の信仰を邪魔する気も無い（咲夜が信仰者なのかまだはつきりとはしていないわけだが）。

見つからぬよう出ていこうかと思ったが、止めた。最低でも、どのくらいの頻度で寮を抜け出しているかは聞き出しておく必要がある。場合によっては、それも含めた上での見回りスケジュールを組んでいた方がいい。転移魔法を使えば、この敷地程度ならどんな場所でも即駆けつけられるが、残念ながら俺に千里眼のような離れた場所を透視する能力はない。従って、移動手段があったとしても感知能力がなければ意味を成さない。

理想は、ある程度親密になり危機的状況に陥ったら迷わず助けを求めてくれる立場になることだが、それは難しいだろうな。なにせ泰造氏の話では護衛を付けたがらないとのことだ。「俺はお前の護

衛だから、何かあったら直ぐ言ってくれ」とでも言えれば楽なんだが、それでは本末転倒となる。間違ってもヘソを曲げられるのはまずい。護衛だつてのがバテて任務未達成のままこの学園を追い出されようものなら、泰造氏に社会的に抹消されあの女に物理的に抹殺されるだろう。

そんなところまで考えが至り、無意識のうちにぶるりと体を震わせたところで、ようやくお目当ての人物は祭壇の手前から立ち上がった。そのままUターン。つまり俺が座っている最後部の椅子がある、出入り口へと向かつて歩き出した。とぼとぼと。

……あまり元気が無さそうだな。月明かりでのみ光を得ているこの空間で、相手の表情を見分けるのは難しいが、少なくともポジティブな顔には見えない。顔を俯かせ、何か思いつめたような雰囲気を携えながら歩いてくる姿を見ると、あまり良い状態とは言え無さそうだった。まあ、こんな時間に祈りに来てるんだから、気持ちが高っぴーなわけは無いか？ 毎日の恒例の祈りとかなら話は別だろうけど。

姫百合咲夜は、俺にまったく気付く素振りも見せずにこちらへと向かって来る。このまま何もしなければ、それこそ俺なんて一瞥もせずに出て行きそうだった。……陰ながら見守るつてのが多分正しいんだろうが、折角待ったんだ。アクション掛けてみるか。

「こんばんは。随分と熱心に祈りを捧げていたようだね」

「……？ ひっ！？」

話しかけられるとは思っていなかったのだろう。俺の声には直ぐに反応したが、それを認識するのには多少の時間を要したようだ。焦点の合わせ目線で俺を捉え、1秒ほど固まった後、驚いたように小さな悲鳴を上げた。

「すまん、驚かせるつもりじゃなかったんだが」

「っ！か「ひっ！？」って……。やっぱり俺の目つきそんな悪いかな。ちよっとショック。というわけで、少し優しめの声で話しかけてやる。」

「あ、え……えと。こ、こんばんは？」

それで平静を取り戻せたのか、律儀にも挨拶をしてくる。

「ああ、こんばんはだな。夜もかなり更けているが……、こんな時間まで随分と熱心なんだな？」

「え？ あ、いえ……そういうわけではないのですが」

俺の言葉に、控えめに首を振ってくる。どうやら、信仰者というわけではなさそうだ。

「あ……。もしかして結構お待ちになりましたか？ も、申し訳ございません。直ぐに出て行きますのでっ」

突然あわわしたと思ったら、こんな事を言ってきた。ああ、傍から見りゃ順番待ちしてたようにも見えるわけか。

「いや、必要ないよ」

とりあえず、そういった目的でここに来たわけではないということ伝えておく。その言葉に、姫百合咲夜の焦った表情が消えた。

「そうなんですか？ 良かったです。私、結構ここにいてしまったみたいなので」

文字通り、ほっと胸を撫で下ろしている。

「それでは、こちらへはどうして？」

首を傾げながら問ってくる。その疑問は当然か。

「今日、2年に新しく転校生が入ってきたの知ってる？」

「？ ええ、存じておりますが」

やはり、噂の転校生は只者ではない。学年が違えど、話題性は変わらなかった。

「それ、俺なんだ。で、今日はバタバタしてて学園うまく回れなくてさ。それで今いろいろと見て回ってたわけ」

「ああ、貴方があの……。お姉さまが話しておりました。お席が隣になった、と」

「情報が早いな」

「はい。お昼休みには、もう知ってましたから」

少し得意げにそう言う。確かに姫百合可憐から直接与えられる情

報なら、誰よりも早いだろう。

「お姉さまがご迷惑をお掛けしていませんか？」

「まさか、掛けたのは俺の方だ。なにせ1限目の授業から遅刻、教科書も開かずぼんやりしてたところで教師に目を付けられてな。君の姉さんがいなければ、初日から廊下に立たされるところだったくらいだ」

「うふふ……。それは聞いてませんでした」

口を手で隠しながら笑う。仕草が完璧にお嬢様のそれだった。

「面白い方ですね。あ、えと……」

「聖夜だ。中条聖夜」

おそらく、名前を聞こうとしたのであろうことは、雰囲気で分かった。あまり自分から聞ける性格では無さそうだったので、自発的に答えておく。

「中条様ですね」

「様は止めてくれ。流石に恥ずかしい」

「では……中条せんぱいで」

「ああ、そうしてくれ」

で？ と顔で促しておく。

「あ……。え、えと……」

あれ？ 別に難しい返しをしたつもりはなかったんだが。こちらが名乗ったのだから、直ぐに向こうも返してくると思ったのに。なぜか悲しそうな顔をして、目を逸らしてしまった。

「あの……」

「ん」

何が頭を巡っているかは分からないが、ひとまず待つことにする。

「……私、その……。姫百合咲夜って言います」

知ってるけどね。

「姫百合、咲夜……。ね。いい名前じゃないか」

そう言っていると、目の前の少女は驚いたという顔をして俺を見つめてきた。……。あれ？ 無難な返しをしたはずなんだけど。地雷

だったか？

「け、敬語で……しゃべらないのですね」

「……ん？ だって、君俺より年下だろ？」

何だ、敬語を使えっという遠回しな命令か？

「話して欲しいってんならそうするけど」

「あー！ いえ、しなくて結構ですっ！」

「うおっ！？」

急に前のめりに叫ばれ、びっくりして後ずさる。

「あ！？ その、ご、ごめんなさいっ」

我に返ったのか、姫百合咲夜は顔を真っ赤にさせながら一歩引いた。何とも言えぬ微妙な空気が、俺たちを包む。

「あー、えー。じゃ、じゃあとりあえずこの喋り方でいいんだな？」

「は、はい……。お願いします」

顔を真っ赤にさせたまま、かくかくと頷いた。

「えーと」

さて、じゃあこの子のことは何て呼べばいいんだ？ 首を傾げようとしたところで、姫百合咲夜はその空気を察したのかおずおずと進言してきた。

「あの……苗字ではお姉さまと被ってしまいますし……。その、咲夜、と」

「いいのか？」

「はい」

「じゃ、咲夜で」

「は、はいっ。よろしくお願いしますっ！」

咲夜は嬉しそうにがばつと頭を下げた。

取り敢えず、夜も更けているし1人で帰るのは危ない等という言い訳をし、咲夜と一緒に教会を出た。……何となくナンパの決まり

文句のような気もしたが、仕方が無い。咲夜自身が嬉しそうに承諾したので良しとする。

噴水の近くまで来た辺りで、一度振り返る。そこには教会の横から延びる、廃れた階段があった。先ほど、後から行こうと保留にしていた場所だ。まあ、それより大事な要件ができたし、あの先はまた今度でいいか。

「どうかされたんですか？」

横からひよっこり顔を出し、咲夜が俺の見ていた方へと目を向ける。

「ん？ いや、あの階段の先には何があるんだろうなって」

別に隠す事でもないので素直にそう告げる。寧ろ、咲夜が知っていることを期待した返しだった。

「ああ、あの先には生徒会館があるそうですよ」

……ちゃんと答えてくれたのにも関わらず。いくつか聞きたいことができた。

「生徒会“館”？ “室”じゃなくて？」

「はい。この学園の生徒会は、校内の一室に構えているのではなく、一軒分まるまる使っているそうなので」

「すげー集団だな」

……主に金銭面で。

「はい、私なんか戦ったらたぶん直ぐにやられちゃうと思います」
「……ほう」

館を丸ごと牛耳る生徒会っていうから、ただの金持ちの集まりかと想像したんだが、勘違いだったようだ。まあ、咲夜のこの性格からすると相手を立てまくってるという線も捨てきれないが。

「で？ その“あるそうです”ってのはどういうことだ？ 行ったことないのか」

「はい。その館を拝見したことはありません」

「何で？ あの廃れたハイキングコースみたいな階段に、人除けの結界でも張られてんのか？」

「ぷっ……ふふふ。す、すみません」

思わず漏らした笑い声を抑えながら、咲夜が謝ってくる。別にウケを狙ったつもりはなかったんだが。気にするなと手振りで伝え、先を促す。

「張られてはないと思います。ただ行ったことがないだけで」

まあ。山頂にある館なんぞ、何か用事でもなければ足も向かないか。

「何と言いますか……近寄りがたいじゃないですか」

あ、そっちね。

「生徒会の方々は皆、独特の雰囲気を纏われておりますし。私なんかが話せるはずもなくて……」

「その独特な雰囲気ってのは分かんが、咲夜もお姉さんも魔法すげーんだろ？ 勧誘とかなかったのか？」

「まさか」

咲夜はぶんぶんと首を振る。

「……私たち姉妹にこうやって話しかけてくれる方なんて、いませんでしたから」

「は？」

「い、いいえ！ 何でもありません！！ さあ、行きましょう！！」

話はこれで終わりとはかりに、咲夜が俺の手を引いて歩き出す。

……話しかけてくる奴がいなくて。その言葉で、姫百合可憐の昼休みの行動を思い出す。そりゃ、あんな感じで壁作ってちゃ、誰も話しかけられないだろうよ。

結局。そのまま会話することなく寮へと戻って来てしまった。それも、随分と早歩きで。

「平気か？」

「は、はい……。はー……はー」

そう答えつつも、咲夜は肩で息をしている。俺の足が速くて、ついてくるのが大変だったからこうなったわけではない。咲夜が俺を先導し、ひたすらに早歩きをし続けたからだ。

「だ、大丈夫……です」

ふーっと息を吐き、俺に向き直る。

「す、すみません。いきなり掴んで……歩き出したりして」

「いや、もともとここへ帰ってくる予定だったんだし、俺は構わないんだが」

「そ、そうですか……それならって……あっ!!」

「何だ？ その嫌な感じの“あ”ってのは」

「い、いえ……その……」

咲夜がちらりと寮の正面玄関の方へと目を向ける。……別に誰もいないじゃねえか……って。ああ、そういうことか。時計を見てみる。既に23時を回っていた。寮の門限時間は知らないが、間違いなく過ぎているであろうことだけは断言できる。

まあ、俺は転移魔法があれば直ぐ中へ入れるし、咲夜さえとつとと自室に帰ってくれりゃ発動できるんだが。

「あ、あの……じ、実は」

「女子限定の抜け道でもあんのか？」

「え？ あ、いえ、そうではなく」

俺の予想外の返しに、一瞬呆氣にとられたようだが、直ぐに持ち直す。

「わ、私……。こういうことよくあつて……。門限前に寮は出るんですけど、門限までに戻って来ないことが。ええと……だから、そのつまりですね」

……皆まで言わずとも分かってしまった。

「よく、寮監督の方には怒られて……。け、けどっ!!」

ずいっと身を乗り出して声を上げる。

「中条せんぱいは平気だと思いますっ!! ま、まだ来たばかりで、門限なんて知らなかったですよねっ!？」

「……まあ、聞かされてはなかったけど」
予想はしてたけどな。

「じゃあ、平気です！ わ、私が事情を説明しますからっ！」「
それだけ告げて、勇み足で寮の入り口へと突き進む。……って。
「待て待て待て」

早々に謝りに行こうとする咲夜の腕を掴んで止める。

「きゃっ」

「あ、すまん」

咲夜のその声に、条件反射のように口から謝罪が出る。あまり強く掴んだつもりはなかったんが。

「いえ、平気です。それで、何でしょうか？」

早く行かないと、どんどん時間過ぎちゃいますよ？ という顔を
して、咲夜が首を傾げてくる。

「謝りに行く必要は、ない」

そう言って、俺は携帯電話を取り出した。

お目当ての人物に連絡を取り、移動を開始する。確か俺の隣の部屋
って言ってたな。だとしたらこの辺りか。外からだど、建物内部
の位置取りが分かりづらいな。しかも夜で見えづらいし。

「中条せんぱい？」

急に進路を変えられ、戸惑いながらも咲夜はちゃんとついてくる。
なるほど。泰三氏が不安がるのも無理はないな。こんな純粋な子、
1人にしてちゃダメだろ。今だって真っ暗な中、今日初めて出会っ
た男に従い、人目につきづらい場所まで来てるんだぞ。俺がその気
なら、ここで咲夜はアウトってことだ。

「……確かこの辺りだと思っただが」

その呟きを見計らったかのようなタイミングで、頭上の扉の1つ
が開いた。ビング。

「咲夜」

ちよいちよいつと手招きする。頭に「？」マークを浮かべながら
も、咲夜はててつと近づいてきた。

「声出すなよ」

「え？」

あ、このやりとりは犯罪っぽかったわ。そんなアホな事を考えつ
つ、俺は咲夜を抱き寄せて身体強化魔法を発動させた。魔力を纏つ
た足で、地面を蹴り上げる。

「っ！？ わわわわっ！？」

咲夜の驚きの声を耳にしながら宙へと舞い上がり、4階のベラン
ダの柵に足を掛けた。ゆっくりと咲夜の体から離れる。

「到着つと。咲夜、平気か？」

「ぼー……」

「咲夜？」

ひらひらと手を振ってみる。

「は、はい！？ 平気ですっ！！」

過剰な反応を示した。逆に不安に駆られるが、取り敢えずは反応
が返ってきただけよしとする。俺はその場で靴を脱ぎ、窓に手を掛
けて部屋の中へと入った。

「悪いな、こんな真夜中に」

この部屋の主に声をかける。そこには、訳が分からないという顔
をしたイケメン・修平が、携帯電話を片手に持ったままで固まっ
ていた。

「……何してんの？ お前」

その疑問は、もっともだと思う。

「って、何おもむろに携帯電話のボタンをプッシュしようとしてる
わけ？」

「いや、警察に通報しようかと」

「待て待て待て待て……」

まだ魔力が足に残っているのを確認して、瞬時に修平の元へと移

動する。携帯電話を取り上げた。

「……やっぱやるな。お前」

「あん？」

「花園の御嬢さんとの試合でもそうだが、身体強化魔法に関しちゃ、既にこの学園でトップクラスだよ」

「……ああ」

そういう事ね。そういや魔法模擬実践で気絶したせいで、あの試合に対するクラスメイトのリアクション、まだ知らなかったわ。

「で。通報して欲しくなきゃ、説明してくれるんだろっな？」

「何をだ？」

俺の返しが面白かったのか、修平は苦笑を漏らしながら窓の方へと目を向けた。

「真夜中・男と女・2人つきり。スリーアウトだな」
げ。

「しかも女の方は頬を赤らめるときた。フォーアウトじゃないか？」

「それってツーアウトの状態でゲッツー喰らった時のような感じか？」

「誤魔化すなよ。やるじゃないか。転校生活初日から逢引きなんぞ、普通できない」

「してねえよ!!」

「ははは。姫百合の妹さんの方だな。入って来なよ。いつまでもそこにいるわけにはいかないだろう」

「……あ。はい」

修平からの声掛けに頷き、咲夜も靴を脱いで上がってくる。

「ま、詳しい事は聞かんさ。うっかり口が滑って、将人やとおるに話しちまうかもしれないが、それだけだ」

「十分アウトだよ、それ!!」

フォーでもファイブでも無いゲームセットだろ!! ライフエンドだよ!!

「いーから、とつとと出てけ。あまり叫ぶと近所迷惑だし、姫百合の妹さんだつて早く女子棟に帰らなきゃヤバいんじゃないか？」

「そ、そうだな。行こう、咲夜」

「え？ あ、はい」

修平の部屋を横切り、玄関の扉へと手を伸ばす。

「ありがとな、助かったよ。修平」

あのままじゃ、素直に怒られるか転移魔法しか方法無かったからな。

「気にすんな。ま、明日の昼飯でも期待してるさ」

つまり奢れってことね。……俺、言葉通りの無一文だけどな。

周囲の気配に気を配りながら、男子棟を歩き下へ下へ。慎重に歩を進めるとはいえ、たいした距離ではない。ものの数分で共用のロビーへと到着した。

「ここまでくれば、もう平気だろ」

「……はい」

ちらりと咲夜の方を見してみる。まだ顔は赤いままだ。それにさっきから反応が悪い。

「平気か？」

頭とか打つては無いはずだが。

「あ、へ、平気です」

「そうか」

ま、一晚寝れば治るだろ。風邪とかでもなさそうだしな。

「んじやな」

ここまで来れば、もう問題はないだろう。そう思い、咲夜に背を向けて歩き出す。

「あ、あのっ！！」

「ん？」

呼び止められ、足を止める。見れば、咲夜は俯いたまま手をモジモジとさせていた。何度か口を開くが、直ぐに閉じる。……何だ、そんな言いづらいことなのか？ 俺が訝しげな視線で見つめているのを感じたのだろう。咲夜は口を一度閉じると、目をぎゅっと瞑りこつ言った。

「また、会えますか？」

その問いに、思わず苦笑する。

「俺たちはここでどんな別れ方をするんだ？ 同じ学園のただの1年とただの2年だ。学園生活を送ってれば、またどこかで会うだろうよ」

当たり前のように答えた俺の言葉に、咲夜がにっこりと笑う。

「はいっ！ 中条せんぱい、それではまた！！」

そう言つて、女子棟の扉の向こうへと吸い込まれていく。

「……中条せんぱい、ね」

もう見えなくなった後姿を未だ目で追いながら、そつと呟く。：

あの時はあまり感じなかったが、思いの外恥ずかしいな。後輩の女の子に「せんぱい」って言われるのは。

「あほか」

そんな下らない事考えるのは止めて、とつとと部屋に戻り風呂に入り寝るに限る。

「ふああ」

思わず出た欠伸をかみ殺す。あとは寝るだけ。

そう思っていたのだが、まだもう1つ。イベントが残っていた。

「……あの女はいつたいどういふつもりなんだ？」

部屋の鍵をかけ、ベッドに腰掛けながら手元にある物を凝視する。それは、紛れもなくただの茶封筒だった。

部屋の扉にはポストが付いており、学園の生徒宛てに届けられた品物は、学園の関係者がわざわざ生徒の部屋の扉まで持ってきてくれるようだ。そして帰宅するや否や、ポストからはみ出ていた茶色い物体。引き抜いて見れば、どこかで見たことのある茶封筒だったってわけだ。

「また何やら固いモノが入っているが……」
ひっくり返してそれを掌に落とす。

「……」

500円。それ以外には何もない。

「まさか……」

何となく、あの女の意図が読めてきた気がする。徐々にもやもやが晴れていく。それと同時に湧き起こる、どす黒い衝動。

「……いや、俺の勘違いかもしれん。取り敢えず、明日どう出るかを待とう」

結論を出すのは、それからでもいい。ひとまず、今日はいろいろあつて疲れたよ。

「お休み」

電気を切って、ベッドへとダイブする。程なく、意識も途絶えた。

第8話 運命的な出会い

真っ白な世界の片隅で、違和感。何かが振動する物音。それに意識を惹かれ、ゆっくりと世界が薄れていく感覚。同時に、徐々に感覚を取り戻し始める五感。まどろみの中、音の正体が頭に過ぎる。ああ、そうか。重たい腕を動かす。直ぐにお目当ての物は見つかった。

「もう朝か」

そう呟きながら、俺は携帯電話のアラーム機能をOFFにした。

「すげーじゃねーか、聖夜！！」

朝。昨日は初っ端から約束を破棄されたにも関わらず、将人・とおる・修平の3人は律儀に寮の共用スペースで待っていてくれた。それに気付き、近づいたところで開口一番将人がそのたまう。内心冷や汗をかきつつも、修平を無言で睨んでみる。すると、修平は肩を上げて首を傾げるという反応を示して見せた。どうやら、昨晚の事とは別件らしい。

「お前、詠唱使えなくても十分魔法使えばぶっ！？」

「あ、すまん」

咲夜との話じゃないって分かってほつとしたらつい。暴力はイケナイな、うん。

「それでも、驚いたのは確かだよ。直ぐにやられちゃったのは事実でも、最初の格闘術は凄かった」

「ああ、それに花園の御嬢さんが近接術を使えるという事にも驚いたな」

「？ いつもはどんなスタイルなんだ？」

とおると修平の称賛を受けつつ、気になったことを口にしてみる。

「ぬいぐるみだよ」

ああ、やつぱり？ とおるの答えに、俺は納得した。

「非属性無系統魔法。花園の御嬢さんは、特異な能力を保有しているようだからな」

修平が、ちらりとこちらの反応を窺う。

「むしろ。その点についていえば、お前の方が詳しいんじゃないのか？」

「さあてね」

非属性無系統魔法。

魔法には属性を付与できるという話は以前にしたことがあると思う。属性付与とされない魔法は総称して無属性魔法というわけだが、その無属性魔法についても、2つの種類がある。「無属性」と「非属性」だ。属性が付与されていないという点では同じだが、その言葉の意味はまったく異なる。

「無属性」とは、前述の通り属性付与を行わないただの魔法。というよりも魔力の塊と言った方が正しいのか？ とにかく、初心者が作り出す魔法球や、物体を浮かせたりするときに用いる魔法属性だ。

対して、「非属性」。これは、どの属性にも当てはまらないが故に無属性にカテゴライズされるものの、通常には成し得ない現象を起こすことができる魔法の総称だ（魔法自体が通常には成し得ない現象を起こすものではあるが、ここで言うものは更に特別なもの）。どれだけ無属性魔法を極めようが、どんな属性を付与しようが、通常では成し得ない特殊な魔法。別名、というよりもこっちが正式名称だが、非属性無系統魔法ともいう。

そして、非属性無系統の魔法は鍛えてできるようになるものではない。魔力が先天的に宿るものであるように、この非属性も先天的な才能に左右される。最初からその境地に立っている者でなければ、それは扱えない。舞のものもそうだし、俺の“転移魔法”もこちら

に属している。

誰も扱うことのできない、選ばれし者だけの領域。そう言えば、かなり格好よく聞こえるな。属性付与を行い、限りなく近い現象を発現できる魔法使いも当然いる。が、まったく同じ効力を及ぼすことは不可能。例えば、移動系の魔法に優れる風属性の身体強化を纏い、限りなく速く移動したとしても、それはあくまで速度が速いというだけで、根本的な事象から書き換え最初からそこに居たことにする転移魔法には到底成り得ない。唯一にして絶対の魔法。こと同じ効力を及ぼすためには、同じ非属性無系統魔法を持ちうる人間でなければならぬ。同じ無属性非系統を持つ人間なんて、そうはいないけどな。そもそもこの領域にいる魔法使いすら、世界見渡してみてもほんの一握りだ。

「で？　で？　花園舞さんの無系統はどんな名前でどんな能力なんだ？」

「そういう事は本人に聞け。他人がペラペラ喋っていいモンじゃないよ。この件に関して、俺はあいつが非属性無系統を持っているか否かも話すつもりはない」

「くあーっ。やっぱそうだよなあー」

俺の返しを半ば予想していたのか、将人は悔しそうな声は漏らすもののそれ以上追及はしてこない。とおるも修平も、やっぱりねという顔をしただけだった。

「つか、ぬいぐるみ見たんだろ。じゃあ、どんな能力かくらいは分かるはずだ。」

「おっ！！　勇者様のご登校だ！！」
「は？」

教室に入るなり、わらわらとクライスメイトたちに囲まれる。

「勇者ってなんだ？」

遅れて教室に入ってきた3人に尋ねる。

「皆の話を聞けば分かるんじゃないか？ 勇者様」

欠伸をしながらぼんと俺の肩を叩き、自分の席へと移動する修平。

「さて、僕も巻き込まれない内に非難するとするよ」

爽やかな笑みを浮かべつつ、全てを丸投げするとおる。

「ははっ。頑張れよ」

アホな顔してアホな事を言いながら、スルーを決め込む将人。

「ちよつと、これいったい——」

「身体強化魔法を使いこなせるなんて凄じじゃないか——！」

「花園さんの魔法を受けきるなんてすごーい——！」

「あんな高レベルの近接戦を、同じ年が演じられるなんて思わなかったよ——！」

「直ぐにやられちゃったのは残念だったけど、でも格好良かったよ——！」

「うおおっ——？」

クラスメイト達の熱い視線にやられて仰け反る。昨日の試合は、俺への魔法評価を予想以上に跳ね上げさせていたらしい。数々の称賛を受けていた中、スルーできないものが混じった。

「流石は花園舞さんに認められる男だけはあるね」

「へ？」

思わず間の抜けた声を出す。

「あの花園さんにあれだけの啖呵を切らせるなんて、中条君って只者じゃないよね」

「ちよつと待つて。ど、どういう意味だ？」

認められる？ あれだけの啖呵？ 嫌な予感に駆られながらも、おそるおそる問うてみる。

「いや。君が保健室に運ばれた後、皆で君の魔法力について話したら、花園さんが言ったんだ」

「……何て？」

「『私の認めた聖夜は、あんなもんじゃない』ってね」

ま、舞いいいっ！？ がばつと舞の席へと振り返る。昨日の質問責めの時と同じく、舞は我関せずを貫いており、こちらに向けているのは背中のみで振り返るうともしていない。昨日と違うのはただ一点。うなじが、髪の色と同じくらい赤くなっていた。

「舞っ！！」

舞の元へと駆け寄り、強引に腕を取って立ち上がらせる。

「なっ、何よ急につて、聖夜？」

「とぼけんのはやめろ！！ いいからこい！！」

「え？ だつてもう直ぐ授業つて、聖夜あああ！？」

昨日とは完全に逆の図式で。舞を教室の外へと連れ出した。……

行先は。屋上でいいか。

「……それで？ 急に何の用よ。屋上まで呼び出して」

重い鉄の扉を後ろ手に閉じたところで。舞が口を開いた。

「あのなあ」

それにため息交じりで答える。

「俺があまりこの学園で目立ちたくないって事は教えたろ？」

「それは保健室で聞いた話でしょ。あの時はまだ知らなかったんだもん」

あ、そうか。そっぴやクラスメイトたちは、俺が保健室に運ばれた後つて言つてたな。つまり、俺と舞が保健室で会話する前だつたつてわけか。そりや確かにどうしようもないわ。舞はこのことを知らなかったんだからな。

「そつか。あー、すまん。俺が悪かった」

「うっん、私も悪かったわ。ごめんなさい」

舞が、頭を下げる。

「私としては、アンタが姫百合可憐の護衛だつて聞いて、敵対する

相手への抑止力として雇われたのかと思ってたから……」

なるほど。だから逆に力を誇示させなければと思ったってわけか。

「……それに、私情も混じっちゃってたし」

たははと頭に手を当てながら、舞が恥ずかしそうに笑う。確かに、めちゃくちゃ込めてはいたな。…俺の為だったけどさ。

「アンタがどういいうスタイルで姫百合可憐を護衛していくかについては理解したわ。ここまでしちゃっというてなんだけど、私も協力する」

「……なんか、悪いな」

「いいえ？ 私が好きでする事だから。聖夜の足、引っ張りたくないしね」

どの口が言うんだ？ 強いくせに。

「アンタ一人で危ない橋渡らせるわけにはいかないでしょ」

「あん？」

その言葉に、引っ掛かりを覚えた。

「気付かないとでも思ったわけ？」

舞の眼光が、俺をギロリと睨んでくる。

「アンタが抑止力として機能しない以上、本当に敵が存在するならば、姫百合可憐をノーマークだと思い込んで襲ってくるわ。いえ、“襲わせようとしている”。アンタの目的は、姫百合可憐の護衛じゃない。……ううん、この表現は少し違うわね。それもあるんでしょうけど、本当の目的は別にあるって感じかしら」

「……本当の目的ってのは？」

表情が固いものになっているであろうことを自覚しながら、舞に先を促した。

「襲ってくる敵の殲滅、でしょ？」

たぶん、ポーカーフェイスは崩れた。俺の視線の揺らぎに、舞が反応したのが分かった。端整な眉を、ぴくりと吊り上げる。

「リナリーがアンタをわざわざこっちに送り込んできての仕事だっていうから、護衛なんて嘘だとは思ってたけど……。随分物騒な仕

事引き受けてきたじゃない」

「……お前、探偵になるといいよ」

「誤魔化さないで」

俺の渾身の軽口は、ぴしゃりと遮断された。……渾身の軽口って、

矛盾してるな。

「相手は誰？」

「分からん」

「聖夜」

「本当に分からないんだ」

舞のこれ以上隠し事は無しよという視線を、首を横に振ることで応える。

「そもそも、頼まれたのは本当に護衛だ。ただ、あの女から貰ったメールから、俺がそのように判断しただけ。確かにお前が言うとおりの、あの女は今回の件について、相手を殲滅したがつてる。それは間違いないだろう」

『見事完遂なさい』『一匹たりとも逃がしちゃダメ』『必要とあればやってよし』。

そもそも護衛任務の仕事に終わりはない。護衛とは対象者を守るための仕事であり、その仕事が終わるということは、クビにされるか、対象者が死ぬか、敵を倒すかの3つに絞られる。

確実に、1つめと2つめは無い。そうなると、残るものは1つ。

『敵を倒す』ということ。『見事完遂なさい』という文面だけで、既にこれ以外の選択肢は無かったわけだが、その後ろ2つがこの考えを決定付けていた。

「うつん……。リナリーでも分からない敵かあ」

「いや、単に教えてないだけだろ。あの女はいつもそうだ」

首を捻る舞に、俺は呆れ顔でそう告げた。

「でも、本当に知らなかったら？」

「あり得ないな。あの女が知らないことなんて存在するのか？」

「でも、ただの護衛任務くらいなら、聖夜を起用する必要なくない

「？」

「……」

その点だけが気かり。単に知り合いの頼みだから受けたという可能性も否定できない為、棚に上げていた疑問ではあるが……。

「まあ、どんな敵だろうが関係ない。ようは潰せばいいってだけだ」

「そうね。頑張ろう」

「いや、ちよつと待て」

俺の意見に同意してきた舞を抑える。

「お前、本当に協力する気か？」

「何度も言わせないで。アンタ1人に危ない橋は渡らせないわ」

「だから、そうと決まったわけじゃあ——」

「そうじゃないと決まったわけでもないわ」

舞が俺の言葉に被せるようにそう返してくる。……その通りだけどさ。

「俺1人でも、十分だとは思っけどな」

「成果を上げる為には、万全を期しなさい。私だってあのコたち使わなくても、なかなかのものだったでしょ？」

「ああ、確かに。お前随分と腕を上げたな……って、そうだった」
「なに？」

その話で今朝修平たちが言っていた事を思い出した。ほんと手を叩く俺に、舞の目線が訝しげなものへと変わる。

「お前、実習で無系統“操作”魔法を使ってるのか？」

「はあ？」

舞が、何言っちゃってんのみたいな顔を作る。

「使っわけないでしょ、こんな学園の実習で」

「いや、まあそうだろうとは思っけど」

「……こんな学園って。一応、ここ名門校だったよな？」

「どうしてそんなことを？」

「いや、今日将人たちが言っただけ。お前がぬいぐるみで戦ってるって」

「将人って誰よ」

「……いや、クラスメイトだけど。俺とかお前の」

まさかクラスメイトの名前が通じないとは。恐ろしいまでの無関心ぶりだな。

「ああ、そういうことね」

舞が納得いきましたとばかりにため息をつく。

「この学園であのコたちを動かすときは、こっちよ」

掌を俺の前に差し出してくる。バチツと弾ける音がした。

「なるほど。雷系魔法ね」

「ええ。軽く戦わせるくらいなら、操作系を得意とするこの属性魔法だけで十分よ」

属性付加をクラスメイトに匂わせず、雷系操作魔法を操るか。どうやらこの2年の間に舞の腕は相当上がっているらしい。

「まあ、姫百合可憐にはバレてたみたいけどね」

「無系統がか？」

「まさか、属性付加の方よ」

ですよね。使っていないなら、バレるはずもない。

「『恐ろしい程に静かな属性付加魔法。感服致しました』ってさ。失礼しちゃうわ！」

……それ、褒めてるだけじゃないのか？ その疑問は、心の奥底に幽閉した。プリプリ怒っている舞に、油は注ぎたくない。

「……おっと。そろそろ時間か」

ふと時計を見て気付く。始業まで、あと5分を切っていた。

「じゃあ、行きましようか」

「ああ」

舞の言葉に頷いて、俺は出入り口の扉に手を掛けた。

「……」

「……」
「……」
「……」
かちやかちかと、食器がぶつかり合う音だけが鳴り響く。その音がするのは当然。ここは学食だ。今は昼休みであり、学食では顔も名も知らない生徒たちが、皆思い思いのメニューをチョイスし食べている。しかし、考えてほしい。こんな学園の昼休みの学食で、食器がぶつかり合う音“だけ”が響くって何かおかしくない？

「……」
「……」
「……」
沈黙に耐え切れず、無言で目線を上げてみる。そうしたら、丁度向かいの席に座っていた咲夜も目線を上げたところだったようで、ばつちりと目があつた。お互いに、頬を引きつらせながらも笑いあう。

「……」
「……」
「……」
顔ごと振り返るような真似はしない。ちらりと目線を横にずらしてみれば、明らかに不満ですという顔の舞が、上品に Pasta を口に運んでいる。視線を斜め前に向ければ、咲夜の姉こと姫百合可憐が上品にお蕎麦を啜っていた。こちらは不機嫌さは一切現しておらず（というよりも、舞の言う“お互いに”嫌い合っているというのはウソだと思われる）、育ちのいいお嬢様をまさに実写化したかのような佇まいを見せていた。

4人席を確保し、それぞれが自分の食事を前に昼食をとる。学食で行うべき最低限はこなしているものの、会話の1つも無いっておかしいだろ。

事実、俺たちの周辺に席を構えている生徒はおるか、この学食に
いる全ての学生たちが俺たちの中の険悪な雰囲気呑まれ（ヤバい
オーラを出してるのは舞のみだが）、誰も一言たりとも口を利かな
い。自分のものを食べ終わると、そそくさと食器を下げ退散。鼻歌
交じりに学食へやってきた生徒たちは、例外なく「ひっ」という声
と共にUターン。たぶん、あの様子じゃ今日は購買で済ませるだろ
う。

この局地的絶対零度悪寒具合絶賛保障中のどこぞの冷戦のような
状況は、俺たち4人が学食に来た時から一向に変わらない。

さて、まずはどうしてこんな状況になったのかを説明しておこう
かね。

「聖夜あー、メシいこうぜー」

昼休み。教師が教室を出て行ったのとほぼ同時に、将人が俺のと
ころへ来た。後ろには、とおると修平も一緒だ。昨日も一緒に食っ
たし、今日もそうだろうと思うのは当たり前だ。ただ、残念ながら
それは当たり前にはならなかった。

「行くわよ聖夜」

同じく、昼食を俺と取るつもりだった舞が寄ってくる。

「お？」

「……ふむ」

「へえ」

将人・とおる・修平が三者三様の反応を示した。

「どうしたのよ、早く行くわよ」

「あ、ああ」

俺がぎこちなく頷くと、舞は満足したのか俺を待つことなく教室
の外へと向かう。

「どうしたってんだよ、聖夜」

「花園さんが昼食に誰かを誘うなんて珍しいね」

将人とおるが声を潜めつつもそう話してくる。

「あ、わり。説明はめんどいから省略で。修平、お前両替できる？」

「両替？ 何を何にだ？」

「500円玉を100円玉に」

「……できると思うが」

修平が自分の財布を取り出し、小銭をじゃらつかせる。

「頼む」

「ん」

何だという顔をしながらも、俺が差し出した500円玉を受け取った修平は、100円玉を5枚取り出して俺に差し出してくる。俺はそのうちの2枚だけを受け取り、3枚を修平の財布へと流し込んだ。

「これ、昼飯代つてことでよろしく。んじゃな」

「あ、おい」

「聖夜てめー裏切んのかよ!!」

「将人、その発言空しいだけだからやめた方がいいと思うよ」

3人の言葉を背で聞きながら、俺は遅れて教室の外へと飛び出した。

ここまでいい。問題なのは、その後だった。

「あ」

「あ」

「あら？」

「あっ」

運命的な出会いを果たした。間違いない。これは運命だったね。破滅の。

学食へ向かう為に校内を歩いていた俺たちは、丁度待ち合わせを

していたところだったのか、姫百合可憐と咲夜に出くわした。たぶん、この場にいたのが姫百合可憐だけならば、そう問題は無かったと思う。俺と姫百合可憐はあの時答えを教えて貰って以来それつきりだし、舞は姫百合可憐を良く思っていないようだから進んで会話するはずもない。だから、会釈するなり軽く頭下げるなり手を振るなり「よう」とか軽く挨拶をするなり。なりなりうるさいが、つまりはそういうことをすれば済むはずだったのだ。

唯一、イレギュラーだったのは。

「本当にまた会えましたね、中条せんぱいっ！」

俺と昨日のうちに会っていた、咲夜がいた事。

「あら、間違いないとは思っておりましたが……。やはり咲夜が言っていたのは中条様だったんですね」

姫百合可憐が優雅な笑みを向けつつ口を開く。

「咲夜にも言ったことだが……。様付けはやめてくれ。柄じゃないんだ」

「ふふふ。では、中条さん、と」

「そうしてくれ」

「私の事も、妹と混乱してしまいますから可憐と」

「分かった、可憐で」

「はい」

初日の醜態晒して以来だな、可憐と会話するのは。というよりも、あまり進んで関係を築いて行こうとも思ってたわけだが。そんな事を考えていたところで、横から発せられる殺気に気付いた。

「……聖夜」

「……は、はい」

あー。すげーやな予感しかしないわ。

「いったいどーゆーことよー!!」

案の定、舞が吠えた。

「ど、どういう事って」

「どうして姫百合可憐はおるか、妹とまで仲良くなってるのよ!!」

「え、え？　べ、別に仲が良いとかじゃ……」

「下の名前で呼んでるじゃない！！」

「いや、それはそう呼んでくれて言われたからであってだな」

何この不倫がバレた言い訳みたいなの……。

超至近距離で、舞がギャーギャー言ってくる。この上ない騒音を受けつつも、俺の鼓膜はその一言を敏感に察知した。

「ええ……？　わ、私とお友達になって下さったのではなかったのですか……？」

今にも飛び掛かってきそうな舞を宥めながら、確かに俺は聞いた。ちらりと声の発信源を見てみれば、可憐のすぐ横で目をちよつと潤ませながら咲夜がこちらの（というより俺の）様子を窺っている。

負けた。素直にそう思ったね。

「ああ、仲良いな俺ら」

だから、条件反射で断言してしまったのも、別に罪ではないと思う。

「聖夜あ——っ！！」

舞がキれるのは、半ば予想できていた事で。可憐との仲が悪いと知っていた以上、遅かれ早かれこういった事態に陥るであろうことは、昨晚咲夜と話した時点で予測済みだ。ただ、早過ぎた。心の準備ができてない。

取り敢えず俺はボコボコにされ、根掘り葉掘り真実を聞かれた後今後の対応なりなんなりについて舞と話し合う必要があるんだろうなあとか現実逃避していたところで。

第2の爆弾が投下された。

この裏切り者とはかりに詰め寄ってくる舞と、それを宥めようと必死な俺。俺の断言にほつと安堵の息を吐きつつも、この事態をど

う收拾すべきか分からずオロオロしている咲夜。そんな中、可憐が予測不可能信じられない発言をしてきた。

「咲夜の昨晚のお礼も御座いますし、よろしければお昼一緒に致しませんか？ もちろん、花園さんも」

「え？」

「へ？」

「わっ、それ素敵ですっ」

俺・舞・咲夜の順ね。何それ。うちのクラススー トップによるお食事会じゃん。舞と可憐がテーブル挟んで共にお食事？ そこでは何が起ころの？

「お、俺の出る幕はなさそうかな」

「呼ばれてんのはアンタでしょ」
「ですよね。」

かくして、学食は日ごろの活気を失うのであった。

第9話 異常事態発生？

……そろそろ食い終わっちゃうんだけど、俺。

修平に300円を献上したお蔭で、今日も俺のメニューは素うどんのみ。残金は50円。……晩飯どうしょ。ラーメン頼まなくても替え玉(50円ナリ)だけって注文できるのかな？

そんな場違いな事を考えつつ、器を持ち上げだしを啜っていたところで、ようやく今回の昼食会発起人である可憐が口を開いた。

「まずは自己紹介かしら。中条さんにきちんとご挨拶をした記憶が御座いませんし……。たぶん、花園さんは、妹とは直接の面識が無かったと記憶しておりますので」

可憐がちらりと舞の様子を窺う。舞はそれに鼻を鳴らすことで応えた。……もうちょっと淑女らしく振舞え。

「私の名前は姫百合可憐、貴方がたと同じクラス。この子は姫百合咲夜。私の妹で、1年B組に在籍しております」

「姫百合咲夜です。よろしくお願いします」

「花園舞よ。姫百合可憐、聖夜と同じ2年A組にいるわ。よろしくね」

「花園様の事は、お姉さまからお聞きしております」

「様はいらないわ。聖夜と同じ感じで結構よ。それで？ 姫百合可憐からお聞きしているっていうのは？」

「え？ 魔法がとても凄い方だって……」

「そ、そう……」

「何急に照れてぐあっ!？」

「？ どうかされたんですか？ 中条せんぱい」

「い、いや……別に」

舞の奴……。テーブルで死角になってるからって、思いつきり足を踏んできやがった。

「私、照れてないわ。聖夜」

「そ、そうだな」

顔赤くしているくせによく言う。

「俺は言うまでも無いとは思うが……。中条聖夜だ。昨日付けこの青藍魔法学園に転校してきた。よろしくな」

「よろしくお願いします」

「はい。よろしくお願いします、中条せんぱい」

丁寧な返しで可憐が、ニコニコと笑いながら咲夜が返してくれる。お互いの自己紹介が終わったところで。

「昨晩は咲夜がお世話になりました。まずはお礼を言わせて下さい」
可憐が、お辞儀の教本にでも載りそうな完璧な姿勢で頭を下げる。その言葉に舞が昨晩って何よという視線を向けてくるが、ひとまず無視する。

「いや、たまたま足が向いた先に咲夜がいただけで、あまり気にする事じゃない。一緒に帰って来ただけだからな。それより、咲夜。お前、いつもあんな時間まで出歩いてるのか？」

正直、夜な夜な徘徊するような性分には見えないんだが……。

「い、いえ。いつもって事はないです。あの日は、本当にたまたまで」

俺の問いに、咲夜がぶんぶんと首を振る。

「個人的には、いくら学園内とはいえあの時間に外をうろつくのはお勧めしないが……」

「私もいつも言ってる聞かせているのですが……」

俺の言葉に同調し、可憐がため息をつく。

「あ、いえ……。その。今回で、止めにしようかと……」

「え？」

「お？」

可憐の声と俺の声が重なる。

「そりやどうしてまた？」

今の可憐の様子じゃ、諭しても止めなかったように聞こえた。もちろん、こちらとしては都合が良いが……。

「その……。お願いは、もう叶いましたから……」

俺の方へちらりと一度だけ目をやり、小さな声でぽつりと呟いた。
「へーえ。随分と青春を謳歌していらっしやるようですわねえ、聖夜あ。転校2日目にしてもう？ 手がお早いことですこと」

「……その問答無用で殺気を振りまく感じ、止めない？」

隣でどす黒いオーラを放ち続ける舞に、そう告げる。

「ふんっ。アンタがどこの誰と仲良くしようが、私には関係ないけどねっ」

めちやくちゃ関係有りそうにそのセリフを言うんじゃねえ。

「咲夜は今日も朝から中条さんの事ばかりで……」

「お、お姉さまっ」

可憐が苦笑しながら話すのを、咲夜が慌てたように口止めする。

……頼む。咲夜の中で俺がどのように好感度を上げたのかは知らんが、これ以上舞に油を注がないでくれ。

「ふふ……ふふふ」

ほら、明らかにヤバそうな笑い声漏らしてるし。

「だ、だって……。初めてだったんです。私の事、お嬢様として扱わなかった人……」

「……」

咲夜の言葉に、舞のオーラがぴたりと止まる。

……なるほど。そういう事か。

『け、敬語で……しゃべらないのですね』

あの時の、咲夜の反応はこういう事か。今までは、自分が名前を言えば例外なく下手に出られていた、と。確かに、俺は身近に舞がいる分お嬢様相手でも物怖じしなくなってるから（それが良い事なのかどうかの言及は避ける）、あまり意識していなかった事ではあるが……。咲夜からしてみれば初めての出来事だったってわけか。

「……貴方」

舞が口を開く。可憐と咲夜が同時に舞へと視線を移した。

「貴方じゃなく、えー……咲夜……ちゃんの方。どんな祈りを捧げてたの？」

「……祈りというほどの事では」

咲夜はその問いに顔を赤くしながら、

「お友達が欲しい、と。私の事を特別に扱わない、友達が欲しいと願ってました」

「……」

「叶って、良かったです」

相当恥ずかしいのだろう。顔を真っ赤にしながらも、俺を見て微笑んでくる。ずきんと、心の奥が傷んだ気がした。

「さて、そろそろ教室に戻りましょうか」

話がうまく収まった事を読んだのだろう。可憐がさり気の無い所作で、昼食会の終わりを告げる。

「これからよろしくお願いします。中条せんぱい、花園せんぱい」
「本日はお付き合ひ頂き、ありがとうございます。今後も、姉妹共々仲良くして頂けると嬉しいです」

姫百合姉妹は、席を立ち完璧なる仕草でお辞儀をした後、食器を手に取り回収場所へと向かっていった。

「……聖夜、アンタ」

「分かってる、それ以上は言わないでくれ」

舞の目線が、怒りから非難めいたものへと変わっている。そして、俺はその理由を十分に理解しているつもりだ。

咲夜は、俺の事を“せんぱい”と呼び、自身を対等な相手として見てくれる友達だと思っている。しかし実際は……。俺はあくまで護衛対象として咲夜に近付き、縁を持っただけに過ぎない。仮に、仮にだが。もし俺が一般生徒として、この学園に入学あるいは転校してきたのだとしたら。俺は、夜の見回りなんか当然じゃなかったわけ。そうしたら咲夜と接する事など無かったはずだ。もし、たまたま教会で出くわしていたとしても、あの状況下ならば積極的に声

など掛けなかっただろう。

雇い主とボディーガード。俺と咲夜は、それだけの関係だ。対等なんかじゃ、ない。

「……いくか」

「言わなくていいの？ 先延ばしにすればするほど、後が辛いわよ。アンタは自業自得としても、あのコ泣いちゃうかも」

「クライアントからは、影ながら護衛をしてくれと頼まれている。何らかのアクシデントでも起きない限り、俺からその事を告げる気は無い」

「仕事人としては満点の考え方でも……。人としては、最低ね」
「知ってるさ」

だから余計に、性質が悪いんだ。依頼内容を逃げの口上に使っていることが、この上なく恥ずかしかった。

……しかし。結果として、この問題に関しては長く悩む必要は無かった。もちろん、この段階では知る由も無かった事ではあるが。

きーんこーんかーんこーん

「聖夜あー、帰ろうぜー」

終業チャイムが鳴った直後、将人から声を掛けられる。

「おお、そうするか」

がたりと音を立てて椅子から立ち上がる。先に荷物を纏め終え、席を立ったところだった可憐と目があつた。

「それでは中条さん、また明日」

「おお、じゃーな」

ぺこりと頭を下げてきた可憐にそう返す。その対応に満足したのか、彼女はにこりと笑うと振り返ることなく教室を後にした。

「……聖夜。お前、何者だ？」

「その激しく心外な問いかけは何なんだ？」

修平からの問いに、不機嫌そうな声色を混ぜて返してやる。

「いや、だって転校2日目にしてあの難攻不落の2大お嬢様と、もうそんな関係になってるなんて……」

「どんな関係だよ……！」

とおるの著しく誤解を招きそうな発言に、全力で抗議する。

「聖夜ああ……！ このプレイボーイ野るぶべっ……！」

「違うっつつてんだろ……！」

怪しい噂を助長しそうなセリフを吐きそうだった将人を、物理的な手段で黙らせる。

「はは、けど真面目な話。俺ら邪魔だったら多少の遠慮はするぞ？」

修平が蹲る将人を見て苦笑しながら、俺に提案してくる。……すごく気の利いた提案ではあるが、あいにくお門違いだ。

「いや、本当にそういった事は一切ないから」

「そうなのか？ ……いや、お前がそう言うなら構わないんだが」

俺の断言に、修平がこくりと頷いた。

「そうかい？ 少なくとも、あのお嬢様たちとの距離は断トツで君が近いと思うけどね」

「……どれだけこのクラスでアウェイなんだよ、あの2人は」

ただ帰りの挨拶しただけでこれかい。……っと。ん？

懷で振動している物を取り出す。

ブーブー

携帯電話がマナーモードという状況下にありつつも必死に自己主張を繰り返していた。

「何だ、電話か？」

「いや、メール」

パカリと開いて見てみる。差出人は――。

『花園 舞』

ちらりと舞の席を見てみれば、いつの間に居なくなっただのか。既にもぬけの殻になっていた。言いたいことがあるなら、帰る前に直

接言つてきやいいものを。そう思いつつ文面を開いて、固まった。

『今日から見回り、私も付き合うから』

……あれ？ 見回りしてるって、教えたっけ？

「別に言われなくても分かるわよ」

放課後。将人たちと帰宅し、改めて共有スペースにて舞と落ち合った。先ほどの疑問を投げかけてみれば、当然でしょとばかりに返される。

「姫百合可憐が、咲夜ちゃんに関するお礼を言った時点で分かってたわよ。『昨晚は』ってね。アンタは昨日の模擬戦以降、夕食までは私と一緒に行動していた。それなのに、私の知らない出来事がある。ならばそれはいつ起こったの？ 当然、答えは1つ。私とアンタが別れた後。あの時間から外に出るなんて、それこそ見回りしていたとしか考えられないじゃない」

「お前、ほんと魔法使い辞めて探偵目指せ」

「ただ鋭いんだよ。」

「それで？ 昨日はどんなルートで回ってたのよ」

「んー？ あまり意識はしていなかったが……。確か最初に校舎、次に正門、部室棟にグラウンド、体育館回って……。で、教会だな」

「なるほど、そこで咲夜ちゃんに会ったってわけね」

「ああ、だから一か所だけ回れてないんだ」

「どこ？」

「生徒会室……じゃない。生徒会館か」

「あら、よく知ってるわね？」

「ああ、昨日咲夜から聞いた」

「なるほど。けど、あそこまでは回る必要無いと思う」

「何で？」

「生徒会の人って、アンタが想像している以上のやり手よ。本当に同じ学校の生徒かしらって思う時あるわ」

「へえ……」

舞がここまで称賛するのは珍しい。昨日は咲夜が持ち上げているのかとも思ったが、どうやら本格的に凄い集団のようだ。

「生徒会館に身を潜めるなんて不可能でしょうね。彼らが見逃すはずもないわ」

「ふむ」

「もしかしたら……。そのうちアンタの事スカウトにくるかもね」

「冗談だろ？」

「学園内での“噂の転校生”の株は急上昇中よ」

「なぜ？」

「クラスメイトたちが、話しちゃってるからじゃないかしら。みんな別のクラスにも友達いるみたいだし。信じらんない」

……俺はお前のその思考回路が信じられねえよ。

「呪文詠唱が使えないのは事実。それを逆手に取った転校理由だったんでしょけど、完全に裏目に出てるわね。詠唱ができないにも関わらず、それなりのやり手だって認識にすり替わってるみたいだから」

「そうか、まいったな」

クラスメイトに口止めするわけにはいかない。止めようがないという事だ。

「でも実際のところ、任務にはあまり支障はないんじゃない？ “それなりのやり手”ってところがミソよ。アンタが模擬戦で派手に気絶したお蔭で、それほどのインパクトにはなってる。本業の敵からしてみれば、そう注目すべき事柄でも無し。それに、敵が在中しているかどうかは別として、噂話まで聞きつけられるところに潜伏できるのなら、とうに姫百合可憐なり咲夜ちゃんなりにアクシヨン掛けてるわよ」

「……そう、だな」

確かに、舞の意見は的を得ていると思う。この学園はほぼ外界から隔離されている空間だ。噂程度の話が、外に出ることは考えにくい。

「あまり煮詰めない方がいいと思うわよ。考え過ぎるのは、アンタの悪い癖。相手の偶像を勝手に作り出すと、いざという時体が動かないわよ」

「ああ」

その舞の言葉で、ひとまずこの話は止めにする。

「それで？ 見回りについてだけど」

「……本当にお前もやるのか？」

「もちろん。安心して、ちゃんとこのコも持っていくから」

舞はそう言つて、今まで抱きしめていたものを差し出してくる。

「……こいつか」

それは、帰国した初日。舞の部屋で目撃したエメラルドグリーンのクマのぬいぐるみだった。

「クマシリーズねえ。力任せの戦闘ならばうちりだが……。見回りには不適切だな」

「じゃあ、後で私の部屋にでも跳ばしといてよ」

「できるか。お前の部屋に行ったことないんだぞ。他にストックは無いのか？」

「一応、ウサギが2つあるけど」

「そっちの方がいいだろうな」

「ん。分かった。けど、このコも念のため連れて行くわ」

「仮に戦闘になったら、心強いかな。とはいえ、実際のところ来ないんじゃないかと踏んでいる」

「あら、こういう風の吹き回しかしら。学園の障壁に惚れたの？」

「微妙な言い回しはあるが、その通りだ。昨日確認して痛感した。ねずみ一匹通す隙間も無いな、ここは」

「だから言つたでしょ？ 護衛なんて必要ないのよ」

「そうである事を願いたいね」

ぐるりと見渡ししながら、そう告げる。ある物に目が留まった。

「……公衆電話なんてあったのか」

ロビーの一角。少し壁の奥まった場所に、緑色をした電話機が2台置いてある。

「携帯持っていない子だっているのよ？　と言っても、公衆電話が設置してある場所なんて、ここと教員室前だけだけど」

「そうなのか。ま、そんなあちこち設置する物でも無いしな」

「それもそうね。それで？　見回りは何時からかしら」

「夜10時にここに集合だ」

「10時って……。門限ジャストじゃない。出られないわよ？」

「跳ぶ」

「ああ、なるほど。流石ね。……って、まさか咲夜ちゃんに教えたんじゃない」

「いや、身体強化でベランダまで上がって、窓から入った」

「あっそ。一応の線引きはできてるみたいね」

「一応って何！？」

ジト目で言われ、心外だとばかりに呻く。

「まあいいわ。じゃあ、そんな感じにしましょうか。それで聖夜、今日の夕食は？」

「今から食うところだ。一緒に行くか」

「うん」

一緒に食堂へと足を向ける。

無論。麺だけを注文するという奇妙な行動を取る俺に対し、舞が白い目で見っていた事は言うまでもない。

夜10時。

一分の遅れも無く現れた舞を、人気の無い事を確認済みの共用トイレへと招き入れる。

「……この光景。傍から見ると、どう感じるのかしらね」

「それは考えたくないな」

普通にアヤシイ感じに見えるだろうね。ただ、そう断言できないだろうとも思う。

「魔法服着てるんだし、そうは思われないと信じたい」

「そういうプレイって思われるかも」

「お嬢様がプレイ言うな」

そんな軽口を言いながら、俺はいつも跳ぶときに利用する校舎脇の茂みに座標を合わせた。

「跳ぶぞ」

「いつでも」

舞の返答を聞いた瞬間、転移魔法を発動した。

「じゃ、私はこっち行くから」

「お、おいおい。一緒に回らないのか？」

着くなり個人行動を開始しようとする舞を、慌てて呼び止める。

「何よ。敵が来ないって言ったのはアンタでしょ？」

「い、いや……。それはそうだが」

「なら、2人で真剣に1つずつ回るよりも、バラけてさっさと終わらせた方がいいと思うけど。今日明日で解決する問題でもないわけだし、毎日全力で回ってたら持たないわよ？」

「……いや、確かに言う通りではあるけれども。」

「そういうわけで。私はこっち行くから。見回り終わったらここで落ち合いましょ。何かあったら連絡頂戴？」

「あ、おいっ！」

舞はそう言うや否や駆け出して行ってしまった。

「……ったく」

アイツは一度決めるとそれに向かって突っ走っていく奴だからな。言っても無駄か。まあ、狙われてるのはアイツってわけじゃないんだし……。

そこまで考えて、悪寒が体を走り抜けた。

——アイツが狙われてないなんて、誰が決めたんだ？

泰造氏の話では、狙われているのは“魔力の高い学生”。たまたま受けた護衛対象が可憐と咲夜であったというだけで、それは舞がターゲットから除外される理由には成り得ない。護衛の依頼を受けたことで、“狙われるのは可憐と咲夜”というおかしな先入観を持つていたが、そうじゃない。舞は、魔力が高いと称される魔法使いの家系のお嬢様。可憐や咲夜と何が違う。違わないだろ。舞とて、ターゲットになり得る。

そう思い、舞の走って行った教会の方角へ足を向けようとしたところだ。

「……」

無意識の内に、振り返る。不自然な魔力の揺らぎを感じた。場所は……。

「……舞が向かった方角とは、逆か」

揺らぎは、徐々に強くなる。数も複数だ。そして、その中の1つに。見覚えのある魔力を感じた。

「……嘘だろ」

まだ魔法で手合わせをした事は無いが、普段近くにいた事で十分特定できる。

可憐だ。間違いない。

どのような手段を用いたかは知らないが、どうやら本当に敵は学園内に侵入してきたらしい。

思わず、舌打ちをする。携帯電話を取り出そうとして、止めた。舞に連絡するのは避けた方が良く。舞とてターゲットになり得るのなら、一緒に連れて行く事は得策じゃない。俺1人でどうにかするべき。逆にできないような相手なら、それこそ舞は呼ぶべきじゃない。

そう考えて、駆け出した。

相手の侵入手口も、なぜ咲夜ではなく可憐の方がこの時間に外を出歩いているのかも、ひとまず棚上げ。とにかく、魔法戦になる前に駆けつける必要がある。跳んでもいいが、正確な位置関係が把握できていない以上、戦闘のど真ん中に現れでもしたら意図せぬ流れ弾でノックアウトされかねない。

舞の方も心配ではあるが、仮に何かあるようなら舞は俺に知らせてくるだろう。そうすれば、場所を聞き出して直ぐそこに跳べばいい。明らかに、楽観論である事は承知の上で。

……まずは、こっち。

『今日明日で解決する問題でもないわけだし』

不意に、先ほど舞が口に使っていた言葉を思い出す。それに軽々しく同意していた自分に、吐き気がする。今更ながら、浅はかな考え方しかしていなかった事を自覚した。

第10話 真夜中の戦闘（前書き）

お気に入り登録件数が、2000を突破しました。
皆様の応援の賜物です。

本当に、ありがとうございます。

と、いうわけで。

やっと本題に入る本編をどうぞ。

第10話 真夜中の戦闘

駆けつけた時には、まだ戦闘は開始されていなかった。理由は知らないが、可憐は魔法服を身に纏っており、既にMCを起動している。

周囲には、20人程度の黒いローブを被った男たち。それぞれが片腕に手を添えているところから見て、全員が魔法使いであり、そこにはMCが隠されているとみていい。

「そこをお退きなさい。邪魔をするのならば、痛い目を見ますよ」

普段の彼女からは考えられぬ程、冷たい声色でその言葉は発せられた。しかし、震えている。まあ普通に学生やってればこんな事態に遭う事もないだろうし、当然だろうが。

「ひひひ。そう言われて退くくらいなら、ハナからこんな事はしねえよ」

「お嬢ちゃん、いくら君に魔法の心得があるからって、この人数に勝てると思っているのかい？」

その言葉に、可憐の顔がしかめられる。どうやら自身の実力と現状から、結果は推察できたらしい。思ったよりパニックに陥っていないようで安心した。

それだけ確かめられれば、十分。俺は、その輪に無理矢理介入する事にした。

「はいはい、ちょっと失礼しますよ」

「は？」

「何っ!？」

身体強化魔法により機動力・打撃力を上げた体で、瞬時に襲撃者たちとの距離を詰める。囲まれている可憐の元へ駆け寄る間に、2人3人の顎を殴打し戦闘不能にしておいた。

「あ、貴方っ!？」

「よっ」と

「きゃっ!？」

可憐を抱きかかえ、跳躍する。ここでの跳躍は、身体強化を纏った足での跳躍という意。輪になっている襲撃者たちの頭上を軽々と飛び越え、離れた場所に着地した。

「あ、貴方……どうして」

急に現れた俺に対して、どう声をかけていいのか分からないのだろう。可憐は目を白黒させて俺を見つめている。

「よっ。また明日って言ってたが、今日の内にまた会っちゃったな」

「え？ ええ……。え？」

うまく頭が回っていないようだな。

「てめえ、何者だ!？」

「あん？」

いかにも悪者っぽい声色でそう叫びながら、男たちが皆こちらの方へ振り向く。

「どこから現れやがった!！」

「こいつ等に何したんだ!！」

「……質問は1つずつ、ゆっくりと言ってくれるか。何言ってるのか分からん」

「ふざけんなあ!！」

男が炎の魔法を放ってくる。

「へえ。無詠唱の割には、なかなかの威力だな。でも、後ろ気を付けた方がいいんじゃないか？」

「へ？ ぐぎゃああ」

男が自身の魔法弾に焼かれて火だるまになる。それを見た周囲の人間にも動揺が走った。当然だろう。放たれた魔法が、突如狙いを変えて本人に当たったのだから。

いや、厳密にいうと違う。魔法弾は狙いを変えてなんかいない。

俺は、俺の方へと向かってきた魔法弾を利用するために、魔法球を男の背後へと転移させた。魔法球の起動も速度もそのままに。男の魔法はそのまま直進し、ある意味で“狙い通りに”その直線上にい

た人物を襲ったというだけ。

ただ、転移魔法を知らぬ襲撃者たちにはそう簡単に受け入れられなかったようだ。絶対的有利の立場から一転すると、人の心情は思いの外脆くなる。

——だからこそ、そこが付け入る隙になる。

「なにこれくらいで動揺してんだよ。たかが仲間1人が黒焦げになったってだけだろ？」

にやり、と。相手を威圧してみせる。わざと、言葉を乱暴なものへと変える。

「アンタら、魔法学園に侵入してんだ。仲間の1人や2人、死ぬことくらい承知済みじゃねえのか？」

その口調・言葉に、何人かが僅かに後退した。……なんだ。どれだけ甘ちゃんを寄越してんだよ。何ともいえぬ脱力感に浸されたところで、離れたところからおそろるおそろる声を掛けられた。

「……中条さん？」

自分を守ってくれる味方に対する声色じゃなかったね、間違いない。どうやら俺の豹変っぷりに理解が追いつかず、どう接していいか分からなくなっているんだろう。まあ、ここまで大々的にやってしまえば、もはや隠す必要も無い。護衛の事も、転移魔法の事も、だ。

「下がっててくれるか。あまり近寄られるとうまく戦えん」

「で、でもっ！！ 貴方攻撃魔法も防御魔法も使えないって！！」

「あーあー。それ言っちゃう？ 敵に囲まれたこの状態で」

「っ！？」

可憐は急いで口を手で覆う素振りを見せたが、もう遅い。つーか、喋った後にそんなこととしてどうなるんだ……。意外とお茶目な娘だな。「へ、へへっ……。なるほどなあ。攻撃魔法が使えない、か」

その事実、絶望の淵に囚われていた襲撃者たちを、見事救い出

したようだ。一変して、再び殺伐とした雰囲気を纏い始める。

「だから、お前の情報なんて無かったわけだ……。攻撃できないなら――」

その男のセリフは、そこで途切れた。

「話は簡単だ。そう思ったのか？」

ぐるんと眼球が回り、白目を剥いて男が倒れる。無防備な顎に一撃を決められ、意識を保つことができなかったらしい。その光景を見て、再び襲撃者たちの間にざわめきが走った。

「攻撃魔法が使えなかるうが、防御魔法が使えなかるうが。関係ないだろ？」

ホントは詠唱ができないってだけで、攻撃も防御も一応魔法使えるけど。ま、詳しく教えてやる必要もない。俺はここぞとばかりにドスの効いた声色で次の言葉を放った。

「俺にはそんなもんなくとも、お前らを皆殺しにできるんだからよ」「ひっ！？」

その言葉に、耐えきれなくなったのだろう。襲撃者の1人が突然、背を向けて逃げ出した。……いや、逃げ出そうとした、か。どさりと。その男は音を立てて力なく地面へと倒れた。もちろん俺が意識を刈り取ったんだけどね。

「俺に背を向けた奴、俺に向かってくる奴から順に仕留めていく。次の奴、早く動きな」

「う、うあああああ！！」

静寂は一瞬だった。侵入者たち全員が、散り散りになって逃げて行く。逃げられるはずもないのに……。

「……めんどくせーなあ」

ついため息が零れる。ここは『その言葉に凍りつき、皆身動きが取れなくなっただ』とか、そんな感じになるんじゃないのか？

「待って下さい！！」

仕方無しに跳ばうとしたところで、制止の声が掛かる。振り返って見ると、可憐が驚愕だか混乱だかわけの分からない顔をしていた。

「何をしようとしているのです!!」

「何って……残党狩り？」

うん。表現としては悪くないだろう。

「ざ、残党って……。相手にはもう戦意は無いのですよ!？」

軽口を叩いたつもりが、思わぬ言葉のアップーを喰らってしまった。

「おいおい。戦意も何もアンタを狙ってた輩なんだぞ」

「そ、それでも……。もうその気はないじゃないですか!!」

「その気って……。アンタなあ……」

ゆらりと。可憐の後ろでうごめく影。俺が跳ぶよりも、その男が目的を達成する方が早かった。

「捕えたぞ!!」

「きゃっ!？」

各々が任務を放り出し、逃亡を図った中で。1人だけは未練がましくこの場に残っていたようだ。可憐を羽交い絞めにした男が、勝ったという顔でこちらを睨んでくる。

「……捕まっちゃったな。その気は無いんじゃないのか？」

「くう!!」

俺の言葉に、可憐は悔しげに表情を歪める。

「お前ら!! 構えろ!!」

人質を取ったことで再び立場が逆転したと思ったか、逃げ出していた侵入者たちは全員足を止め、こちらに振り返った。

「いいか、ガキ。少しでも魔法を使う素振りを見せれば、この女は殺す」

「ひっ!？」

「……」

可憐の首を片腕で絞めながら、男はナイフを取り出した。

「ナイフって……。お前、魔法使いじゃねえのかよ」

「詠唱するよりも手っ取り早く結果が出せるだろ？」

「ああ。それは確かに」

刺せば終わりだからな。それ。

「お前は危険だ。ここで死んでもらうことにしよう」

男の言葉と同時に、周囲を包囲していた男たちがMCに手を添えたのを視界の端に捉える。……蜂の巣になれってか。冗談じゃねえ。

「お逃げ下さい!!」

「あ?」

この距離なら、直ぐに殺れる（もちろん、息の根は止めないが）。忠告を無視して跳ぼうとしたところで、可憐が叫んだ。

「貴方の魔法を使えば逃げられるはずです!! 私ことは構わず早く!!」

「何好きな事言っただ!! 黙れ女!!」
ばきっ

「っ」

男が、ナイフの柄で可憐の頬を殴った。羽交い絞めになっている状態で、振りかぶりもせずと与えた一撃。そう威力は無いだろう。が、温室育ちのお嬢様じゃ耐えられないかもな。

「……こ」

「?」

「これは、私の過失です。……私なら、平気ですから」

「……へえ」

驚いた。この場面で、そのセリフが吐けるか。白い肌に、赤い鮮血が映える。おそらく口の中を切ったのだろう。それでも気丈に振舞おうとするその根性は――。

「喋んなって言っただん――」

「勇気あるじゃん、お前」

「え?」

可憐が驚きの声を上げたのと、羽交い絞めにしていた男が崩れ落ちたのはほぼ同時。無理な体勢から、突如支えを失った可憐がよるけそうになったところを、できる限り優しく肩を抱くことで支えてやる。

「あ、貴方…… いったいどうやって……」

「話は後にしようか」

「え？ あ」

周囲の侵入者たちは、既に各々の詠唱を始めている。どうやら、ここまできたらやってしまえという、無茶な境地に達したらしい。

「わ、私の後ろに下がってくださいー!!」

可憐が、自身のMCに手を伸ばそうとしたところを、俺が抑えた。どうしてという表情を向けてくる。

「アンタが凄腕の魔法使いだってのは知ってるが、この人数に1人の障壁じゃ無茶だ。だから、俺の魔法を使う。信じてくれるか？」

我ながら、無茶な話だと思う。ついこの間転校してきた男子生徒。膨大な魔力は所持するものの、魔法らしい魔法は一切使えず、魔法実習でも醜態を晒したばかりだ。

一瞬、何を言われたのか分からなかったのだろう。しかし、そのきょとんとした表情は直ぐに押しこめ、可憐は力いっぱい頷いていた。

「はいっ」

アンタも物好きだな。ランクで言えば、俺なんかよりも遥か高みにいるお嬢様がさ。自分で信じろと言ったときながら、この考えは失礼だけれども。

ここまですがタイムリミット。俺たちを包囲していた侵入者たちから、次々と魔法が放たれる。火・雷・風等使用された魔法はバラバラだが、全てが同じ目的を持ち俺たちに向かって飛んでくる。

一瞬、可憐と目が合う。につこりと笑ってくれた。こんな状況で笑う度胸があるのか。

「少しでも魔法を使う素振りを見せれば？ 前提から間違ってるよ、アンタら」

—— そんなに信用されちゃ。

「俺がそんな素振りを見せた時には」

その場から、姫百合ごと転移して消える。

「もう全部終わってんだよ」

—— 期待に応えるしかないじゃんか。

「…… 凄い」

気が付いた時には、先ほどとは全然違う場所に立っていた。いきなり私を襲ってきた人たちが放った魔法が。私たちを狙っていたはずの魔法が。全然、違うところで着弾している。彼が、どんな魔法を使ってくれたのか、見当もつかない。

…… いえ、それは嘘。彼はいつの間にか私の隣から姿を消し、侵入してきた人たちの中で縦横無尽に動き回っている。早いだけじゃない。“消えて、また現れる”。たぶん、目で追えていないわけじゃない。あれは……。

「転移魔法……」

本当に使える魔法使いが、存在するなんて。ワープは空想上のもので、実用できるなんて思いもしなかった。呪文詠唱ができないと言った彼の使う魔法。非属性無系統による先天的な能力。もしかすると彼が呪文詠唱できないというのは、この力の副作用なのかもしれない。

彼を襲う火球が、当たる直前に別の場所で別の人間を捉える。彼を殴ろうとする腕は、突如目標を失い空を切っている。真正面から対峙するのかと思いきや、いつの間にか彼は相手の背後を取っていた。遠目からでも見ていれば分かる。圧倒的な人数の差は、彼の障害には成り得ない。魔法の、魔法使いとしてのスペックが違い過ぎる。

そう呆然と戦況を見つめているうちに。彼の前に立っていた最後の1人が崩れ落ちた。

「……手ごたえの無い奴らだ」

汚れた魔法服を手で払いながら、吐き捨てるようにそう呟く。

この学園のセキュリティをどう破ったのかは知らないが、これだけの人数だ。ほぼ完全に隔離されたこの空間にこれだけの侵入を可能にしたという事実から、少しはやる奴らだと思ったんだが。とんだ買いかぶりだったようだ。

地面に伏す男たち。一番近くで伸びていた男の胸倉を掴んで引き寄せる。

「おい、起きろ」

「……」

返事が無い。完全に気を失っているようだ。くそ、1人くらい残しとくべきだったな。聞きたいことも聞けやしない。手を離す。男は重力に従い、そのまま地面へと崩れ落ちた。うむ。気絶した振りとかではなかったようだ。モロに顔面から落ちたから。

……しょうがない。後はあの女に引き渡してから、じっくりと聞き出すとするか。そう考えて、懷から携帯電話を取り出したところ
で――。

「あ」

ダメじゃん。俺、あの女のアドレス知らないじゃん。どうすんだよ、こいつら。泰三氏にでも引き渡せってか？

「な、中条さんっ!!」

どうしようかと悩んでいたところで、可憐が駆け寄ってきた。

「おう。怪我は無いか？ 可憐」

「え、ええ。私は平気です。それより、貴方……いったいどうして」「そりゃこっちのセリフだ。お前、こんな夜中に魔法服着こんで何してんだ？」

「あつ!？ そ、そうですっ!!」

俺の言葉に、何か思い出したのか。急に可憐が狼狽し始める。

「お、お願いしますっ!! 中条さん、助けて下さいっ!!」

「は？　ちょ、ちよつと落ち着け」

いきなり距離を詰めてきた可憐の肩を掴み、引き剥がす。

「あ、す、すみませんっ」

「いいから。で、何の話なんだ？」

「さ、咲夜が……」

可憐からその言葉が漏れる前に、嫌な予感がした。

「咲夜が、誘拐されてしまったのですっ！！」

「……なるほどね」

可憐からの説明を受け、舞が神妙な顔で頷く。

あれから、咲夜を連れ去ったという何者かの連絡を受けた可憐からの報告を聞き、ひとまず舞を呼び戻した。まだ不審な輩が学園にいる可能性がある以上、舞をぶらつかせるのは得策ではない。可憐には、相手が可憐を呼び出そうとしている以上、可憐自身がその場に行くまでは咲夜に手出しはされないだろうと説明し、何とかパニック状態から回復してもらっていた。舞は、最初はこの付近一帯に転がっている気絶した男たちを見て目を真ん丸にしていたが、可憐からの報告を受けて声を荒げた。

「……女の子相手に、こんな人数を送ってくるなんて……。拳句に誘拐？　ホントさいてーね」

「まあ、善人は誘拐なんてしないだろうな」

「うつさい。姫百合可憐、アンタ顔の怪我は平気なの？」

「……は、はい。私は……。そう強く殴られたわけでもないですしそれに今は妹の方が気がかりだと、その表情が告げている。」

「……そう。強いよね」

それつきり関心を無くしたようで、舞は可憐から視線を外した。
「それで、どうする気？」

「どうもこうも。色々と不安材料はあるが、乗り込む他ないな」

可憐の話じゃ、今は体育館を根城に立て籠もっているようだ。おそらく可憐に咲夜誘拐の情報を伝えたのは、安全圏である寮から引っ張り出すだけでなく、ここで襲わせた第一波が失敗してもきちんと自身の足で自分たちの領域まで来て欲しかったからだろう。

「いいじゃない。シンプルで好きよ？　そういうの」
舞がにやりと笑う。

「いや、お前と可憐は寮に帰れ」

「なっ！？　何だよ！！」

「狙われているのは、姫百合姉妹だけじゃないからだ」

俺の言葉に、舞が眉を吊り上げる。

「どういう事？」

「俺が与えられた情報は、“魔力が高い学生が狙われている”という事だけ。分かるか？　“対象を姫百合姉妹に限定した誘拐犯”では無いって事だ」

つまりは、相手はお前でも良いんだよ。と、言外に伝えてやる。

しかし、引導を渡せるはずだったこの言葉は、思わず墓穴に繋がった。

「……聖夜。アンタ、自分が言っている事を、もう一度自分に言って御覧なさい。“魔力が高い学生”なら、“アンタも十分素質ある”のよ」

「……」

至近距離で睨み合う。お互い、譲れない事は百も承知。どうしたものかと考えていたところで、思わぬ横やりが入った。

「……中条さん。さっきから、貴方はいったい何をお話になっているのですか？　花園さんも。この件について、何かご存じなんですか？」

会話についていけない可憐からしてみれば、この疑問はもったもであると思う。舞が、どうすんのよという目を投げかけてくる。どうするも何も、可憐の前で堂々と魔法戦闘をやらかした以上、もう

隠すつもりも無かった。

「お前たち姉妹が狙われるかもしれないという話は、初めから知っていた。情報源は、お前たちの父親・姫百合泰造氏だ」

俺の言葉の中から、自身の父親の名が出てくるとは思わなかったのだろう。可憐は目を白黒させた。

「お、お父様が……？ あ、貴方いつたい……」

「想像は付いてるんじゃないのか？」

皆まで言わせるなと思うものの、それが場違いな感情である事は自分が一番良く知っている。自分が蒔いた種なのだ。自分で刈らねばなるまい。

「俺は、お前たちの護衛役なんだよ。転校生なんかじゃない。その立場を利用して、お前たちに近付いただけだ」

その言葉に、可憐の動きがぴたりと止まる。けど、それは可憐だけじゃない。俺も同じだ。自分が自分の役割を口にしたただけなのに、ここまで苦しい思いをするとは。

「……そ、そんな。じゃ、じゃあ……。咲夜の事はどうなるのです？ あの娘は貴方の事を友達だと……」

核心を突かれ、ずきりと心が痛む。たかが1日。にも関わらず、咲夜のお友達発言は自分の中で想像以上に重いものだったらしい。

舞は何も発さない。冷徹な目で、傍観を決め込んでいる。

俺の言葉の意味と現状が、飲み込めてきたのだろう。可憐は、ふるふると身を震わせながら、ぼつりと呟いた。

「……さ、最低です」

「ああ、自覚してる」

予想通りの発言。けれど、予想外の痛みだった。

咲夜が誘拐されているかもしれないという状況下では、こんな事を話している場合ではない。それでも、どう事態を収拾すればいいのか、誰も分からなかった。

が。事態は思わぬところで急展開を迎えた。

第11話 体育館での乱闘騒ぎ

ブルルルルルルル

「っ!？」

「え？」

「ん？」

地に伏した男の内、1人の胸元から電子音。携帯電話の呼び出し音だ。このタイミング。おそらく可憐誘拐の件についての問い合わせだろう。

息を飲んだまま動かない可憐と俺のアクション待ちの舞を尻目に、俺はその男から携帯電話を抜き取って二つ折りのそれを開いてみた。そこに表示された文字に、違和感を覚える。舞たちの元へと戻り、無言で携帯電話の画面を見せた。

「……公衆電話」

可憐が表示された文字を律儀に読み上げる。舞は、それを見て俺と同じ考えに至ったのだろう。にやりと笑って見せた。その反応を確認し、俺は躊躇いなく通話ボタンを押す。

「ちよっ……」

「黙ってて」

俺の行動に驚いた声を上げる可憐を、舞が制する。俺は2人を無視しつつ、携帯電話の音量を最大にして口を開いた。

「待たせたな」

「!？」

「……」

普通に話し始める俺に対して、可憐がさらに驚愕の表情を作る。舞は無言で口の端を吊り上げた。

『随分と掛かっているみたいですが、どうなりました？ 普通に通話できるという事は、返り討ちに遭ったわけでもないみたいですが』

携帯電話という媒体から発せられる声色。その為断定はできないが、おそらく30代から40代前半の男の声だ。

「ああ、学園の見回りの目を盗んで移動するのに時間が掛かってなだが、ちゃんと目的は達成したよ。妹の名前を出した途端、大人しくなりやがった。声を聞かせようか？」

『ふふ……。お願いします』

俺は可憐ではなく、舞の方へと携帯電話を向けた。その意図を瞬時に理解した舞が、声を張り上げる。

「卑劣な真似を！！ 貴方たち、こんなことをして、ただで済むと思っているのですかっ！！」

『ふはは。元気なお嬢様ですね』

通話先の男から、呑気な声が漏れる。まあ、電話越しの相手の声を聞き分けるなんて、知り合いでもない限り無理だよな。ちらりと俺を見てきた舞に、先を促すように頷いた。

「さ、咲夜は無事なのですか！？ ちゃんとそこにいるんでしょうね！？」

『もちろんさ、姫百合可憐。君がここへ大人しく来てくれれば、危害を加えないと約束しよう』

「くっ！！」

迫真の演技だ。隣で事の成り行きを見守っている本物の可憐は、口1つ開かず俺たちの行動に固まっている。

さて、聞きたい情報はもう聞いた。まだ続ける？ という視線を向けてくる舞を手で制し、俺は再び携帯電話に口を近付けた。

「んじゃ、体育館に連れてくぞ」

『ええ、お願いします。見回りに見つかるなんて、恥ずかしいマネしないで下さいね？』

「もちろんだ」

そう言って、通話を切った。

「あ、あ、貴方たち……いったい何……を……」

声を震わせながら、可憐が口を開く。しかし、俺や舞が弁明する

よりも先に、可憐は踵を返して走り出した。

「待てっ！！ 行くな！！」

俺の制止に、可憐が信じられないという表情をする。

「どうしてですっ！？ 早く行かないと、咲夜が危ないのですっ！！」

「いいから落ち着け！！」

直ぐに追いついた俺は、可憐の腕を掴んで呼び止めた。しかし。

「ふざけないで下さいっ！！」

可憐は俺の制止を振り払い、普段の彼女からは想像できぬほどの怒声を上げた。

「貴方には失望しました！！ あの咲夜が心を開いた殿方でしたから、どれほどの器量をお持ちかと思えば！！ 咲夜の心を踏みにじり、あまつさえこの私に助けに行くなと？ 言語道断ですっ！！」

「苦情も文句も！！ 後でいくらでも受け付ける！！ だから今は落ち着け！！ 咲夜を助きたいんだろ！！」

「っ！？」

その言葉に、可憐が一瞬怯む。その隙に両肩を掴み、至近距離で双眼を覗き込んだ。

「まずは、連絡だ。携帯にかけろ」

極力、冷静にそう告げる。

「な、何をっ！！ もし今の男が傍に居たらどうするのですっ！！」

「近くに咲夜がいるって言うてる奴が、公衆電話なんて使えるわけないだろ！！ この学園で公衆電話があるのはどこだ！？ 寮のフリースペースと教員室前だけじゃねえか！！」

咲夜は魔法実習ドームで捕らわれていると話していたのなら、不可能。俺の言葉で、その考えに直ぐに至ったのだろう。

「っ！！」

可憐は我に返ったかのように自身の携帯電話を取り出した。素早く操作し耳に当てる。

「音量は最大にしといてくれ」

一度は睨んでくるものの、無言で頷きボタンを押す。すると、可憐の携帯電話からコール音が鳴り響いた。

……頼む。平気なはずだと思いつつも、心の中で祈り込む。程なくして、コール音は途絶えた。代わりに――。

『はぁーい。お姉さま、どうかされたんですか？』

聞き間違いのない、咲夜の声が響いた。

「よ、良かった」

「お、おい」

がくりと可憐が膝を折り、その場にへたり込む。

『……よかったってどうかしたされたんですか？ お姉さま』

「いいえ、なんでもないの。あのね」

「おい」

すっかりと安堵した表情の可憐を小突く。

「いくつか咲夜に質問をする。俺の言うとおりの質問をしてくれ。

まず最初。今日のお昼はどうだったかと聞け」

「……さ、咲夜。今日のお昼はどうだった？」

いきなり何の話だという顔をしながらも、可憐は俺の言うとおりの質問を投げかける。

『楽しかったですよ！ 中条せんぱいや花園せんぱいともお話しできて、嬉しかったです！』

……「中条せんぱい」「花園せんぱい」、ね。少なくとも、声を偽造した別人相手では無さそうだ。

「今はどこにいるか聞いてくれ」

「今はどこにいるの？」

『え？ お部屋だけど』

「部屋番号は？」

「……あ、貴方の部屋番号って何番だったかしら」

『ど、どうされたんです？ お姉さま。286ですけど』

「間違いは？」

「ありません、本当です」

俺の問いに、携帯電話の口元を抑えながら可憐が首を横に振る。

「今から行くと伝えて」

「い、今から少しだけお邪魔してもいいかしら？」

『構いませんよ。お待ちしてます』

「切ってくれ」

「では、直ぐに」

『はい』

そう言つて、可憐は携帯電話を切った。

「俺も行く」

「え？ な、何を……。咲夜の部屋は女子棟にあるのですよ？」

「そうよ。アンタ何考えてんの？」

可憐に続き、舞までもが訝しげな顔を俺を見る。

「中からはいかない。外から入る。身体強化を使えば、ベランダまでは直行だ」

「あ、なるほど」

ぽんと舞が手を鳴らす。しかし、可憐は納得いかなかったようだ。

「そ、そんなこと……」

「言つておく。咲夜が部屋に監禁され、無理矢理に話をさせられていた可能性は、ゼロじゃない」

「っ！？」

俺の発言に、可憐が言葉を失う。

「安心しろ。隠れて覗き見るような真似はしない。あくまで咲夜の無事を確認するだけで、お前が窓から入る一步手前に退いていよう。問題ないと判断できれば、俺は直ぐにでも退散する」

「あ、あの……」

「これはお願いじゃない。俺はお前の“同級生”であり咲夜の“せんぱい”であるわけだが。それ以前に俺はお前たちの“護衛”だ。不安要素が残ったまま、ここで仕事を放棄する気はない」

「……」

「……」

俺の断言に、可憐が押し黙る。少しの間だが、沈黙が続いた。

「中条さん」

「何だ」

沈黙を破ったのは、可憐。呼びかけに、瞬時に応える。

「1つだけ、聞かせて下さい」

「答えられる事ならな」

可憐は、一度目を逸らして直ぐに戻した。

「貴方にとって、咲夜は何なんですか？」

たった2日。それだけの短い期間を過ごしただけの俺に、どんな答えを求めようと言うのだろうか。

「護衛対象だ」

きつぱりと、言い放つ。可憐の端整な顔が。少しだけ、皮肉気に歪んだ。

「……ただ」

本当であれば、言うてはならない言葉を紡ぐ。

「赦されるのなら、友達になりたいとも思ってる」
「っ」

その言葉に、可憐は敏感に反応した。至近距離で、見つめ合う。可憐の大きな瞳には、吸い込まれそうな力を感じた。俺が今放った言葉の真意を、直接探られているかのような錯覚に陥る。

「……こちらです」

それだけ言つて、可憐が踵を返す。無言で歩き出した。

「今のも、演技？　だとしたら、アンタ本当に救えないわよ」

舞が、可憐には聞こえないように囁く。

「……俺としては、演技でいられた方が良かったんだけどな」

今はあまり顔を見られたくない。舞にはそれだけ告げて可憐に続いた。

「不器用な奴」

クスリと笑うように呟かれたその一言は、聞かなかった事にした。

「お、お姉さま。何でそんなところから？」

「い、いろいろとあってね……」

窓からの突然の来訪に、咲夜の驚きの声が聞こえる。

「……問題は無かったようだね。舞、どうだ？」

「おかしい魔力の波動は見えないわ。操られてるといった心配も無さそう」

「そうか」

舞の言葉に、頷く。じゃあ、ここに居る必要は無いな。

「舞、1つ頼まれ事をしてくれないか」

「用件によるわね」

俺の言葉に、ジト目で睨んでくる。おそらく、俺が、この後可憐が呼び出された場所に1人で向かう事に勘付いているのだろう。

「一度学生寮の中まで跳ぶ。お前は俺の制圧が終わるまで、咲夜の部屋前で張っていてくれないか」

まだ残党がうろろろしていて、学生寮に侵入してくる可能性も0ではないからな。

「……そうやって、私を安全圏に入れておくってわけね」

やはり、裏までしっかりと読まれていた。

「1人で平気なの？ 相手は仮にも学園の障壁を突破してくる連中よ」

「仮に本命が体育館の方に潜んでいるのだとしても、あの襲撃者たち一同のレベルはお粗末なものだった。そう強いというほどの事でもないだろう。寧ろ、厄介な奴がいるとしたら、それはさっきの電話の相手くらいだろうよ」

「敬語使ってる割には、高圧的な感じだったものね」

「ああ」

「はーっ。しょうがないわねー」

舞が大げさにため息をつく。

「今回だけは、アンタの口車に乗ってあげるわよ」

「助かる」

「何言ってるの。助けてくれるのは、アンタの方でしょうが」
額を小突かれる。

「早く跳んで頂戴」

「ああ」

転移魔法を発動した。

昨日の学園探索で確認していたことだが。ここの体育館は学生証による認証式ではなく、普通の南京錠が使われている。魔法実習ドームとは別に建っている事から、こちらは体育の授業で使用するような一般的な建物。普通の学校が取っているような施錠で問題ないと思っただろう。

「その考え方が、今回の襲撃者籠城に付け込まれたわけだが」

体育館、その扉の前に立つ。南京錠は見事に破壊されていた。気配を探ってみれば、中には複数人いる事が分かる。まあ、何人いようと関係ないけどな。

……さて、いくか。

「おせえなあ、アイツ等……」

お？

「あ？」

こちらが手を掛ける前に、扉は勝手に開かれた。中から出て来た1人の男によって。思わず見つめ合う。

「て、てめえいったびべっ！？」

「出迎えご苦労。通してくれたまえよ」

こっそり侵入しようかとも思ったが、もうダメだね。しょうがない。いきなり怒声を上げかけた男の顔面を殴り飛ばし、中へ。身体強化を纏った拳で殴ったため、男は面白い程に吹っ飛び、出入り口

から離れたところで転がっていた。

「お、おい！！ お前どうしたんだ？」

「しっかりしろ！！」

中で待機していた男のうち数人が、いきなり吹き飛ばされてきた男の元へと駆け寄る。皆の視線は、完全に伸びている男へと向かっていた。

……その中で。

「お前がやったのか、こいつを」

1人だけが、たった今体育館へと足を踏み入れた俺に意識を向けていた。

「ああ。いきなり目の前に現れるもんで、ついね」

「ついじゃねえだろ！！」

「ふざけてんのか！？」

俺の答えに視線を向けた男たちから、口々に怒声上がる。

「おめえら、落ち着け。話が聞けねえだろ」

「俺に聞きたい事でもあるのか？」

騒いでいた男たちが収まるのを見計らって、問うてみる。ま、何が聞きたいかなんて分かっているけどさ。

「ああ。俺たちはここで、とある人間を待ってるんだが」

「待ち人は来ねえよ」

向こうのセリフをぶった切り、簡潔に告げてやる。

「そして……」

M Cを起動する。特有の機械音が耳に届いたところで、再度口を開いた。

「お前らも、ここで終わる」

「なめん——が……」

群がる集団の内、一番最初に吠えた男の顎を打ち抜く。男の怒声は急激に弱々しくなり、そのまま言い切ることなく崩れ落ちた。

「なっ！？」

「お前っ！？ いつの間に！？」

「やめとけ」

両サイドで驚愕する男たちに話しかける。

「何が起こっているかなんて、お前ら如きにや分からねえだろうよ」

「はあっ!!」

「ふっ!!」

俺の一言に血が昇ったのか。男たちは魔法を使う事も無く殴りかかってきた。

「よ……っ」と

当然、身体強化を纏っている俺の方が、動きも威力も早い。相手の拳が届く前に鳩尾を蹴り飛ばし、2人とも戦闘不能にしておく。

「魔法使いに対し素手で殴りかかるなんざ、どれだけ素人だ」

「喰らええっ!!」

「ふん」

放たれた魔法球を、身体強化を纏った拳で打ち砕く。

「なっ!?!」

「戦闘中に気を抜いたら、その時点で負けだ」

「がはっ!?!」

男の懷に転移し、腹に一撃をくれてやる。何の抵抗もなく倒れた。……さて。

「その餓鬼を殺せ!!」

最初に俺に目を付けた男が、周りの仲間 commands。どうやら、あの男がここでのリーダーらしい。初めにあの男を無力化し、周りの奴らに降参を促す手もあるがそれは無しだ。あの女は、殲滅したがつてからな。

「精々楽しませてくれ」

ざっと30人くらいか。望むところだ。

「はあっ!!」

「お?」

同じく身体強化を纏った男が殴りかかってきた。顔面を狙うその拳を、右腕でいなす。そのまま無防備な顎に、足を振り上げた。

「ぐおっ!？」

「切り刻まれる!!」

「あん？」

目の前の男が気を失い、仰向けに倒れたところで。正面から、風の付加が掛かった魔法が数発、放たれた。俺は魔法を発現しようと詠唱の構えに入っていた男のうち1人を選び出し、俺の目の前に転移させる。

「リア——へ？ うぎゃあああああっ!？」

何かがおかしいと気づき、顔を上げた時にはもう遅い。男は何の抵抗も無く風の刃によって切り刻まれた。

「き、貴様ああ!! ぐはっ!？」

「何怒ってんだよ。お前の魔法がやったんだろぅが」

怒り狂う男の首を薙ぎ、意識を刈り取る。

「おらああああ!!」

「数いりや良いつてもんでもないぞ」

今度は3人同時だった。全員が身体強化を纏い、俺の元へと突っ込んでくる。俺は俺の真上に座標を固定して転移魔法を発動させた。

「ぶぼっ!？」

「ふげっ!？」

「だぶっ!？」

突如標的を失った3人は、仲間同士で無残に打ち合った。

「ほいっ」と

「ぶっ!？」

着地がてら、1人の男の頭上に足を乗せ、そのまま地面へと振り下ろす。踏み抜かれた男は、そのままぴくぴくと痙攣し、動かなくなった。その間にも、同士討ちで蹲る残りの2人を蹴り上げて戦闘不能にしておく。

「ん？」

体の動きが、突如鈍った。

「……これは」

「掛かったな！！ 俺の重力魔法はすげえだろ！！」

瞬間、足元に魔法陣が展開される。どうやらトラップに引っかかったらしい。

「今だ！！ やっちまえ！！」

今度は5人がかりで襲ってきた。

「……いい加減、集団で襲う非効率さに気付け」

転移魔法を発動する。今度は、俺だけじゃない。この重力魔法を発動したと思われる男を、俺の代わりに魔法陣の中央へと跳ばしておいた。

「ひやははは！！ ぼこぼこにしてやれ——って、よせ！？」

大笑いしていた男が、俺を襲おうとしていた集団が自分に向かってきている事を悟り悲鳴を上げる。大きな音を立てて、計6人のアホどもはまとめて潰し合った。

「な、何なんだコイツ！！」

「とんでもなく、早え！！」

俺の動きに畏怖した2人との距離を詰め、蹴り飛ばして無力化する。……残りは、15ちよつとか。俺の動きを早いと感じているように、俺には勝てねえよ。

「どけいっ！！ 俺がいく！！」

「？」

たむろしていた中でも、特に大柄な男が仲間を押しつけて俺の前に立つ。

「餓鬼、お前……なかなか近接術に優れているな」

「どうも」

「だが、ここまでだ。俺は1発や2発顎に貰った程度じゃあ、倒せやしねえよ！！」

「そうかい」

少し、スタイルを変える事にした。纏っていた身体強化魔法に、属性を付加する。付加するのは——。

「さあ、掛かってこい！！ 捻りつぶして——かはっ！？」

男のセリフを聞き終わる前に、攻撃特化・火の身体強化を纏った俺の拳が、男の腹を捉える。口しか動かしていなかった大柄の男は、そのまま後方へと吹っ飛び体育館の壁に打ち付けられて地面に伏した。

「言いたいことがあるなら魔法で語れよ。これは餓鬼の喧嘩じゃないんだぜ」

「やつ！？ やめびぶべっ！？」

もはや打ち抜く必要もない。恐怖に慄く男との距離を詰め、火の力を纏った掌を撫でるように男の顔へと添えるだけで、その男は地面へと叩きつけられた。やべ、これはやり過ぎだな。足元でぴくぴくと痙攣しながら呻く男を目に、そう思った。大柄の男には良い具合だったんだが、ほかの奴らには効き目が強すぎるか。

そう考え、身体強化魔法はそのままに、付加していた火属性だけを消し去る。気を取り直して、俺から一番遠くにいる男へと目を向けた。

「お前、足元気を付けた方が良いな」

「へ？」

1人の男を指差しながら、そう忠告する。その時にはもう、男の姿は俺の視界から消えていた。

「う、うああああああああつ！？」

頭上から、男の悲鳴が聞こえる。転移魔法により、突如体育館の天井付近に跳ばされた男からすれば、急に足元から地面が消えたような錯覚に陥っただろう。そのまま男は成す術なく地面へと叩きつけられて動かなくなった。

「ぎやつ！？」

「ぐは！？」

「げぼつ！？」

「ぴぎいっ！？」

不可思議な現象に目を奪われているバカどもを、殴り飛ばし蹴り上げ押しつぶす事で無効化する。俺へと放たれた3発の魔法球は、

位置はそのままに向きだけを反対側に転移させる事で元の位置へと戻り、術者自身を仕留めていた。

「あと10人ね、あ、9か」

手短な男を蹴り上げ、そう呟く。

「はあっ——うおわっ!？」

殴りかかってきた男の拳をガードする。そのまま一本背負いで投げ飛ばしてやった。

「おとといきやがれー」

壁へと打ち付けられ意識を失う男に、そう告げてやる。もう聞こえてないだろうけどさ。

「ほっ」

「ぐひゃっ!？」

「はっ」

「ずべっ!？」

「とう」

「ごぼっ!？」

続けざまに3人ノックアウトする。そこで、俺の周囲にはもう誰もいないことに気が付いた。

目を向けた先。体育館の最奥。檀上になっているところに、リーダー格の男を中心として5人の男が構えている。

「やるな」

リーダー格の男が、口を歪ませる。

「姫百合家の当主は、良いボディーガードを雇っていたようだ」

「そりやどうも」

「動くな」

称賛を払いながら足を進めようとしたところで、制止が掛かる。

「俺の隣に立つ5人は、既に魔法式を組んでいる。俺の合図1つで、それは直ぐにでもお前を捉えるだろう。この距離だ。お前が俺を捉えるよりも、こちらの攻撃の方が早い」

いや、普通に俺の方が早いけどね。

「お前のような輩が居たのは、こちらにとって誤算だった。今日の所は引くとするよ。俺たちはここの裏口から外へ出る。お前がその間そこから動かなければ、魔法は発動させないと約束しよう」

そう言いつつ、リーダー格の男は後ろにゆっくりと後退した。

「まあ待てよ」

それ呼び止める。

「なんだね？」

男の問いかけと同時に、横に控えていた男の内1人を俺の手元へと転移させ、そのまま頭を掴み地面へと叩き込んだ。凄まじい音が響く。殺してはいない。頭蓋骨にヒビくらいは入ったかもだけど。その光景を見て、リーダー格の男は目を見開き素早く自身の左右へと目を奔らせた。5人控えていたはずの仲間が、1人足りない。それを確認した男が、再度俺の方へと目を向ける。

「分かったろ？」

にやりと顔を歪めながら口を開く。

「アンタの条件じゃ、俺が見逃す理由にはならねえな」

「くっ！？」

素早く身を翻そうとした男を見て、即座に転移魔法を起動させる。壇上に跳んだ頃には、既に俺に背を向けて駆け出しているところだった。

「なるほど、裏口ってそこね」

壇上の横。赤い垂れ幕の影になっている部分に短い階段。下は舞台袖となっており、そこに出入りするための扉も付いていた。目で見てしまえば、頭の中でイメージできる。座標が固定される。男たちが手を掛けるより先に、俺は扉の前へと転移していた。

「なっ！？」

「急に逃げるなよ。つれねえな」

「お前っ！？ いったいつ！？」

「その質問は、聞き飽きた」

リーダー格に一撃をくれてやる。狭い階段を駆け下りていた男た

ちは、前方から飛んできたリーダー格の体から逃げ切る事は出来ず、そのまま潰され階段を転がる。

「終わりだな」

4人の男たちは、何かを言いたげに口を開いたが、別に見逃すつもりなど欠片も無く、容赦なく顔を踏み潰す事で意識を刈り取った。はい、これで終わり。

伏す5人を避けながら壇上へと上がる。見渡してみると、見るも無残な男たちがごろごろと転がっていた。全員、殺してはいないはずだ。どこかしら骨が折れるなりなんなりしているだろうが、こういった仕事に手を出した以上、当然のリスクだと思って貰いたいね。「ふああ」

欠伸が漏れる。携帯電話を開いて見れば、もうそろそろ日付が変わろうかという頃合いだった。

舞台袖に視線を向ける。そこには、ここでのリーダーであろうと思われる男が、手下どもの下に埋まり気絶していた。

「つまんねー奴だったぜ」

吐き捨てるように、そう呟く。戦えば、たぶんそれなりに強い奴だったと思う。それなのに、ハナから逃げの姿勢とは。面白くもなるともない。拍子抜けし過ぎだ。面倒臭いという言葉すら出ず暇が無かった。公衆電話から電話してきた男含む残りの連中は、もう少しまでもな奴らだといいいんだが……。

俺は手に持っていた携帯電話を操作して、耳元に当てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945w/>

テレポーター

2011年10月3日19時31分発行